菊池先生が水戸中學校長時代に、例の新思想を生徒に吹き込んだ事件から、時の知事守屋源次郎君と大喧嘩をして、遂に隱退のなむなきに至つて以來、彼れは村翁の生活に餘生を樂み、青年の來たるあれば夜を撤して談ずるといふ志士の面影を忍ばせてゐたが、突如として、俗世界も俗世界の日比谷座へ、水戸から乘り出して來た。

一厘の金も使はず、一回の戸別訪問もせず競爭者を遙か谷底に蹴落して悠々當選して來た。弟子たちが、勝手に擔いで、勝手に(?)當選させて、勝手にひつ張り出した恰好は、前回の仙波太郎中將が岐阜から當選して來た事情とよく似てゐる。

菊池先生は高風正義の士といつた感じの志士である。敎育家としては申し分ない人物であるがさて政治家としては？　頗る疑問である。先生に政治家として大いに俗界の陣頭に立つ決心ありや否やは知らない。餅屋が魚屋を開業して必ずしも成功せざる如く、天下一品の敎育家必ずしも政治家としての及第點は取れない。そこをちよつと心配するのである。その餘生を淸からしめん爲に……。

內ケ崎　作三郎

彼れの出現に對して、世間は異常の興味を投げてゐる。永井柳太郎君が早稻田から乘り出して

人氣役者となつた如く、內ケ崎君も早稻田大學敎授として議政壇上に名物としての一位置を占むるであらう、といふ期待がかゝつてゐる。

その成否は分からないけれど兎に角、彼れは永井君と同樣靑年の人氣を集めてゐる名物男中島鵬六君を向かふにまはして、勝利を得た武器は、辯論その物である。鄕國はあらそはれぬズウ々々辯でウキットに富んだ辯を流して行く調子には、永井君の線の太い辯舌に對して、また別な味はひがある。だから、彼れの初演說が日程に上れば、必ず傍聽券の爭奪戰が初まるであらう事受け合ひ。

內ケ崎君は早稻田出身ではない。英文學ををさめた文學士である。にもかゝはらずすつかり早稻田畑の『內ケ崎』になり了つた。いはゆる學者離れのした、政治家としての素質十分な點が然らしめたのである。ゆゑを以て、惡口屋は『ホラガフキ作三郎』などゝ申す。然しながらクリスチャンで人格者、といふ定評にはいさゝかも異議はない。

彼れが英國に略學中、チー●バーティにまねかれ、席上藝くらべの段となる。由來政治家に誠意のあつたためしなきが如く、クリスチャンに藝のあつたためしはない。そこで彼れは、椅子の上に突つ立ち上がり、大聲で君ケ代をうたつて喝采を博したといふ話しがある。政治家のコツはこれで十分だ。その調子々々。

次官から

竹内友次郎
若宮貞夫

次官級の代議士がボツ〳〵ふえて來た。前内務次官の小橋一太、井上孝哉の二名は新顔でないけれど前逓信若宮貞夫、前農商務竹内友治郎の二君は、いづれも權兵衛内閣の瓦壞で退却ぎはに勅選に漏れた人々である。

竹内友次郎

一名西瓜次官の尊稱がある。臺灣西瓜といつしよに内地に移入されたからである。とだけでは説明不足のおしかりを受けるかも知れなれないが、由來臺灣は年中西瓜を産するにかゝはらず、ばいきんが取つついているからといふので、おなじ日本でありながら内地に移入が出來なかつた。だからわざ〳〵對岸の支那へはこんで、まはりまはつて『支那産でござい』と税關をごま化しては移入してゐた。政治家といふものは、大きい不合理はちつとも構はないが、小さい不合理にはよく構ふもので、田臺灣總督が、農商務大臣となつて東京へ移入さるゝや、快刀亂麻といふ調子に西瓜移入を斷行して、糖尿病患者に福音を與へたものだ。恰度その初荷がくると同時に、わが竹内君は、彼のつる〳〵した額を撫でながら臺灣の警務局長から農商務次官として移入されたのだが、在任たつた四ヶ月、權兵衛内閣崩壞と共に西瓜だけ殘してまたツルツル額をなでながら退却のやむなきにいたつたのは氣の毒のいたりである。

彼れは、田男の最高子分である、彼の衆議院出張所主任である。頭髪極はめて疎にして、額はツル〳〵、しわだらけの顔に鐵ぶちの目鏡をかけた調子はお上り議員のそれより貧弱だが、實は極はめて切れ味のすごい才物だ。イギリス法律學校出で遞信省の官吏となり高文をパスし、金澤の郵便局長を振り出しに樺太出征軍郵便部長、つゞいて樺太廳産業部長から時の遞相田君に認められて一躍東京遞信局長、お次ぎは親分辭職で齋藤實男に引つ張られて朝鮮の遞信局長……。

そこで可なり刀をふるつて整理改善を試みた上、また親分に引張られて臺灣のこれはてうど畑違ひの警務局長に据えられたのは、皇太子殿下が臺灣御巡遊前の事、凄い所で臺灣人を壓迫し、上海朝鮮方面からともすれば入り込む不逞の徒の侵入を防ぎ、天晴れ親分の見込み通り無事に殿下をおかへし申し上げたのであつた。お覺え益々目出度からざるを得ず。西瓜と共に次官に移入するまた理ありといひつべしだ。仕事は勿論やる、といつて一片の事務家ではない。政治家肌たつぷりで、文章がうまく演説はまた實に手に入つたもので、酒もくらへば女も買ふ、なかなか面

白味のある男だから普通の役人上がりといつしよくたにされては第一親分が不平だらう。

若宮貞夫

竹内君とは聊か肌合がちがふ。まづ趣味からいつても、玉が二百程度、庭球なら(尤も軟球で)選手權獲得位の腕前、大學時代には、前の文部次官赤司君と共に、玉とテニスにばかりこつてゐたといふがどつちかといへば書生氣質の拔け切らぬ方だ。キヨロ〳〵した眼玉に角刈の頭髪も、あれでは法被でも着せれば、形ちだけは立派なべらんめえだが、腹はさにあらず、如才のない人物でおとなし向きの好事務家である——といつて政治家の資格なしと斷定しないから若宮君怒つてはいけない。まあ聞きたまへ。

遞信省には管船局派と通信局派との二派がある。そして管船派は長い間省内の政權を握つてゐた。若宮君は長く管船局長をした揚句犬養遞相に引立てられて次官となつた。管船派益々勢ひをなしたのだが、何しろ省内の六割は通信系統だからその不平を押さへて行くのは可成の苦心を要したらうが、彼れは(尤も在任四ヶ月に過ぎぬ)兎に角、これを押さへて立派な次官で通つたのである。その點で政治家たるの及第點をつけて進ぜる。よもや不服はあるまい。

卅二年大學を出るからづつと遞信省に巣をくつたのだから、遞信系統の事務政務にはことゞく通曉してゐる。で衆議院において、その方面では第一人者である。彼れが政府反對に立つた場合、委員會においては確に政府委員の苦手たる事受け合である。

彼れの仕事の中の白眉は、歐洲大戰中、船舶管理を斷行した事だ、仕事の出來る男たる事これで明瞭、——若宮君は父子二代の遞信づとめ、父君正音氏は、通信局長までいつた人だから、貞夫君たるもの今後といへども遞信所管を以てその專門とする位の因緣は充分ある。ついでに申す。

豪傑學士　山口政二　小島七郎

中島島六、南鼎三、春日俊文等々々、前世紀の豪傑が枕を並べて討死を遂げ、中に蠻寅一人「前代議士」で巾を利かして居る中へ、新世紀の豪傑小島七郎、山口政二の二君を迎へ入れた事は、我が憲政史上禿筆小書するに値するものと信ずるのであります。

山口政二

山口は隻眼の豪傑で、獨眼龍南鼎三のなき後は、山口獨眼龍の名をほしいまゝにするの仁である。南のそれは聞き洩らしたが、山口の獨眼龍のそも〳〵は、彼れが一高時代、野球の彌次隊長で『フレェ〳〵一高』の指揮棒を眼に突き込んだ爲とか聞き及んでゐる。これで判る如く、山口は一高式豪傑の代表タイプである。弊衣破帽、醉うて高らかに詩を吟ずれど、その次ぎの幕の不品行には緣の遠い代物である點に着眼を願ひたい。隻眼で大學(獨法)に進み、隻眼で優秀の成績で卒業し、朝鮮の郡司となつたり、青島の民政署に月給をもらつたり、人並につとめもして見たが由來豪傑で浪人肌の彼れには滿足につとまる筈がない。或ひは馬賊の群に投じ、滿洲の眞只中で醉うて野宿した事稀ならずといつた風の、痛快な男ではあるが、さりとて世にありふれた落第生的豪傑ではない。その證據には彼れの同鄕(埼玉)の先輩で、一高の歷史の先生である博士齋藤阿具氏はその人物に惚れ込み、愛娘を以て彼れの偶としてゐるに徵しても明らかである。

役人が駄目だから、東京に歸つて辯護士を開業して見たがそれも頗るはやらない。從つて貧乏はおあつらへ向きにこの豪傑につきまとつてゐる。その雄辯を以て言論一點張り、理想選擧で、强敵萬年候補の長島隆二を破つて凱歌を奏し得たゆゑんは その眞情の發露によるものだ。彼れは小粒でピリリとくる性の男だ。中立ではあるが護憲の一票である。彼れに期待する所は、衆議院における『小粒でピリリ』の彌次でなくてはならぬ。わすれても『前世紀の豪傑』であつてはしくない。

小島七郎

身長六尺、體重三十四貫、大錦よりも偉大な體軀をもつたのが小島七郎君である。先だつてのメートルデーに日本一のレコードをつくつて、農商務省の廣告に使はれた程のふしあはせな男である。餘り自分が大きいので 俥には乘れず、電車には入り口がせま過ぎてはいれず、足袋や下駄や、着物やシャツは別あつらへにせねば間に合はず親に不服をいつたつて今更追つかぬ程のふしあはせな男で、まかり間ちがつて法學士なぞになつたからなほ始末が惡いのである。もし力士にでもなつてゐたら兩國でこの五月場所には、横綱位張つてゐたかも知れないものを、日比谷で陣笠を被つて贊成不贊成にやせ男と一緒くたに一票にしかならぬとは誠に以て氣の毒千萬に生まれついた男ではある。一票になるにも問題があるといふは、彼れは人間並な議席には腰かけられぬといふ一件で、衆議院事務局は、彼れの爲に特別な議席を作つた事である。國費にまで影響を及ぼす丈夫は少し閉口だ。野田大塊大と雖も、彼れには一歩を讓つて廿八貫、まあ元老株より偉大

といふ所でなぐさめるより仕方があるまい。

小島は、三木武吉の子分で、牛込の區會議長、牛込區選出東京市會議員である。三木は第一黨の幹事長として、いゝ豪傑を子分に持ち、いざ鎌倉といふ際には甚だ氣强いだらうと思はれる。

三木の子分で、身體の大きい事ばかりかいてゐると、彼れはいかにもねうちの少い代物に見えるが、茫として捕捉しがたき性情の裏に、數字にあかるい頭腦の持ち主である點に、親分の足りない所をおぎなつてなほ餘りありといッつべきものがある。かういふ人間を眞直ぐに仕上げて行くと、或ひは三木なんかよりいゝ政治家が出來上がらないともかぎらない。小島は、原敬の俳句の先生の田村順之助を栃木縣でたゝき落として出て來た男、身體と同樣番くるはせの部に屬してゐる。

小島君いまや東京市會議長、これも一重に三木親分のおかげと巨軀をゆすぶつて感謝してゐる。

醫者　宮島幹之助　吉津度

理學博士、醫學博士松下禎二が埋葬された代りに、同じく理學博士、醫學博士宮島幹之助君が出て來た。大阪の北區で中橋君を叩き潰し、最高點で當選した吉津度君も三等軍醫である。扨て、國政を診療するのに、宮島博士と吉津三等軍醫とは何ちらが名醫か。　議會では博士も三等軍醫も診察料に高低はないと共に承知しておきたい。

宮島幹之助

君は醫學博士ではあるが、患者に接したことのない博士で、もし肩書にほれて脈でも取つてもらはうものなら、殺されてしまふかも知れない。本來が理學の方で、その專門も微生物學——動物學者としてはオーソリチーであつても、脈を取る術さへ知らぬ醫學博士だ。

北里柴三郎の片腕で、北研は彼れの治下にある。斯界における勢力はえらいものだが、政界においては全く新米の未知數である。けれども、肌合は學者といふより、政治家向きで、金杉英五郎に政策と辯舌を加へ、松下禎二にもつともらしさを加へた、といつたたちの男である。中立とはいつてゐるものゝ、親分北里の系統から推して、當然政友本黨の一票である。十分に政治的野心があり、押しも利き辯も達者だから一山十錢の醫者學者以上の働きはするであらう。まづ彼れに期待する所は、松下の埋葬法案に對して、積極的に乳兒保護法案かなにかでなければならぬ。彼れは、自分の專門に根ざした社會政策については、熱心な研究者で、客あり、談たま〳〵こゝ

に及べば、相手の迷惑位は三年も辛棒して懸河の辯を振ふのである。

米澤において、憲政會の警視總監候補者黒金泰義を蹴落とした手際はいゝが、その演說會に敵派が入り込んで彌次つたら、まじめになつて、警察に訴へ出で、聽衆が紳士的態度を採る樣に取計らつて呉れろといつたあたりは矢張り研究所の博士らしい。議會でもし反對黨が彌次り拔いたら總理大臣にでも訴へ出る積もりかも知れない。が先生、敎へて上げる、國會議員は、モルモットやアミイバの樣におとなしくない。人間のうちでも最もあらつぽい種族なんである。そこをよくのみこんで、聽診器をお取りなさい。

吉津度

前にも政友公認で出たが、先輩中橋の犧牲候補に終つた。こんどは敵同士、決死の覺悟で戰ひを開いたといふ證據に、滿鐵と東京某銀行につとめてゐた弟二人を辭職させて應援に來させ——も一人それは彼れの深い仲である北の新地のそれがしといふ美妓に、『わしは死ぬる覺悟で戰爭を始めるよつてに、あんたとも手を切るんや、死んだと思うてあきらめてんか』美妓もさるもの、直にこれを諒とし、『よろしうおす、あてのことは、どうなとよろしいよつて、あんたはんきつと勝つておくれやす』斯くして彼れは戰ひに臨んだ。——その美妓が、吉津君勝利の報を聞くや、

その事務所へとび込んで、『あて、うれしおす！』とさけんだなり卒倒してしまつた。參謀連介抱して漸くいきを吹きかへしきいて見れば吉津君と手を切るなり、奈良は志貴のびしや門へこもつて、七十日の間水ごりをしつゝ吉津君の勝利を祈願してゐたので悉皆貧血になつて昂奮の餘り卒倒……參謀連その芳志を多とし再びとりもつてもとのさやにをさまつたといふ『選擧美談』の一節——。

さて吉津君は、三等軍醫で佐多博士の身代りではあるが大阪細菌研究所長で、先の府會議長で實は醫者としては、決して大した代物でないけれど、議員稼ぎにはおあつらへ向きの人物だ。策士で、强か者で、熱の强い男だから、醫者では飯の食ひあげとなることがあつても、議員をやつてゐさへすれば、何とかならうといふたちの男である。といつてもおこるに當たらない。後藤新平といふ子爵は、矢つ張り醫者で、醫者ではとても飯の食へない方の藪であつたが、志をいれかへて政治道に足を入れたため、いまでは天下の後藤になつてしまつた。後藤だつてさうだ。まして、中橋を眼下に見下して最高點をとる程の男だもの、しつかりやれば後藤位をあごで使ふ位の政治家にならぬともかぎりはしない。運は、何んな所にかくれてゐるか、わかつたものぢやないんだから——。

名夫人

井上雅二
今井健彦

その細君が有名である程の幸福にして且つふしあはせな初舞臺が二人ある。曰く井上雅二、曰く井上秀子の良人、筆名山田邦子の夫今井健彦の二君である。

今井健彦

今井は政友本黨の『發表』によると、政友會を脱黨して本黨に走せさんじたものゝ筆頭である。ところが本人は例の村夫子然たる顔に青筋を立てゝ『幾らおのれが陣笠だつて、一應のことわりなしに勝手に本黨へ入れてしまふのは輕侮も甚だしいぢやないか！』と憤慨して選擧區千葉縣の新聞に『本黨に走らざる』ことを廣告してゐるから面白いぢやないか！　内情をきいて見ると、吉植庄一郎が一人で合點して、一人で本黨の一票にかぞへ込んでしまつたらしいが、今井にして見れば、根が政友會生え抜きの人間で、幹部の三四こそ、政友、本黨で角づき合ひをしてをれ、彼れに取つては夫婦喧嘩の間にはさまつた倅なのである。氣の毒な事に本黨の『發表』以來近所

でもきまりが惡くて風呂へも行けぬ位、憤慨兼悲觀したとある。――彼れの夫人はアラ、ギ派の歌人で美人で有名であるが、今井それ自身は夫人とはいさゝかも系統のない非歌人の非美人(?)である。腹と人情があつて捨石になつて働らくことを辭せぬ、一寸珍らしい型だ。

かくして政友會のために粉骨碎身に働いてゐる。夫人が有名なために、その引合に出されてゐるがそれは彼れの爲めには寧ろ氣の毒である。今井が、輸入候補で、土地ッ子の鵜澤宇八に千票も勝つたといふのは面白い傾向であるが、前回の選擧に四十何票の差で鵜澤にまけたのである。所がその後鐵道は敷く郵便局はつくる、あらゆる忠勤を選擧區に拔きんでた爲に輸入にもかゝはらず『今井を出さなきや義理がわるい』までに信望を厚くしたものだ。廿五圓か卅圓の借屋に住んでゐる今井に金のあり樣がない。そこで選擧區から一萬圓程の寄附、米何十俵の寄附が集まつたといふ次第で『親切忠實』第一主義がうけたものらしい。何でも彼が洋服一着の着たまゝで一ケ月不眠であるいたといふので『今井は洋服が一着しかないのだらう。ひとつ寄附してやらう』とあつて佐原の青年からモーニング一着寄附に及んださうだ。村夫子、これを一著に及んで議席に著いてゐるのである。

井上雅二

井上は女子大學の副校長格井上秀子の良人で雅二と申しては知る人ぞ知る位の程度だが秀子と申せば日本中知らぬ人は餘りないといふ程の女傑である。だから井上はその力で森村市左衛門に食ひつき、南洋に羽をのばしたのである、妻君に感謝せずして何とせう。——井上も今井とおなじく新聞記者出身である。早稲田出身で南洋移民協會を作り大隈侯をその親玉に擔ぎ上げ隨分とその世話になつたものであるにもかゝはらず、前回は政友會の公認として出で、今度は分裂したから何つちつかずの中立を看板に打つて出た程の利口者である。だから故伊藤公のキンタマを握つて朝鮮の宮廷に入りこみ、南洋公司の專務となり、各方面に知己を有して可成な『活動性』を持つた男である。

だから、新米ではあるが、目下純中立の團體を作る爲に働いてゐるから、將來相當にやり出す可能性をもつた男として認めてやらねばならぬ。彼れは秀子といとこ同志の間柄で、秀子は女大彼れが早大生の時分に結婚した間柄であるが、雅二が朝鮮くんだりを流れて歩き、秀子が歐米を漫遊してゐる間、夫婦分れてゐる事が長かつた爲か、雅二は、朝鮮で丸髷の女中を召しつかつて、秀子心配の餘り朝鮮に乗りこんだ事あり、植民地氣質で大酒をあふつた事もあるが、二人共東京に歸つて來てからは、夫婦は極はめてむつまじく、雅二女を買はず酒を飲まず、秀子やきもちをせず、雅二の當選を子供の樣に喜んで廣告してゐるといふ風、四海波ことぐく平穩である。

秀子は由來女の政治家であるが、婦人參政權を認められぬ日本では、その社會政策は、野にあつてさけぶのみである。そこで、立法府に一票をもつた雅二君は、さしあたり秀子女史の衆議院出張所長になるだけの義務と義理は充分にあるといふものだらうではございませんか。

首相の鞄

大麻唯男
松本忠雄

大麻唯男君は清浦首相の秘書官、松本忠雄君は加藤高明子の秘書——清浦さんが投げ出せば唯男君も高等官三等を投げ出すし、又一方加藤さんが大命を拜受すれば忠雄君が高等官三等になり秘書の下に官をつける。唯男忠雄の入れかへ…となると全くたゞ事ではない。

大麻唯男

宴會の切りまはし術にかけて、清浦内閣では大麻君の右に出づるものはあるまい事程左樣に心得たもので圓轉滑脱、客に酒をすゝめ、自らは勿論大いにあふり、醉へば必ず一席かくし藝を出す。多藝多能の士だから自ら放言して『おなじお客樣に、おなじ藝をお目にかける樣失禮はしな

い』と自慢する。だが大將禿頭ばかりは餘程氣になると見え、あらんかぎりの術をつくしてピカ〳〵を見せまいとし、禿頭の事を口にせざらんと欲す……もつともさ……未だ若年卅六にして、毛髪の存在を疑はれるなどは清浦内閣存在の義意を疑はれるよりまだつらい。禿げ頭ではあれ、背は高からず低からず、眉目秀麗(?)の好男子、才氣煥發といふ所で美人連にも好かれ、いろいろとつやつぽい種も散在するとは誠にうらやましい話しである。

大正三年の大學出で、すぐ内務省には入り、次いで山形、山梨、神奈川とうたひ、踊りつゝ理事官稼ぎをして本省に歸り、警保局の外事課長になると間もなく同縣の大先輩清浦子首相となり、而も同縣で親の様に可愛がつてくれる小橋が書記官長、そんな譯で秘書官になつたわけであるが幸ひにして役人根性を置きわすれた男だから、内外頗る好成績、一層の事、清浦さんと位置を入れかへたらこの内閣はもつと續いたかも知れない。まあ代議士の及第點は十分つけられやう。立候補については『立てば勝敗共に役人生活をやめねばならず――まだこれからだがな』と餘程考へたらしいが幸ひにして踏み出しに及第したからきれいさつぱりと小役人の足を洗つて天下の政治家になりかけた次第――そこで何と唯男君、お酒を少々つゝしみなさいよ。禿がこの上スピートをかけては、それが氣になつて總理大臣にならぬうちに死ぬかも知れないから――。

松本忠雄

君は、大麻君ともちがつて役人の經驗がない。加藤子の秘書になつて七八年にもなるが、それも子が在野時代から今に引續いてゐるので『わが黨内閣の役人』の甘汁をなめたことがない――秘書官のぞろぞろ出てくるのは『わが黨内閣』時代と相場が極まつてゐるけれど、忠雄君はその出現に先だつて、山本達雄男の最高子分小坂順造君を見事たゝき破つて、長野縣から出て來た。大きくいへば松本の當選は、憲政會に政權のくる前ぶれである……なァんていつても松本君よ、そんなにはづかしがるには及ばない。彼れは東亞同文書院の出身でやまと新聞の記者をしてゐた。たま〳〵、在野の加藤子支那視察に出かけるや案内役として隨行して、歸つてくるころは、もう秘書になつてゐた。もち米の團子の様に丸々と太り、すべ〳〵と光澤のいゝ彼れは、なか〳〵に子のお氣に入りである。

かれ、おん年三十八にして未だ家をなさず、いや家だけはなしてゐるが、中に鎭座ましますべき若き女性に缺けてゐる。粟山博君と好一對のオールド・ミスターである。それで、彼れは酒をのまず、たばこをすはず、品行方正學術優等の……といひたいが、品行は多少? を要する様だ。といつて必要以上に? の譯ではなく、腹がへれば飯を食ふのはあたり前の話し位の程度――何故

獨身であるかといふに別に失戀の結果でもなさ相だし、親のゆるさぬ女がある譯でもない樣だ。だから代議士になつたをきつかけによき女性を彼れの爲に得たいと、友人共が心配してゐる、讀者諸君も一つ心配していただきたい。女房を大切にする事、筆者責任を以てこれを保證する。獨身だから、といふ譯ではないが、彼れはなか〳〵の勉强家で、いろ〳〵と調査研究をしてゐる、眞面目に申し上げて代議士では種のいゝ方だ。

圓轉滑脫、年中ニコ〳〵してゐる男だから、總理大臣秘書官はみんごと及第、おやぢがあの通りの鼻つ張りを强くすべからざる事を御註文申し上げ候。敬具。

追記松本君、いま東京市の助役で年俸一萬圓、これも一重に加藤さんに用ひられ、三木武吉にくひついたおかげ、加藤が死んでも彼れは困らない。

地方長官

俵孫一　折原巳一郎

片や先の北海道長官俵孫一君片や先の兵庫縣知事折原巳一郎君、前者は憲政臭ぷん〳〵だといふので床次君にちょん切られ、後者は政友臭ぷん〳〵だといふので加藤君にカツ飛ばされた好一對。然り而して折原君は本黨、俵君は憲政で明ら樣な色を塗つて出て來た。さあ〳〵内務大臣邊などこつば役人に遠慮は要らん、暴れた暴れた。

俵孫一

俵君は、あれでも、内務大臣濱口君と同級、廿八年の大學出だ、下岡君が十年前に内務次官の時分、三重から宮城へ、それから北海道へ、せめてもの友情に榮轉させられて、いゝ氣になつて腕をさすつてゐる最中、内閣がかはつてしまつて、電報一本『後進に途を讓られたし』と來た。浮草稼業のはかなさ身にしみて以來、權兵衛内閣で、拓殖事務局長といふ、長官から見れば位の下な椅子でももらつて、まあ〳〵と役人慾を滿足させたもちよつとの間であつた。

駒込三菱村事大和村の村長位では腹の虫が承知しない。ウヅウヅしてゐた所が、運はいつまでも『後進に道を』ふさいではゐなかつた。强敵島田俊雄君を破る、お次ぎは憲政内閣となれば、内務次官位にはありつけ兼ない天下の形勢である(現に内務政務次官)。證據には故人下岡君が在野時代に手形をかいた『俵君は内務行政にかけては實に稀に見る通曉家で、次官としては適任です……』とこの手形不渡りに終らざらん事を祈つてゐる中に、それが實現した。

島田俊雄君は、前回の對戰以來すつかり俵君を見くびつてしまひ、『俵が出ればおれは寢てゐても大丈夫』と高をくゝつてゐた、何ゆゑに然るかといふに、前回、俵君は演說さへすれば票がへるといはれたものだ。『不肖私は恐れおほくも天皇陛下から正何位、勳何等を頂戴いたしました……』と官臭ぷんぷんたる所を辯じつゞけたので、草深い島根の里人共も鼻をつまんだからである。

ところが、その後の苦節四年『人民』の苦勞が積んで、島田君を敗つたのは、相手には氣の毒だが政治家としての一階段を上つたものだ。策もあり、勇氣もあり、臨機應變の才氣に富んだ彼れ、相當に足をのばす可能性は十分ある。彼れの堂々たる風彩は、次官どころか、總理大臣としても若槻さんよりは餘程貫錄がある。

折原巳一郎

前任地神戸市の本黨側からは、貴下は名前を貸すだけでよろしいから立候補を承認してくれといふ樣なうまい据ゑ膳に、應揚に箸をとつたものだが、さて出て見れば指定縣の長官樣で、神戸市民の如きはウヂ虫同樣に心得てゐたとは大分に味が異つて、自分の使つてゐた小役人から、お出入りの八百屋にまで頭を下げねばならなかつた。だからいはんことぢやない生れ故郷（群馬）

から武ト金氏でも相手にすればよかつたのに。

自分から讓つて郡部に廻つた長身男の坪田十郎君は美事、前の遞信次官若宮貞夫君にふみつぶされる、自分は尻から一番で辛うじてそれでも當選——矢張り議員よりは、役人を勤め上げて勅選にでもしてもらつた方が勝手のよかつた事俵君と共鳴する所に違ひない。——だが然し、彼れは、そんな簡單に役人型にはめこまれる一筋繩の代物ではない。

靜岡に內務部長をしてゐる時分江間俊一、松浦五兵衛の一派と組み、縣の建築材料を政友系の知事につぎ込んだとか何とか問題で、疑獄事件を起こした事もある（無罪にはなつたが）以來ずつと非憲政のバリバリで、政權が床次一派にあつたならばと、うたた浮世をかこつ次第——。

千葉縣には知事として七八年の長い間在任したので、すつかり居ついて房州に別莊を持ち、今でも千葉市に住居してゐる。盛岡流に行けば、彼れは當然神戸市へ住居を移さねばなるまいが、まあ、それにも及ぶまい。次ぎは何うなるかわかりはしない。

性格は、悧巧で、變通自在で、豪傑肌で、斗酒なほ辭せずといつた風の男だ。ちよつと役人の仲間に入れておくのは惜しい位だ。かういふのは、なまなか勅選などにして溫室そだちにしちまふより野原の荒ッ風にさらして、ほんものにするのは、まあ大きくいへば國家の爲、民衆政治發達の上に効果があらうといふものさ、なんとお役人衆いかゞでござる。

野武士

内田信也
町野武馬

此の選擧で荒つぽい金の使ひ方をした兩大關は茨城の内田信也、若松市の野町武馬兩君との評判である。何んぼ使つたかは知る限りに非す。片や船成金、片や滿蒙成金ちつとやそつと荒つぽく使つても不思議はない。

内田信也

三井の一ブアー・サラリーマンから、一時は五六千萬圓の金持になつた内田信也君は、その事實だけで普通の人物でないこと自ら明瞭である。先年汽車の轉覆事件の時に、ヒックリ返つて客車の中から、頭を出し『俺は神戸の内田だ金は幾らでも出すから助けて呉れ』と悲鳴を擧げて、一層天下に名を高め、次に珍品事件をあばいて更に名聲の隆々たるものがあつたが、如何にも内田君の性質そのまゝ出てゐて面白い。何も首をすつこめることは要らん。

柔道は三段、一つ橋時代はボートの選手、相撲が大好物で邸内に道場と土俵を並設し、店員、書生それから來客までを相手に取つ組むが、その日の日課である、流石の彼も選擧區に道場がないので宿屋の二階から毎朝『エイオッ…』と掛聲をかけて、鬱を散じたとか。

彼れが金持になつたのはスポーツマン精神がこれをたすけてゐる。一本調子にその信念に向かつて突進する。併も機を見るに敏な彼れである見當さへ誤らなければ必ず目的地に達するのだ。彼れが金持になつたのはそれだ。珍品をあげて溜飲を下げるあたりも一本調子の性情からである。それが選擧に現れた。ある金を使ふ位の事は何でもない。それ丈なら通り一ぺんの成金だが握り飯を自動車の中でかぢりつゝ選擧區を廻り、熱心に主義主張を演說して歩いたものだ。この精力主義もスポーツマン・シップから出てゐる。スポーツマン・シップで金がもうかつて宮古啓三郎君をまかし得るなら、天下の運動家皆成金になつて代議士になり相なものだが矢張り三井の小僧からたゝき上げないと駄目だと見える。運動家諸君よろしく三井に頼んで小僧に使つてもらふべし。やぶにらみで坊主頭の彼れが腕をまくつて高ら聲で一席辯ずる圖は神田の青年會館物だが、しかも機を見、人を見るに敏なる彼れは、聽衆の腦の中心にヅドンと落ちる樣なポイントをちやんと摑んでゐる。食へん代物で。通り一ぺんの代物ではない。

町野武馬

滿蒙政策に關し便宜を得るために、巨萬の富を投じて出て來たのが町野君だ。北京公使館付き武官から現役の儘で張作霖氏の軍事顧問となり、いい心持ちになつてゐると突然何處かの聯隊長に任命されたので『聯隊長なんか馬鹿々々しくて出來るものか』とおつぽり出して終つた。それもその筈顧問をしてゐれば面白い仕事が幾等も出來る。滿蒙において事業をしようといふには是非共町野の手を通じて張作霖氏の諒解を得なくてはならない。その間金の入つてくるのは憲政の常道である。その上鴨綠江の水力電氣の權利をもらつた。これは金にすれば何十萬圓の價値か測り知るべからずといふ豪勢振、今度の選擧でも張作霖氏から軍資金が流れる程そゝぎこまれた。だから高きは一票五百圓に及んだなんて噂さへあるがその眞僞は保證のかぎりに非ず。だが然し彼れが着物に靴をはいてあるくくせとその細君の前身が北京の腕つこき藝妓八千代で、細君の働きの大したものである事だけは確り保證する。細君といつしよに張に取り入つてゐるのだから大したものだ。かういふ毛色の彼れは、いはゆるカーキ色ではない。さうかといつて支那浪人程貧乏性を帶びてゐない。豪傑肌を看板にして如才なく商賣氣たつぷり、十分金のもうかるたちの男である。中立ではをるが政友會では自分の方へ勘定してゐる。いざといふ場合には水力電氣の權利を半分も出してもらつて軍資金をつくるさ。そのかはり町野君には滿蒙政策に對する御高見をありつたけ演說させる樣に取計らふんだね。

縮緬と鮭　吉村伊助　堤清六

王が二人ゐる、一人は丹後の縮緬王吉村伊助君、一人は北海道の鮭王堤清六君である。王といへば大したものだが、親方位なものかも知れない。たゞ兩君共その道の第一人者である事は事實だから、その意味で、取組ませてお目にかける。

吉村伊助

憲政會で、漸く頭を持ち上げかけた津原武君をひつこませて道樂氣を出した。何しろ丹後の縮緬王で、津原君はその下に機業組合長をしてゐる關係上、いくら道樂でも『おれが出るから君は引込んで』といはれては仕方がない、斷然ひつ込んだにかゝはらず、二千何票の得票のあつたのは、津原君の人望ある所以だ。

吉村君は、京都府で四番目の多額納税者である。從來曾て自ら政治道樂をしなかつたが、昨年京都府會議員をつまんで見たら直に府會議長に推し上げられた。そこでそれ、金持ちの惡いくせ道樂が奥義に達して來て、今度の始末である。これがため津原君は『光榮ある苦痛』の悲慘なる演說を試みて、聽衆を泣かせたといふ。

彼れは太りかへつて、如何にも金がだぶついてゐさうに見える、『わしはうまれつき自動車に乘つてあるくやうに出來てるんです』といゝ氣になつてゐる程罪のない王樣。この王樣感心な事には公共事業には金を惜しまない、居町峰山町の水道は彼れの私設、無料で町民に提供してゐるなどはその一例で、京都府の教育會に廿萬圓を投げ出したり却々感心な王樣で、こんな道樂(?)をしてゐれば傷はつかないで濟むものを、平民共とおなじい議席につかうなどは少々お道樂がすぎるやうだ。

立候補の際に『吾輩は多數黨に入る』と聲明した程の王樣だ——王樣もぢ〳〵政權の移り具合を見てゐるんぢやないかしら?

堤　清　六

本黨では、堤君を公認し、ちやんと自分の方へ勘定してゐるにかゝはらず、自分では中立と號

してゐる。政權の移動をながめてゐる一人だ。彼れは日魯漁業會社の社長である。官憲の手心は最も恐ろしい所で、政權の動き具合もわからぬうちに無暗に動く譯にはまゐらぬものと見える。

商業學校を出たぎりで、北海道にわたり、水產屋の一小僧に住みこんでから徒手空拳で、兎も角日本一の水產業者になつてしまひ、好況時代には新潟第一位の多額納稅者とまでこぎつけたのだからたゞの代物ではない。高橋光威、田邊熊一君等と組んで政友會全盛時代に原敬や、中橋德五郎を小樽まで引張つていつて工場を見せたりした程の大なる政商である。腕一本からたゝきあげた程の男だから、精力主義の元氣ものだ。赤いロシアへ一人で乘り込んで、三年越行きなやみの露領漁業を解決した程の元氣がある。

吉村君の樣に道樂で代議士になつたのとはちがふ、また別に政治的野心に燃えてゐるわけでもない。要は商賣に便ならしむる爲議席を一個(恰度彼れが角力ずきで國技館に棧敷を買つておく樣に)買ひ取つたにすぎない。そこで、これも鮭專門の佐々木平次郎君と共に、大いに水產熱をふきこむことであらう。かれの如きは、國民の代表者といふよりも、鮭の代表といふ方が適當してゐる。

悔いた人

磯部保次
熊谷巖

瓦斯事件の兩勇士(?)は、何れも面目を一新して日比谷に乘り出して來た、過を改むるに憚る勿れ！
悔い改むる者をせむる勿れ！　われ等は海の如く廣い心を以て此の兩君の前途を見る。

磯部保次

彼れは、當時東京ガスの常務。瓦斯の値上げ案を通過せしむる爲に市議その他の大々的買收を試み、遂に露見して、彼の大疑獄事件を起こした事は今更らあらためて申すまでもない。その結果一年二ヶ月の懲役で下獄して、地震前に出て來た。それも、謹愼悔悟の狀著るしい、といふので特に三分の一の刑期で宥されたのである。

大々的買收を試みる樣な膽つ玉の坐つた男だ『悔悟の狀著るし』く今後を進むならばその力を以て相當成す所あるだらう。彼れは、親分肌で、座談が上手だ、これが實はその身上である。『よし引受けた』となると善惡共に水火を辭せない風に出來上がつてゐる。これが、實はガスの惡玉の總本家と自らなつた所以だ。座談の妙味で、相手を惹きつける。これが、選擧に勝てたゆゑんである。『俺が惡者になつたのは仕方がないけれど、他の人に迷惑をかけたのは、何としても申し譯がない』と告白する。この心情が人望をつなぐゆゑんとなる。

彼れは、いま若尾璋八系統の三ッ引商事の重役をしてゐる。議會ではきつと裏面の仕事をするに相違ない。演壇へ立つ諸君屋では勿論ない。

洩れ聞けば、東京ガスは、彼れに對して未だむくゆる所なしといふ。私腹を肥やしたのではないのだから、何とか形をつけなければなるまい。罪をにくんで人をにくまず、殊に謹愼の狀著るしい、と折紙をもらつてゐるのだから。まあゆつくりその腕前を拜見するとしよう。

熊谷巖

おなじガス事件で時の阿部知事に千圓の贈賄を幇助したといふので引かゝつたが、御成婚の特赦で出獄するなり、こゝろざしをあらため、議員として打つて出て來た。今年四十二の働きざかり、過去の罪によつて將來をまで殺してしまふのは考へものだ。こゝは一つ雅量を以て見てやるべきだ。彼れは岩手縣の海產物問屋の倅で、大金持ちである。警視廳で保安部長をしてゐる時分よく飲み、よく買つた。月給なんかたばこ錢にも足りない。毎月親父から千圓以上の小遣を取り寄せてゐたものである。こんな風だから、人に招待される、そのかへりにコッソリ帳場へ、その

會合の全費用を支拂つて歸るくせがあつた。或る正月、問題のガス會社の宴會によばれた。歸りに他の客のは勿論主人の分まですつかり拂つて知らん顔をしてゐた、といふ奇人である。ちよいと豪傑肌で『よし、おれが引受けた』といつた風のところが、わざはひして法網にひつかかつたのだが、然し世にいふ『或人の犧牲になつたのだ』は眞か否か、筆者の知る範圍外である。被告となつて二年餘、下獄して數ヶ月、その間『金持ちの倅で、とんとん拍子』の浮ッ調子は直つてゐる筈だ。これからは、細心にしかも大膽に進むであらうと期待をかけておく。誤つて、時代錯誤の『よし引受けた』を出すなかれ。

彼れは故原敬に可成可愛がられたもので、その恩義は終生忘るる事が出來まい。そのいゝ所丈けをまねるがいゝ。

罪を惡んで、人を惡まずだ、惡い事をしても法網に引つかゝらずに善人の樣な顏をして白日の下に横行してゐる政黨者流より、惡い事をして、引つかゝつて、悔いあらためた者の方が餘程見込みがある。磯部君と共に、善人としての今後に期待しておく。

次官出身

中村巍
小野義一

まかり出でましたる役人の古手どもは大概首を切られたか因果をふくめられたか、でなければ政府黨の青二才と相場が極まつてゐる中に、先のアルセンチン公使中村巍、同じく先の大藏省銀行局長小野義一の二君はこちらから役人生活の見きりをつけ、勅選なんかにされちや男がすたると許り大元氣で出て來た代物、一山五錢がところとはちがふ。

中村巍

義太夫の名人である中村巍は宴會などで『一段何卒』なんて註文しても『いや今日は太棹が來てゐないから』と首を横にふる程自信家である。その自信が內田伯の『不誠實』にむかつ腹を立てゝ大正十一年ボイと役人生活を御免かうむらせたのである。中村君は當時アルゼンチン公使であつたが『日本の過剩せる人口はこれをブラジルに送るべし』といふにあつてブラジルの仕事ばかりしてゐた。時の外相內田伯に獻策して南洋發展の根本策をたて內田伯もこれをいれて來る議會には數百萬圓の豫算を提出し移民局を新設し大いに中村君の策を用ふる約束をしたにかゝはらず實現しなかつたので『こんな不信用の大臣の下にはつとまらぬ』とポンと蹴つてしまつた。上に對

しては強硬で部下に對しては抱容力が大きく頭もいゝし折衝もうまい立派な未來ある外交官で在任してゐたら今年あたりは大使組である。彼の持論は、外交は既に策略の時代を過ぎ通商第一主義で押して行くといふにあつた。排日をくつた今日彼の南米における機嫌よき活躍は最も必要なのであるが——然し野に衆議院に議席を持ち院中唯一のオーソリチーとしての言論は反響必ずしも在官當時より低くはあるまい。きかまほしきは義太夫仕込みの確かりしたのどで辯ずる移民政策長講一席……。

近松を今様に仕立てなほしたのが中村君の結婚物語りで、といふのは、彼れは一つ橋、奥さんは佛英和女學校の生徒であつたころの事、或日雨が降つて奥さん（そのころはお孃さん）下駄の鼻緒を切らし、おまけに一傘をもつてゐない。これを發見した彼れは汚ないながらもハンケチをさいて鼻緒をたて、傘を見つけて來て家まで送りとゞけた。これがそもそもで目出たし目出たし。そんなわけだから奥さんも却々の夫思ひ、今度の立候補に、その持てる寶石類を皆賣とばして選擧費の一部に寄付したといふ。昔のハンカチのお禮を今にしてむくいたのである。きいただけでも胸がすく様な夫婦なるかな。

小野義一

彼れは、いかにも酒のみらしい赤い鼻をぴよこつかせつゝ、筆者に申しのべた一條がいゝ、それを紹介すれば選擧は實にいゝ教訓であつた。選擧區へいつたら、もう參謀のいふ通りにあすこに行け、はい、こつちへまはれ、はい、とまるであやつり人形で、その間少しも自我を出す事が出來ない。役人などしてゐたんでは、この禪味は到底味はれるものでない。この無我の境を通過して初めて民衆の心を心とする政治家の資格が得られる——といふべし、その味をかみしめて一陣笠となれば、今まで數字のわからぬ議員共を、その赤い鼻の先であしらつてゐたことが兒戯に類してまだまだ奥に政治家のさぐり入らねばならぬ境地があることに氣がつくにちがひない。斯くしてこそ、赤鼻の小男の小野君は大成するであらう。

またこんなことをいふ——なあに別に財政通を振りまはして、論陣を張るなぞと大それた考へをもつて出て來たのではないので……と然し、彼れに期待するものは、その緻密な、明細な頭と、その雄辯を以て、濱口ライオン氏を新しくしたやうな財政政策長講一席、まつた委員會では、こまかい數字を上げて大膽に、いままでの同僚下僚を鎗玉にあげるところであらねばならぬ。酒好きの小男ではあるが豪放で、頭がよくて切れものゝ彼れである、高橋是清君が藏相の時に、西野次官の推薦で本省に局長として大阪の稅關長から引上げられてきた。その時の話し、彼れは政友會の大反對者尾崎行雄君と義兄弟になつてゐる（小野君の夫人壽子は、尾崎君の先夫人英子と姉

妹）ところから小野君推薦を遠慮していたところ、高橋君から『情實はいかぬ、腕のある人間はどしどし用ひなければならぬ』とサッパリ出られて西野君も我意を得たりとばかり大阪から引上げて來た。だから小野君は、今でも高橋君を德とし、中立ではあるが、政友系である。高橋君の心意氣もいゝが、小野君のそれもまた大いにいゝ。

その後舞臺は廻つて中村君は外務政務次官になり、小野君は大藏次官になつた。

貴族院の諸星

陰性政治家

水野直

『水野直子は、日本に類型を見ない政治家だ』結論はこれでつきる。まづ彼れの家へ電話をかけて見るがいゝ。朝五時にかけても夜十二時、一時にかけても『御不在』が通り相場である。居留守を使ふ時も勿論あるが、事實居ないことが多い。然らば妾宅か待合へでもしけこんで鼻毛をのばしてゞもゐるかといふに、否々然らず。酒は一滴もやらない。藝妓の前で膝を折つてかしこまつてゐる。

彼れは普通朝六時には必ず自動車で家を飛び出す。日本中にありとあらゆる大臣級の政治家は彼れによつて早朝からたゝかれる。誰が何處へ旅立つ、といへば必ず停車場に見おくりの姿が發見される。同族の冠婚葬祭はおろか勝手元の拂ひの世話までつけて歩く。

彼れは新聞記者や、政界の消息係に引ッつかまることを一代の恥と心得てゐるかの如く、自分

の行動は自分と第二者以外に知れない様につとめる。

だから朝六時に家を飛び出して夜一時二時に歸るまで、何處を何う飛びあるいてゐるか判らない。第一彼れには豫定といふものがない。

彼れの家の門は常に閉まつてゐる。自動車は決して自分の家に置かない。二臺ある。おなじ日におなじ人の所へ行くには用心の爲決しておなじ番號の車を使はない。

さて、門は常に閉ざしてゐる。室は十四五ある。こゝにも彼れの周到な用心がある。

かはつた客がいくらたてこんでも決して客同志が顏を合せない仕組みに出來てゐる。

女中が、お客の顏をよく心得てゐて通していゝのと、居留守をつかふのとちやんと判別する。しかして何人通つても別々に分からぬ室へ通される。

電話の音が客に漏れるのは大禁物である。勿論スキッチで室々へ切りかへるのである。かくの如き陰性政治生活をいとなむからには、家族と同居するのはお互の迷惑である、といふので大塚の邸には夫人も子供もゐない。大森に別居させて、時々そこへ休みに行く。

時によれば朝の四時ごろから運轉手をたゝき起こす。夜の二時ごろに歸つて來る人間である。夫人が超人間的な夫と同様の生活をしてゐたら身體をこわしてしまふ。子供は朝早くから學校へ行く。故あるかな別居や。

陰性政治病患者である水野子は、必然的に仕事が早い。風呂へ入るに五分、洋服を着るに三分、飯は腹をみたす道具であつて見れば砂利でも鐵でも構つてはをられない。

だが、しかし、彼れは、かつて平野水を十一本たてつゞけにのんだことがある。酒や飯は食はないでもいゝが水分丈は人間の十一倍も攝らぬと活動にこたへるらしい。だから仲間はよく心得たもので、彼れの爲には必ず最大級のコップとサイダー、平野水を準備してる。

かれは、研究會を引廻してゐる。研究會を引廻すことは目下の所日本の政界を引廻してゐる、といふことになる。犬養木堂が五尺足らず、十貫未滿の小兵、しかも廿五名きりない手勢で、政友會や憲政會を引まはした頃に比べては圓が大きい。

華族といふものは大概お目出度く出來上がつてゐる。お目出度くない水野子が彼れ等を引まはすのは當然である。何しろ勝手もとの拂ひの都合までつけてもらつてゐる。(金のほしいのには金をあてがつてやる。自分は仕方なければ政務次官位にはなるが、大臣には頼まれてもならない。輩下を大臣にしたり、鞄持を、自分と同格の次官にして、平氣である。怪物でなくて何であらう。

だが併し彼れより一二枚上の役者に故人原敬氏があつた。原氏は『何をいふにも』華族である水野の『殿様』を利用した。『是非一つ頼む』と手をつかれゝば、水野子さへいゝ心持ちになつて水火を辭せなかつた。

中橋德五郎氏が文相で二枚舌事件を惹き起こし、研究會から岡田良平氏外十名の脱會騒ぎを演じた當時、水野子は貴族院議員ではなかつた。精神病と稱して鎌倉に引こんでゐた。

而も彼れは、人に知れぬ樣、終列車で上京しては、原氏の『依囑』を受けて研究會を固めた。而して三十六票の差で反對不信任案を否決したのである。こんな恐ろしい精神病者が、またとあらうか？

加藤や若槻にして、原の腕があつたなら『水野君、是非君の力を借りなければ……』と肩を叩いておけば苦もなく妥協出來るのだが――難局をのり切れるのだが――。

研究會の旦那

青木信光

水野が研究會を握つてゐる、といつては青木信光を閑却したことになるから平和を缺く。研究會といふ大世帶は、水野といふ確りもの〻女房と、青木といふ陽性の亭主とで固めてゐると申すのが本筋である。さういつて水野が不平なら、水野が亭主で、青木が女房でも構はないが、兎に角青木水野の夫婦で固めてゐるといふのが實狀である。

水野は裏面の人、青木は表面の人、裏面の人をゐがいた以上、表面の人青木を點出しなければ態をなさない。

水野も養子だが青木も養子だ。

青木は、常州松岡の城主中上山の二男とうまれ、先代青木重善の養子となつた。

で、米糠三合もつたら養子になるな、とは結婚常道に書いてある通り。青木も夫人の監督には恐れをなしてゐる。性來水野と反對で、陽性の人だから、待合へもはいりたい、乃至は人なみの代物もかこひたい、たいとは思へども人の監視これをゆるさず、かるがゆゑに……（といふ譯でもあるまいが）彼れは宴會を甚だ樂むの風がある。

水野は、宴會はことわるべきものと心得てゐるに反し、青木は、宴會は親が死ぬ時でないかぎりことわるものにあらず、と心得てゐる。大概日に一ッは必ずある。政治季節にでもなると三ッ四ッ、甚だしきは五ッ位の宴會がカチ合ふ、彼れは平氣で『出席』の返事を出す。事實また、たくみにそのまはしを取つてあるく、義理では出來ない。趣味があるのである。

酒は五合以上、一升に及ぶ、併も（夫人の手前をはゞかつてゞはないが）醉はない。藝者を相手にして冗談をいひ、以て樂むの術を心得てゐる。

まづこれ等からして水野とは異ふが、その差違は會内においてよく現れる。(しかして陰陽相合ふ天地の理を證明してゐる)彼れは恐らく百七十餘人の會員から、誰一人恨みと敵意をもたれてはゐない。水野が苦言を濫發してにくまれゝば、青木は、單にほめる側にまはつてゐる。水野は裏面に策動して、やれ日銀、興銀、勸銀、鮮銀、滿鐵の重役、政府の囑託といふ樣な餌をはこんでくる。青木はこれを貧乏人どもに分けてやる役目をつとめてゐる。

だから、青木の光輝は燦然たるものがあり。水野の光りは消される。それで水野が甘んじてゐるところに『よき女房』があるではないか。

青木信光は多辯である。好んで客をひく。多々益々辯ずるけれども相手に要領は中々得させない。會内にあらそひが起こる。彼れは自說を吐かない。兩方にいゝ顏を見せる。兩方共、青木は此方の味方だ、と合點する。

このニコポン主義はなる程づるいにはちがひない。が考へて見れば、これが、青木の存在するゆゑんであり、水野の存在するゆゑんであり、從つて研究會が存在するゆゑんとなる。

青木は、日銀の監査役といふ役をもつてゐた。そこは水野の無役主義と少し異つた亭主味を帶びてゐる。けれども大臣や滿鐵總裁には向かふからお膳をすゑて來ても『いや私より外の人を……』といふところは、己を知り會を愛するの賢なるものがある。彼れ、智においてすぐれたりと

雖も、學に於ては中央大學の出身英吉利法律學校を中途で退學したのみである。

三島彌太郎が研究會の頭目であつた時分、兩翼となつてお使番をつとめた前田利定を大臣に推し、强氣で陽性の大木遠吉を看板に出して自分は手綱を摑んでゐたところに彼れの身上がある。前田が初めて大臣になつた後、彼れの細君が青木を訪うて『良人がお先に失禮をしましてお氣の毒でございますが、この次ぎは是非貴方が大臣におなりになる樣良人に運動いたさせます』といふて、青木を微苦笑させた小話しが殘つてゐる位である。

それは、前田より、おなじ三島の兩翼ではあつても、青木は一枚も二枚も役者が上である。その青木が水野と夫婦役で研究會を握つてゐる。否、政界の樞機をつかんでゐる。

禪修業

中川良長

華族議員で、向ふみずに貴族院改革の火を放つたのは中川君だ。殿樣にいはせれば、彼れは放火犯人である。

だから、華族仲間では誰一人中川君を眞正面からほめる人がゐない。表面でその勇氣をほめて裏口では必ず『あの男も來年の選擧には落選に極まつてゐるものだから、單記制に更へたいんだあね、その肚が解らんかい』と來る。

聯記で落選しやうが、單記で當選しやうが、そんなことは貴族院と中川君一個の問題で、われ等の知つたことではございません、けれど、『男爵』によつて點けられた火が卽ち、貴族院の醜態を燒き盡くす動機だとすれば、この方は國民と大いなる利害關係をもつものである。そこで中川良長男の價値をそこに發見しなければ無意味である。

彼れの演說は活辯式の定評があつた。あるお殿樣の如きは『貴族院に活辯生ず』と眉をしかめて筆者に嘆じて見せた——それで筆者も、中川良長といふ男は、賣名の活辯で從つてオッチョコチョイのオタンチンと心得て來たのであるが、それは、彼れ勇士の爲に氣の毒な誤解であることを發見した。これを研究して見るに、才氣煥發にして策あり、融通も利く、通り一遍の堂上華族ではない。その面構へ、一步踏みちがへれば銀流しであるが、つら〳〵ながむれば色の淺黑い苦味走つた男前である。卽ち惚れる氣になる。このデリケートな境界線が、中川男の特徵である。

中川君は、三十年以前、釋宗演師の門に入つて、禪の方では奧許しを得てゐる。奧許しのことを『五位十重禁』と申す由であるが、俗人には解らない。

で、彼れの貧弱なる邸宅を虛空庵と稱する。虛空庵の二階八疊は、安物の洋家具を置いてゐる。中川君の性格を描かんとするものはこの室を點檢しなくてはならない。まづ床の間には儀山和尙の書『枕頭三尺劍』と凄い文句がぶら下がつてゐる。

壁間には、南に東嶺和尙の小額〇を書いてその讃に曰く『天上天下堪笑堪悲』とある。がお隣りの東にもまた〇の額、讃に曰く『これくうてお茶まいれ』几鳥とある。几鳥は儀山和尙である。西には『無』を書いた成拙和尙のこれも小額、更に北には澤庵和尙の『夢』の字がかゝつてゐる。〇も無も夢も禪の方では貴とい內容をもつてゐるかも知れないが、俗人には『〇の無い夢見る人間』としか讀めない。

虛空庵にゐる中川君は、早く夫人に逝かれて以來、令息と二人のさびしい生活を營なんでゐる。歌澤と追分節は堂に入つたもので新橋の老妓から『殿樣にはをしいお方』と折紙をつけられた程だが、若い妓には何と折紙をつけられたかを聞き洩したのは殘念だ。

研究會を飛び出し公正會を追ひ出され、親和會をおつぽり出し、無所屬にゐて自由自在に、貴族院改革戰をやつてゐたが、案の定落選して、一人で全國を演說して步いてゐるが、こんな景氣のいゝ男が、一人位ないと貴族院見物人には物足りない。

故近衞篤麿公が學習院時代、宮內省と喧嘩しい〳〵學習院大學を創設した。

ところが、高等科を出た秀才は皆帝大志望で、本家の大學には入り手がない。近衛公は中川君を說いた。が中川君も『帝大』『法學士』に多大のあこがれを持つ青年であつたので、『實質』だの『同族の名譽』だのを振りむく譯には行かなかつた。

『どうだ、俺と一しよに學習院大學を背負つて立つ積りはないか！』と熱で動かされるに及んで、

『諾！　それならはいりませう』

と『法學士』を捨てた。この氣分が今の彼れにも多分にもられてゐる、そこが彼れの身上でもある。

で、彼れは學習院大學最初の華族卒業といふ悲しい貧しい名譽を持ち合せてゐるのである。が、同大學は、近衛公の死ぬと間もなく無用の長物として廢されてしまつたと共に、中川君の『華族』は以後無用の長物となつた樣である。

筆頭の家柄

近衛文麿

公卿の筆頭近衛文麿公は、震災でとッつかれた肺炎もよくなり、十八貫五六百の體量、やがて十九貫になん〳〵とする程健康を恢復した。かくして政變に雄飛する下地が作られつゝあるは、公のため祝福にあたひしやう。

震災と肺炎――には美談を伴なつてゐる。

文麿公は、東京にゐた。夫人、子供は輕井澤にゐた。かれは直覺的に、輕井澤は東京以上にひどいと思つた。九月二日に、彼れは、大決心と、平民的眞髓に徹した蠻氣とを以て輕井澤目ざして救援の旅(は少し大げさだが)に上つた。汽車は貨車であつた。座席は勿論なかつた。避難民にまぎれて、ボロ油服、ボロ帽子に、公卿の血をつつんで、心は愛にふるへ立つてゐた。(どうでせいかにも近衛公らしいではありませんか)

五時間で着くべき列車は十二時間の上かゝつた。その上貨車の上に押され押されて棒立ちのまゝ夜露にぬれた。斯くしてお公卿樣は肺炎を起こしたのであつた――。その夫人は、下々で申す戀女房で、黑田長和の妹、毛利子の孃である。

彼れは、彼れの父、篤麿公の後を襲うた德川貴族院議長の義甥であるが、德川公が、自分の椅子を文麿君に讓りたい腹があると、いふ者がある。情においてしかあるべき事柄だ。文麿君生まれながらにしてその器であるから、もう少し修業したら立派な議長であらう。貴族院議長が、華

族の筆頭であることは憲法の精神に違背するものでもあるまい。

新華族と、成金とには、共通な金ピカ萬能氣分があるけれど、堂上華族と、舊家には、共通の深さと面白味がある。

近衛公は、大きい家が嫌ひである。目白の新築の家は、五六間しかない。興津の借家も、二階二間に、下四間位の平民的な家だ。

別莊といふものは輕井澤に一つきりない。ヘッポコ華族でも、京都に家位もつてゐるのに、京都が本もとの生れにして、一つの別莊をもち合せてゐない、輕井澤のは留守番が要らないからいゝが、京都あたりに持てばそれが要るから面倒くさい。といふのがその理由だ。

貧乏人よ。經濟論をもち出してくれるな。金を考へてそんな眞似をする程、彼れはこまつてもゐないし下等でもない。

彼れは讀書家である。頻りに讀む。大學時代には菊池寛一派と共に文學に志してゐた。が併し、文學よりも政治の世界の方が廣くて深い、と考へた。父君篤麿公の血は彼れにつたはつてゐた。

いまでは、研究會の大看板であり、西園寺壇家の筆頭であり、首相に機嫌を取られる筆頭であり、完全に政治家の階段を上りつゝある。西公の感化を深く受けたかして己れを知るにつとめる。腹八分目を心得てゐる。聰明である。父君の如く自ら進んで大勢を作るの覇氣には缺けてゐ

るが、大勢に順應することは心得てゐる。

彼れの道樂といへば、ゴルフ位なものであるが、然し柳暗花明の街に淺酌するの趣味も相當深く心得てゐる。けれども、そこいらの馬鹿殿樣の樣な亂痴氣は起こさない。聰明なるがゆゑである。

近衛君は、西園寺の秘藏つ子だ。西公は彼れを一人前に育て上げることに義務をさへ感じてゐるやうに見える。

三條公だつたか〻岩倉公に向かつて、お前のない後は、公卿でお前の後つぎの出來るものは誰だ、と問うたところ、岩倉公はいや御心配あるな、近衛(篤麿)と西園寺がゐる。と答へたといふその通りであつた。兄弟分の篤麿は早く死んだ。西公にして見れば、その伴を仕立てたいのは無理からぬ人情である。

幸ひにして馬鹿でない。公卿らしい驕揚さに加へて、時代を知りその潮に乘るの明をもち合はせてゐる。人を手玉に取る水野直さへ一目おいてゐる。豈、仕立てざるべけんやではないか？

陽性の快漢

大木遠吉

「……あの苦味走つた威勢のよさはちよいと乙だわね。舞臺へ立たせて大向ふから大木屋！　とか何とかいつて見たくなる恰好ぢやありませんか」とはある妓がある時盃を口へ運ぶ合の手にきかせた言葉だ。

だが、リウマチスちんばひきひきぢや『大木屋！』は無理だらう。

さて紅木屋侯爵ならぬ大木屋伯爵閣下は、或妓ならずとも舞臺ものである。原内閣の司法大臣高橋内閣の鐵道大臣と、研究會を代表させられ(乃至してもらつて)て檜舞臺に立つたが、評判は悪くなかつた。

司法官を化石と批評し、衆議院であのくり〳〵目玉をむいて『おれが馬をもらふナンテ、そんな人間だと思ふかい！』なんかと大見得切つた調子は馬鹿に大向をうならせたものだ。

この位陽性な殿様、景氣のいゝ大將、抱負識見をたんとためこんだ貴族院議員は外にない。で何んな眞似をし、何んな罵倒を試みても、大木伯のしたことだと、誰も憤慨しない。そこにかれの人となりがある。といつて、某伯爵、某子爵輩の如き正月野郎では決してないのである。

彼れは豪放磊落で通つてゐる。國粹的、漢文的、白髪三千丈で、べらんめぇのかれは、從つて單純である。

併もその反面に、極はめて少量ではあるが細心と算盤とを持ち合せてゐるけれど、豪放磊落の保護色はよくそれ等をおほひかくす。要するに大木伯爵は、あり難き世に生れ合せたことになるのである。

かれ昔は大酒のみであつた。その酒を愛する、味を分別するにあらず、醉はんがためであつて醉うて前後不覺におちいるを以て唯一の樂みとした。醉うては枕す美人の膝の趣味ではなくて、醉うては投げる皿小鉢趣味であつた。

が、年はとりたいもので大臣慾の出るころから酒の害をさとり、斷然禁酒して六年目になる。多分初めて司法大臣になつた前後と思ふ。飲む時も思ひ切り飲んだがやめたとなつたら一滴もやらない。意志薄弱の徒に眞似のできない藝當である。

扨て酒とひきかへに謠曲をやり出したが、これがまたひどい凝り方で、意志極はめて鞏固に『漁夫にてさふらふ……』をやつてゐる。

職人が風呂槽の中で『ころは元祿十四年……』をやるやうに、かれは華族會館のバアでしらふで『漁夫にてさふらふ……』をやる。聽手がこなくても意にかけない。

水野、青木が研究會の重心的人物なら、大木はその中心的人物であらう。まつた、前者が大黒柱的人物なら、彼れは看板的人物だ。看板は表へ出すものと相場が定つてゐる。

大木屋伯爵遠吉閣下は自由人である。べらんめえ的天才肌である。

彼れは所謂學校教育といふものを受けた經驗がない。幼にして病弱、家庭教師につき、漢學塾に通つた。自由教育である。幼にして病弱なりし爲に長じては大政治家といふ譯では決してないので、先代喬任卿の遺産を政治道樂ですりつぶしてゐる間に腹も出來位置も出來、勢力も出來たのである。だから、政治家になりたい人は、是非先代の遺産をつぶさなくてはならない、と大木伯がいつたかどうか聞きもらした。

追記、此の快漢逝いて貴族院はとみに寂寥を加へた。

スポーツマン

井上匡四郎

鐵道大臣井上君個人としては採鑛冶金の日本一の大家であり、頭が組織的で、計畫能力が豐かで大學の教授をさらりと捨てゝ滿鐵の鑛山部長にとびこんだ程の人間だから、いはゆる工學博士

とはいさゝか趣を異にしてゐる。鐵道を主宰しても、その能力、手腕は決してあり合せの大臣ではないに違ひない。個人として見れば立派な大臣である。

けれども(このけれどもが少しばかり氣にかゝる)かれが大臣になつた原因は滿鐵へ三萬圓の年俸で抱へられた原因とはちがふ、滿鐵はかれの腕と頭とを買つた。若規內閣製造會社はかれの『子爵』についた背景を買つたのである。

床次がいけなくて水野へ、水野がいけなくて井上へ……勿論『工學博士』の頭や腕はこの際ホンの印ばかりにつけた景品である。

滿鐵では、例の塔連炭鑛値ぶみの責任者として、政友會といつしよくたに、憲政會の攻擊の矢面に立つた。相棒中西清一君は末だに恨みをのんでちつ居同樣の形であるに引きかへ、かれは今ゴルフ場で金貨の一ツも拾つた樣な幸運にめぐりあふ。人生は浮草のやうなものだ。同じ浮草でも平民よりは華族の方が餘程割がいゝらしい。それも井上君は生れが華族ではない。熊本藩の岡松甕谷の子と生れ元京都大學教授の岡松三太郎博士の弟で根は秀才の平民である。平民のまゝでゐれば天晴れ採鑛冶金の權威、井上毅子の養子となれば忽ち鐵道大臣、どつちみちかれはよき月日の下に生れて來たようでやる。

井上君はスポーツマンである。一高時代には野球の選手であり、大學ではボートをやり今は毎

日の様に役所の自動車で駒澤のゴルフリンクへ通ふ。右證明の通り、非常に健全なる肉體の所有者で、精氣あふるゝものがある。そこで、從つて――といふのも變だが――或方面の陰然たる精力においても恐らく當代政治家中のゆうなるもので、故伊藤公と並び稱される資格は充分だといふから、これから非常にえらい政治家になるかも知れない。けれども、時代は移つて伊藤公時代の道德はもう通用しない。幸ひに七年別居した家付の富士子夫人と、海軍政務次官になつて以來よりを戻したといふから、この方面にもスポーツマン・シップを應用のこと緊要であらう。

家を治めたり、國を治めたりしながら天下の大政治家になつたとて誰も惡口はいふまい。

井上君は四回貴族院に出てゐる。研究會では、いままで博士の大河内正敏子と同聯想の下にゐたが、實質的政治生活に足をふみ入れたのは近年水野直子にくつついてからで、由來かれは水野君より年も上だし大學も先輩である。そこで水野が入閣する譯に行かんからと、身代り、代理にしてもらつて恩師(?)水野は依然一政務次官に座つてゐるのだから珍妙である。水野は裏の裏をくゞる怪物だが、井上君は何しろ學識もあり、抱負經りんもありお座敷にするゐれば、水野よりは上品でいたについてゐる。――五十議會にはじめて恩師(?)の推挽で研究會の常務委員となつたが會内の空氣をよくのみこみ政府や衆議院側との應對もうまく、問題を手際よくこなしたので認められ、漸く重きをなして來た。それから海軍の政務次官になつては他の政務官とちがつて、委員

會に出て細かい答辯をやつてのけた。かくして、かれの政治家としての第一歩は成功したのである。これから先きだとて個人としては結構な大臣だ。よき個人がよりよき個人になることは、背景に對して加へらるべき非難とは區別さるべきである。

山縣の婿

船越光之丞

公正會三Fの一人福原俊丸男は、尻に帆かけて研究會に去つたが、選擧事情止を得ず又逆戻りをした。も一人の藤村義朗男は、主義主張にケツをむけて清浦特權内閣のモシモシ大臣になつた。たゞ節を全うするもの船越男あるのみ。加藤高明が外務省の政務次官になつてくれ、と持込んだところ、御冗談も程々におつしやいよと尻をむけた。藤村が既に大臣の經歷つきだ。無理はない。

光之丞氏は大阪のあやつり人形が好きでよく見に出かける。人形使ひの技につゝ〴〵感心した結果か何うか知らぬが、彼れは人形より人形使ひの樂みを樂んでゐたい、といふ。人形とは大臣のことだ。

人形づかひは、人形藤村の糸を引いて見たが、甚だ踊り方が拙かつた。評判を悪くしたのは人形使ひのために氣の毒である。

船越男は、たつた一人しかなかつた山縣公の娘さんをもらつてゐる。その二男有光君は血脈の後繼者のない山縣のおぢいさんに養子となり、今は男爵である。

光之丞男の弟義隆氏は、加藤友三郎さんのこれもたつた一人の娘さんをもらつたが、今では改姓して子爵加藤義隆、海軍大佐である。

一人娘に緣のある家柄ではあるよ。嚴父衛男は、山縣系でチャキ〳〵の貴族院議員であつた。その緣故でその一人娘をもらつた光之丞氏は、加藤さん内閣の出來る時分、同鄕親戚の關係で裏面に策動した。緣はいなもの味なもの……。

かれ十九の年にドイツへ留學し、廿五六までそこで勉强した、純然たるジャーマン型であるべき筈なのだが、漢學に通じ、夷川と號し詩を潑作する。大東文化協會の役員で辜鴻銘の讃美者である、味噌の味噌くさくないは上味噌であらう。

かれは正直ものである。半白の頭髪と、黑い緣のロイド眼鏡とは羊のやうな印象を與へる。その印象が、かれの政治生活の上によくにじみ出てゐる。

山縣の歿後といへども、相當の信望と勢力をつないでゐるゆゑんである。

カマキリ

藤村義朗

かまきり男爵が貴族院で斧をふり上げたつけ。

特權内閣、超然内閣、中間内閣……こんなものは立憲治下において存立すべき筈のものでない……と。

この斧で加藤友さんも、權兵衛さんもぶつかられたものだつた。

清浦特權内閣は、たしか權兵衛内閣のすぐ次ぎに出來た内閣であつたが、藤村義朗男は、悠然としてモシモシ大臣にをさまりかへつたのであつた。

その結果は野(?)にゐた當時の名聲を可成おとした。會内の反感も買つた、いまでは大臣以前にくらべて悲境である。それは併し、藤村男の樣な正直者の少い立憲治下においては、當然の歸結であらう。が、筆者は男爵に同情する。いまの貴族院でも、衆議院でも、その議員で、大臣にするから主張を捨てろ、といはれて、いやだといへる正直ものが何人ゐるか考へて見るがいゝ、

藤村は、現政界に於ける正直者の標本なまでゝある。

益田孝に見こまれて、廿年前に英國は劍橋大學に留學しすつかりロレドンつ子になつた男で、有數の英文達者だ。が併し、船越男と共通な點は『わが英國』なんてキザをやらぬこと。船越男の漢詩に對してこれは建築趣味をもつてゐる。中野の邸も自作だ、內幸町と京都の別邸も創作だ、買手があればいつでも賣る。といつてゐる。賣つてまた創作すると樂んでゐる。

父柴朗氏は良二千石で熊本の人、母人は京都の人、彼れは長く京都で育つた。

そんなわけ合ひから、割合に野性を離れてゐる。建築趣味も西洋のそれにあらず。日本趣味である。英國仕込み、三井の番當仕込みの彼れは、從つて、所謂『殿樣頭』の所有者ではない、戰前……ぢやない、大臣前の公正會は、むしろ男の智と策が中心となつて引まはしてゐる感があつた。研究會をそゝのかして內田外相彈劾案を出したのも彼れだ。

これからだつて心掛けさへ惡るくなければもと通りになる、さあ男爵、大臣病は押入れに仕舞つたり〳〵。

萬葉歌人

福原俊丸

『僕とゆつくり話したいなら夜の十二時過ぎに來てくれたまへ』十二時過ぎから一時でも二時でも話すんだから人間を超越してゐる。そのくせ朝起きで十時にいつても在宅のためしはない。

何處を何う飛びあるくか水野直子と同樣で、何處でも、もぐつてあるく。水野は汽車がきらひだが、俊丸は汽車でも汽船でもまかり間違へば飛行機でも、いや無線にでも乘つてとび歩く。

頭の働きは水野に數歩をゆづるが、型の上では類似性の政治狂だ。水野が、インスピレーションでうごくやうに彼れはまた甚だしくインスピレーションの衝動に動かされる。前田利定と同じく竹柏園門下の歌人で、萬葉ばりの歌かなにか詠んで得意になる。

由來歌よみ、天地をうごかすにさへ計畫なしのインスピレーションで行く。まして政治道樂遂行においてをやだ。

豫じめ計畫を立てゝ、合理的に押し進めて行くことは彼れと沒交渉の世界だ。

內閣をこはしたい、といふ靈感がきらめけば卽刻活動にかゝる、しかして有名なる精力で押して行く。

長州宇部の藩主、そんな關係から田中義一男を押し立て自分は書記官長で大いに靈感的手腕を發揮したい、などと野心もいだく。うまくいつたらおなぐさみだが道樂も程を過ぎると身をほろぼす。

增上寺の道重信敎師を、宇部の小寺松月院から三緣山に引つぱりこむのにかれは例のインスピレーションを働かせた。佛樣でも信仰したり和尙さんの世話でもしてゐれば、誠に無難でいゝ男だが、何しろ工學士でありながら政治道樂に浮身をやつす程の人であるから、油斷が出來ない。さるにても、たとひ華族の端しくれとは申せ、『男爵』は有難い武器ではないか。

序でに申す。かれは三味線を聽くことに無上の快樂を覺え、夫人はピアノを彈ずることに堪能である。ピアノが三味線に抗議を申し込む活劇のないことこそ肝要……。

禿げ男爵

池田長康

福原が青木型の陽性なら池田はいくらか水野型をおびてゐる。水野が青木と夫婦役でなければ

芝居がうてないごとく、池田は福原と組まなければ、よきお使番がつとまらない。

さて池田長康は、若いのに頭がテカ〳〵である。が金緣の眼鏡とテカ〳〵頭のつり合は、むしろ可愛らしく見える。だからして女にはもてる。

さて彼れ禿げてはをれど頭が鋭い、あはせて會內有數の法制通である。(淸浦內閣の法制局長官になれなかつたのは遺憾千萬だが)自ら策士を以て任じてゐる。福原俊丸と一しよに公正會を飛出して研究會に行き、又戻つて來たが、その出て行く時に、福原は母體の協同會まで飛び出したが、池田は母體丈は殘しておいた。好んで策動したがる風があるけれど、水野や福原程の精力を持ち合はさぬ上に自動車さへもたぬ貧的であることは誠に不便であらう。

弟御が自動車屋で、そこの車を只で乘まはしてゐたが、それが壞れて弱つてゐた筈だ、そろそろ策動家多忙の候だ弟御よ、早くいゝのをあてがふがいゝ。

かれは備前岡山の藩主池田宜政侯の分家の養子で、糠三合の口で中國銀行の頭取であつたり、その他關西方面二三の會社に關係してゐるが、年來の希望は植民地に野心があり東拓總裁などは渴仰の的である、さうすれば弟の自動車なんか壞れたとて少しも苦にならないのであり、大きな邸にも住めるのである、尤も千萬な希望としてその實現の日の近からんことを祈つておく。

矢吹省三

むゝら不思議な世や、華族であればこそ、たとひそれが親父のお下りで、一番下つぱの男爵であつても、生きてさへゐれば、政略の具にさへ役立てば、どんな幸運にぶつかるかわからないと、矢吹君によつて證明された以上、平民よ『男はあきらめが肝腎』ぢや、退陣退陣……。

外務次官閣下の大學の先輩には、廣田歐米、木村アジアの兩局長をはじめ、世に時めく名物男小村情報次長さへゐる。諸君も御承知の通り、小村君は之も親父のお下がりではあるが侯爵であり從つて公侯爵は日本では、廿五年にさへ達すれば、矢吹君と同じい貴族院議員である。然るに、たゞ小村君は、特權政治家の政略の役にたゝんものだから、まつた外交官試驗を通つて來たいはゆる霞ヶ關育ちであるばつかりに後輩副大臣閣下の二段も三段も下にさがつて『へエ……』の始末、何とあわれな話しでそれがあるよ。まつた、參與官永井柳太郎君である。かれは學校こそちがへ政治家としては役者が一枚も二枚も上の先輩である。その雄辯においてもホラにおいても、矢吹君の如きは足許にも寄りつけない。然るに彼れは誤つて庶民から選ばれた議員であるばつかしに、足を直線に運びつつ矢吹政務次官の呼び鈴に應じなければならん——何とハックショイのこと柄であるよ！

序に申す、加藤總理の婿岡部長景子、德川十六代樣の倅家正君も家柄や親の七光りが『政略用具』程の役にたゝず出世してなほかつ高等官二等だ、然も矢吹君よりたつた一年、大學があとなばかしだ。あゝ政略よ！　政略よ！　ひるがへつて矢吹君個人を見るに四十年の大學出で正金銀行の店員をつとめ、親父秀一中將の死に會し襲爵して補缺で當選し議員を一期つとめた。年は四十三の働き盛りで、公正會では阪谷、藤村、船越君等幹部のいふことをきいて忠實にかけまはる程の働きもの、東鄕安男などと共に同會の中堅である。夫人と仲のいゝ好紳士として推賞にあたひするのであつて、彼れの爲のみを考へれば、まことに結構な出世であることを、筆者といへどもこゝろよく承認するのである。

腹がへつてゐれば、そして投げてもらひさへすれば、ビスケットのくづでも何でも、金魚にとつては有難からざるを得ないのである。いやほんとうに。

軍人

溝口直亮

越後國新發田十萬石の殿様であつて、世が世なら岡山縣の一平民宇垣一成(大將なりと雖も)などが『溝口君の政務次官ぢやー』などときらはれた沙汰ではない。二三年前大佐(砲兵)で退いた名譽少將陸軍大學卒業皇族附武官陸軍技術會議々員などいふ經歴があるからいはゆる馬鹿殿様ではさらさら御座いません。

つる〳〵に禿げた頭、昔剛染の軍馬の様に長い顔、物鼻眼鏡をちよんと掛けた風采は、正に軍縮ではない。あつぱれ伯爵様である。補缺で當選してまだひよい〳〵ではあるが、研究會のメッセンヂア・ボーイ小笠原のそのまたメッセンヂア・ボーイとして走り使ひにあるいたからこそたとひそれが宇垣に蹴られて一段ころがり落ちたとはいへ、省内の先輩を出しぬいて參與官にありついた。頭の上には加藤高明と神様見たいにえらい水野がゐるから、次官でなくとも『僕は夜店物の參與官とは事がちがひますよ』の次第である。

政治家としての抱負經綸、及び經歴ですつて? 野暮なことはいひつこなしにしませう。伯爵で、議員で、研究會員で、走り使ひの用に立つ位の人物なら、この際當たり前だらうぢやありま

せんか。ここは日本なのです。英國では? ビスケットの屑なんか、犬だつて食ひやしませんよ また食はせられる程飢ゑた犬も見ないといふ話しです。因みにいふ。有名なる大倉喜七郎氏夫人久美子さんは伯の令妹である。

親の光

伊東二郎丸

お伽噺しの主人公か船の様な名前だ。父君は、秋麿といつて、海軍中將、維新の際勤王の士であつた。

司令長官、軍務局長、兵學校長、元老院議官、貴族院議員等をやつて辛苦の末にかち得たる爵位である、海軍々人の遺孤だから海軍に縁があるといへばそれまでの話しで、それなら日本臣民たる平民の中にも幾らも參與官級はころがつてゐる筈だ。がまあ野暮はいふまい、親父のお下りのだぶ〳〵な子爵を着てゐればこそ、貴族院へは入つて水野直の走り使に用ひられて、その論功行賞に海軍省參與官に賣りつけてもらつて——封建制度の完全なる標本世襲華族の有難き世やだ

（尤も普選を主張する加藤高明及びその一黨は專制官僚の好標本だから、つり合だけはとれてゐる。）

二郎丸君は四十三年の大學出、同級の役人は、高等官四五等の所に『順調なる進級』を見つゝある際に一躍大臣から三番目の役人におなりあそばしたのは、お伽噺に作るべき筋合の目出度い話しである。讀者諸君よ、くれ〴〵も親切に注意しておくが、今度生れ代る時は忘れても平民の腹に宿るべからず、華族と生れて、貴族院に入つて、少し走り使さへ上手なら出世は完全に受け合つておく。

西公の鞄

中川小十郎

前臺灣銀行頭取、といふよりも元老西園寺公の鞄持ちといつた方が通りがいゝ。西園寺和尚の動く所必ず小十郎あり、といつた調子で『鞄頭取』として有名な所以である。

或る政變當時のことであつた、夜遲く或る新聞の經濟部の記者が臺灣銀行東京支店の前を通ると

頭取用の自動車が乘り捨てゝあつて中には電燈がついてゐる。ハテナ頭取が今頃銀行に居るからには何か銀行に重大問題でも起きたな、と驚きとびこんで見ると、何のこと、銀行の用事なんか一ッもない、政機の動く模樣を興津の西園寺公へ情報する爲に電話をかけてゐる所だつた。『成る程鞄頭取だな』と感心したといふ話だ。

中川君は丹波の產で、中川家といふものは、西園寺家の家臣である。御兩人の間は主從の關係であつて、昔ならば、臺灣銀行どころか、草履取でもつとめてゐなくてはならん身分なのである。二十六年の大學出で、文部屬をふり出しにだんだん漕ぎ上げて西園寺內閣の秘書官から樺太廳事務官と役人を勤め上げ、お聲がかりで臺灣銀行の頭取に迄なつたのだが、その不成績は驚くべきもので、遂に引責的辭職をしなければならなかつた。

不良貸付整理の爲めに三分の一の減資をしたのである。帳尻に大穴をあけた功勞によつて勅選議員になつたといふのは誠に面白い話しで、大倉男の如きは『特殊銀行の頭取をやめたら勅選になる規則でもあるのか知らん』と皮肉をいつてゐる。

その譯ぢやないが、銀行の事務は一切下僚まかせで西園寺の爲めに鞄を持ち廻つてゐるくせに貸つける時は、獨斷專行と來てゐるから勢ひ不良貸付は多く、成績は擧らぬ譯である。けれども此の人、銀行の金を手前用に利用しようなどといふ料簡は少しも持合せてゐない。感心なことに

は教育に熱心で、京都の立命館大學は、中川君が辛々粒苦、寺小屋時代から築き上げて今日に到らせたもので、臺灣銀行頭取としての俸給やボーナスは殆ど全部これに注ぎこんだのである。夫人好榮子も亭主の好きな所婦亦これを好むで、共に築き上げた功は買つてやらねばならぬ――立命館と鞄、これで勅選と思へば間違ひはない。西園寺和尚のいきが加藤伯にかゝつたのは當り前のことであらう。

石油王

内藤久寛

彼れは所謂石油王である。八千萬圓の大會社日本石油の社長である。越後の一平民で、せいぜい縣會議員、地方有志位の代物であつて、憲政系の陣笠代議士なぞをやつてゐたのでは一向はえないが、石油を掘り始めてからめきめき男をあげた。日本石油は明治二十一年の創立であるが、面白い思出話しがある。御承知の通り越後は雪國である。新潟市か何處かで、創立委員が酒を汲んで相會した時のこと、雪景色を見る爲めに障子をあけると、どうした譯か蝙蝠が一匹室の中に

とびこんだ。創立委員はお互に顔を見合した。蝙蝠は縁起のいゝ動物ではない。創立準備の會合に蝙蝠は何としても縁起でない。一座は白けわたつた。時に、一人の頓智者があつて、『何と皆の衆蝙蝠は福に通じる。此の席へ福がまひこむとは何と幸先よいことでは御座らんか、改めて祝ひの酒を汲まうと存ずる』これで一座は輝いて、皆の顔は福々しくなつた。そこで創立委員長内藤久寛君の發議で日本石油のマークは御存じの通り、かうもり印になつたのである。これはエピソードだが、内藤君も感慨無量であらう。二十五萬圓から八千萬圓へ――庄屋の伜から貴族院議員へ。

八千萬圓の日石は大正十年に寶田石油と合併して成り上つたもので、其時には日石、寶田共に各々四千萬圓の會社であつた。だから今迄は商賣仇であつたのをうまく征服して、寶田の社長橋本圭三郎君を副社長にして名前も日石を取つた。其の手際は偉いものだが、橋本君は前に大藏次官、農商務次官の經歴があり、十年も前に勅選議員になつてゐる。社長の方は、明治二十七年に陳笠代議士になつた丈けであるから、まるで階級が轉倒してゐたのであるが、今度は全く均衡が取れた。で、日石、寶田合併の際、暫らく社長の椅子を橋本君に讓る暗默の妥協が成立して居たと取沙汰され、又これが當然とされるから、或はこれを機會に、久寛栗城翁は隱退するであらうと云ふものもある。われ等の關知する所ではない。

此の人、人に會ふ時には、もみ手かなんかして、いさゝか顔を赤らめる樣にしをらしい態度を

見せるが、それで却々論客であつて、殊に勞働問題に就ては堂々一家言を特つてゐる。だから內務省社會局の參與といふ名譽職に推薦されたり、工業クラブの勞働法案審査員長になつた、大いに蘊蓄を傾倒したものである——工業クラブといふのは、御存じの通り日本の資本家階級の殿堂で、三菱系も、三井系もこれに加はり、故和田豐治君が其の牛耳をとつてゐたものである。

その死後は中心人物を失ひ理事長を缺いて理事の會議制になつてゐるが、內藤君は理事中でも押しの利く方である。卽ち實業家中での口利きなのである。彼は新聞記者界の人氣者である。といふのは前述の通り何に就ても一通りの議論をもつて居て、新聞記者に好んで面會しては、よく語る、だから記者連は何か經濟界に問題が起きると、直ぐに內藤翁の所へ飛んで行つて、『內藤久寬氏談』を一篇ものにするのである。好漢久寬君、勅選は先づ以て妥當であり、茅出度くもある。

不遇なりし
添田壽一

君は阪谷芳郎男と帝大同期(十七年)法學部の卒業であり又同じく大藏省に入つて秀才として競

爭を續けて來た間柄である。殊に法學博士になつたの迄同時の、明治三十二年である。

然るに、阪谷芳郎氏は添田君より一歩先に出て大藏大臣になつて男爵を授けられ、勅選ではないけれども互選の男爵議員として公正會の大幹部であり、貴族院壇上の每期の勇者として立派な政治家ぶりを見せてゐる。然るに、相手役であつた添田君は如何といふに、近來殊に影が薄くなつて、大藏次官、臺灣銀行頭取、興業銀行總裁、鐵道院總裁といふ樣などえらい經歷を有する人とさへ、若い者には思はれなくなつて來た。單にありふれた一介の法學博士で、武藤山治君に賴まれて實業同志會の顧問となり旗持ちをつとめたり、ともすれば、青二才と伍して代議士の候補者に推されたり、は餘りに情ないことであつた。

せめて勅選議員にでもなつてゐたら、とは彼の親しい人々の愚痴であつた。勅選にさへなつてゐれば兎にも角にも中央政界に發言權を持つてゐるのであるから、何時かは又、其の學識經驗で浮ぶ瀨もあらうと云ふ——のであつた。

ところが、其の願ひは漸く叶つた。大隈內閣の鐵道院總裁を勤めて以來憲政會的色彩のあつた君は、加藤子によつて僅かながらも酬いられた譯である。阪谷男の樣に澁澤の婿であつたら果して如何？

君は、福岡縣の平民の子である。幼にして神童とよばれ、六歲にして書をよくした。暇さへあ

れば硯をすつては筆を卸してゐる。ところが、其の父新三郎といふ人が、これが亦一見識ある人であつて、或日、ツカ〳〵と來て、壽一君の硯を取り上げゐなり庭の飛石に投げつけて割つてしまつた、呆氣に取られてゐる倅壽一に對つて曰ふには、

『文字をかくことは幾ら上達しても辭令書きや門札書きにしかなれない、天下に志す者には用のない業ぢや、やめてしまへ！』

硯を壞されて發奮したおかげで大學を出ると直ぐ大藏省に入り、とん〳〵拍子に大藏次官に迄出世した程神童ぶりを發揮したのであるが、大隈內閣が倒壞して鐵道院總裁をやめ野に下つて以來不遇をかこつ身となつた。興業銀行總裁時代に波佐見金山の採掘に五百萬圓を貸出してこれが前にかいた中川小十郎君の樣な不良貸付に終つて回收不能に陷り引責辭職したことゝ、鐵道院總裁をやめてから、東京商業會議所會頭に選ばれたが、時の農相仲小路に嫌はれて不認可となつたことは有名な話である。

その後長く報知新聞の社長をしてゐたがそれもやめてしまひ、麴町の大邸宅も人手に渡して貧乏してゐたが、加藤內閣にすがりついて、臺灣銀行の監査役にもなれたし勅選にもして貰つたから、先づ幾分のもりかへしが出來たといふものであらう。

根が眞面目な財政學者である。これから一つ貴族院を根城にして眞個の返り咲きを劃するが宜

しからう。

大阪代表

永田仁助

永田翁別名を圓滿居士と稱し、磐舟と號す。親父は仁左衛門といつて、役者の樣な名前の人だが全くの大阪町人である。町人の子と生れた仁助どんは幼にして藤澤南岳の門に入り朱子學を修めた。大金を投じて懷德堂を建てゝ其の理事長になつてゐる。

關東に於ける澁澤榮一の如く、又は死んだ和田豐治の如く、財界にごた〳〵が起きれば必ず飛び出し、又は引つ張り出され、仲裁して圓滿に解決をつけるのが其の特性である。人間が圓滿だから、圓滿居士の稱がある。朱子學に根を發した强い正義人道主義を、町人肌の圓滿でくるんで行くから、大概なことは此の人の手にかゝれば纏まるのである。

最近纏めたのでは、大阪の無電放送局のゴタ〳〵で、此の放送局が、利權爭ひや勢力爭ひで、困つてゐた中に引張り出されて喧嘩を納め、遂に自分が理事長になるの止むなきに到つた次第で

ある。又、今の大阪市の電車が、元大阪市電の所有で、これを市が買收する時は非常な八ヶ間敷い問題になつて、中に飛び込んだ仁助どんも、やれ賄賂を取つたとか取らぬとか、とんだぬれ衣迄着せられたが、然し遂に手打をさせて今では立派に大阪市で經營してゐる。此の爺さん、ブローカーをやつてほろいコンミッションを取るには餘りに朱子學が深すぎるのである。

扨て町人の子と生れた大阪人の仁助どんは性來根が算盤に明るく、浪花銀行の頭取、大阪電燈の社長其の他いろ〳〵な會社に關係したが、今はほとんど責任の地位を退いて專ら朱子學圓滿居士で財界世話業を營んでゐる。勅選は、そのたまものである。

大阪では、小山健三、片岡直輝、永田仁助、武藤山治、本山彦一、村山龍平の六人が財界の中心勢力であつたが、小山、片岡の兩人は早く既に勅選である。小山君の歿後は、大阪に割り當てられた(といふのも妙な言葉だが)一名缺員になつてゐた譯である。武藤君は、代議士である。本山君は大阪毎日、村山君は大阪朝日と兩大新聞の社長で雁行してゐるから、片つ方丈けを勅選にする譯には行かないし、又種々の事情上新聞の社長を勅選にするといふことは、政府にとつては考へものなのである。そこで、小山健三君が死んだ補缺に、大阪財界の元老である仁助翁を勅選にするといふことは當然なことであり、翁に取つても誠に目出度いことで一擧兩得である。大阪の町人仁助貴族院に列するの事は大阪といふ貴族崇拜の土地柄に照しても面白いことで、そのこ

とで――思ひ出したが、小山健三君は元文部次官、三十四銀行の頭取として大阪へ乘りこんだのであるが、その後勅選議員になると、銀行では、方々の看板の廣告を急いで塗りかへて、貴族院議員の五字を書きこんだのである。すると銀行の信用が非常に增した(……かどうかは聞き洩した)。『永田仁助』の上へ、大阪の澁澤、貴族院議員といふ肩書をつければ、仲裁業が益々繁盛する樣になるだらうと、かげ口をきく者がある。それは餘談として、前記中川、添田、內藤の三君が、現內閣系統と見るべき筋の人であるのに、一人永田翁だけは、政治的系統の何れとも屬されない全く腕一本の人であることを記しておきたい。

坊ちやん

鳩山一郎

燕尾服、フロック、モーニングの禮裝以外洋服といふものを持たない。碁や將棋もなか〳〵やる。それで日本趣味なのかといふにその住宅は全部洋館である。テニスをやり、球を遊ぶ。一滴の酒をたしなまずと雖も酒豪の令弟秀夫君とは大の仲よし……親の仇のやうに心得て『打てやこらせや憲政會』と政本合同に日に夜を次ぐかれが昨年夏箱根のホテルで加藤高明子と落ち合つて數日を暮し『加藤さんは正直な人だ』といふ。かういつた調子で、鳩山君の性格の中には相反する兩面が仲よく潜在してゐる。

我まゝのやんちや坊で、甘くて乘ぜられ易いやうにも見えるが、惡戰苦鬪を經たしたゝか者に見る洞察がきらめく。自重する時もある。いろ〳〵なものに雜然と取りかこまれた中心に、鳩山一郎がゐる。スポイルされてゐない處女性が光る。そこが彼れの人格全部であると思ふ。これを無くしさへしなければ大成する。

なんぞと易者見たいなことを申しても初まらないが、幹事長、卽政友會の支配人たる彼れにとつては來議會が一大試練場であるから生命あつてのもの種、身體をねるためにテニスに精を出すが賢明であらう。たとへば、それがから下手であつてたま拾ひのボーイに迷惑をかくる屢々なりと雖もチップをはづみさへすれば濟む。又テニスのパートナーには合同非合同の運動のそれの如く君を利用してやらうなんていふのはゐないから安心して坊つちやん丸出しが出來やうといふものである。さうだ坊つちやん、彼れは風彩も氣質も坊つちやんである。ひねくれてゐない。正直で强い。これ、かれの身上である。

策の人

小泉策太郎

高橋是清をやめさせたり、田中義一を擔ぎ出したりする策士小泉策太郎とは何ものぞや。小泉又次郎の弟でも何でもない靜岡縣選出政友會所屬代議士で、總務でも幹事でもない平代議士。曰く怪物、曰く策士、元は新聞記者で、後に株屋となり兜町は山栗株式店の手代からメキ〳〵と金をため、大連取引所理事長となり、例の大連取引所事件を起こし……と斯う並べただけでは、一向何でもない。

田中義一や兒玉秀雄を自邸によび、政友、革新合せて百卅人ゞ背負つて、次ぎの總理加藤子をたづねて大芝居を打ち、いやまだ、高橋政友會總裁に偉大な決心をさせ護憲運動の爲に四谷の邸を廿萬圓で賣り、麻布の現邸を擔保とし、いろ〳〵して五十萬圓の金を投げ出した男、一躍して政界の大仕事師として現れて來た男。

自分で大臣になりたいといふやうな野心はないが、無暗に仕事がして見たい男である。いはゞ仕事道樂。平常浪人をやしなひ、幸德秋水の如きも彼れがやしなつてゐた。その彼れに小說由井正雪の著のあることは、陰謀家としての共通點によるもので面白い。貴族院から衆議院の各派と懇親深く、多年、今日の下地を作つて來たが、表面には立たなかつた。——彼れ程趣味道樂それ〴〵の道に通じた人間はめづらしい。佛像、書畫、刀劍は素人ばなれがしてゐるし、碁、將棋、歌、俳句、漢詩殊に文章は古い文字を新しく使つて實に名文を書くその上に、家の設計までする。今住む麻布の大邸宅は、庭の趣向から、室々の設計その他細部に亘つて、かれの意匠にならぬところなし、といふのだから、氣の小さい人間は眼をまはしてしまはう。いやさ、その上に未だ禪の修業もしてゐるのである。かういふ男だから、金のないカチ〳〵の策士といさゝか趣きを異にして、味はひはあるが、その代はり設計した家も、いやになれば賣りとばす。禪はあきらめを敎へる。歌や俳句は執着をきらふ。——だが、金をまうけるにはあきらめ常習ではいけないであらう。

名の如く、策が必要にちがひない。

紬縞の着物

三土忠造

羽二重の樣に滑らかではない、友禪の樣にあでやかではない。けれども丈夫で、もちがよくて柄が落ちついてゐる。三土忠造は手織の紬縞である。紬縞の着物を著た大番頭である、派出な仕入れをして損をするといふ商賣はやらない。——何しろ根が敎育家である。文典の敎科書をかいて七千圓の儲けをしたといふ人柄だからいはゆる『政黨屋』的粗枝大葉の味はひにはとぼしい。極めて實用向である。

そこに惚れこんだのが高橋是清翁であつた。去る五十議會に農商務省からは政務次官三土君の外政府委員が議會に行かなかつた。高橋農相はあの通り脫俗家である。それで三土君は本會議でも委員會でも殆ど一人で引き受けて答辯をやつた。あぶなつけやごま化しは一ぺんだつて發見されなかつたが、そこで『三土は事務官だよ』などと輕蔑的口吻がやゝもすれば聞かれる。だが、

黨人で役人になつてかれ位の健實さを見せ得る人が何人あるかを考へると「黨人」のために心細くなる。岡崎農林大臣の如きは、役所によりついても小便か面會位のものでハンコまで三土次官に預けて安心してゐたものだ。三土君は高橋、岡崎の二大臣を戴きは戴いたが事實上の大臣だつたのである。羽二重友禪ばかり有難がらないで、紬縞の「實用向」を尊重するがいゝ。

今度は政府委員ぢやない。相かはりまして野黨の鬪士だ。稅制整理、豫算、かれのために與へられる場面は甚だ多い。——何しろ細かい事をよく知つてゐるし、派出ではないが辯は立つし、役人の經驗はあるし、委員會などで詳細に攻めよせるにはもつて來いの人物である。まあこの議會をうまくつとめ上げて、さてお次は大臣？そこで一言慾をいへば輪廓をも少し大きくしてほしい。

遺恨十年の髭

清瀨一郎

遺恨十年一劍を磨く……ではなくて「遺恨十年髭を剃る」は少くとも川中島の合戰より數百年

がたの新時代である。

さて、清瀨一郎君は美髯の美少年であつたが、十年にして髯を剃り落し無髯の美少年になつた。アメリカ人にあやかつたといふに左にあらず、——抑もかれの髯の由來はかうだ——外國から澤山の知識を頭につめこんで歸朝したのが大正四年でその年に大隈內閣治下の總選擧が行はれたのであるが、同志野添宗三君の應援演說に立つことになつた。所が、若年にしてくちばしの黃ろい憾がある。聽衆に馬鹿にされるおそれがある、といふので然らば髯などはやし尤もらしく壇上に立たんづ、といふのが動機で生やした美髯。

そして、かれが思ひ出深い國民黨に入り犬養木堂の麾下に立つことになつた記念として殘つた。以來十年にして國民黨の更生である革新倶樂部は解體の止むなき至り、木堂は政友會に身賣りし恨みを呑んで十年の同志と別れた。こゝにおいてか一念發起して髯をそり落した——。

髯物語りに現るゝ如く、清瀨君は感激に富んでゐる。そしてアイディヤリストである。十人の孤壘を守る革新倶樂部の中で本質的に、思想的に既成政黨打破、民衆政治の基礎確立を唱へ得る者は、尾崎咢堂と君位なものであらう。咢堂とちがふ所は、若いからともすれば野心を鋭角的に出したがる點と實際政治の經驗の足りない點及び神經質過ぎる點とある。

治安維持法の阻止運動に紛骨碎身した熱情はおほいに買はねばならん。議會においては、新興

勢力を理解せる自由主義の闘士として、大なる期待が彼にかゝつてゐる。思想と野心の上に熱を加ふることは政治家として最も必要な條件であらう。

理智の人

前田米藏

羽二重の布團の肌ざはり、但し模様にかいた木の枝が、ともすると蛇に見える。氣味が惡くて寢られない。

前田君にはともすると斯ういつた感じがある。小柄でヅンぐりしてゐて、目を細くして他愛なく笑つてゐるかれ、殊に關西辯を交へて無駄話しでもしてゐる時は、極めて肌ざはりがいゝ。けれど、あの鋭い頭腦とつめたい理智を、何所を見てゐるか分らぬその眼光を見出せば安心してられぬ氣持を對手に起させもする。

横田千之助とかれとの關係は今更ながらの事で、そして、横田なき後の横田である、と、取沙汰される人であるから敢て一言加へるが、横田には、猛烈な熱情があつた、前田はその代りに底

深くつめたい理智を蓄へてゐる。横田の死後は借金だらけだつた。打算的な前田はすでに多分の蓄財を持つてゐる。横田は表面に立つてどんちやん〳〵斬り結んで痛快の感を與へた。前田は、表面に立つことを好かぬらしく見える。

八方美人で如才のないかれは、岡崎は勿論同郷の先輩によく、野田、望月、山本、等々の幹部にもいゝ。田中總裁だらうが高橋總裁だらうが、一糸不紊の原總裁だらうが、どの頭目にもありつたけの信任を得たのである。斯くして今や、蛇模様、羽二重布團の前田米藏は、政友會中の人物として横田の後繼者たらんとしてゐる。

悲境時代の幹事長の役は人にいはれぬつらさがあつたらう。殊に補缺選擧はレコード破りに打ちつゞいた、前田幹事長は可成強い神經衰弱にかゝつた。氣の毒ではあるが、『これも試錬』と解脱してさて裏に廻り、表に立ち、縱横無盡に働いて、退いて總務となり、神經衰弱もなほつたと云ふは目出度い。

ロマンチスト

星島二郎

星島君は、黨人臭の少ない黨人である。政友會といふ政黨は、金の人、力の人、腕の人、智の人、といろ〳〵な政黨に必要なエレメントを集めてゐるが、有馬頼寧とか星島二郎とかいふ黨臭がなくて、すつきりした型もちやんとそなへてゐる。有馬や星島は、黨内に於ける位置如何を論ずるより、社會的なそのポジションが、黨の爲めにどんな利益をもたらすかを考へなくてはならぬ種類の人である。有馬の華族社會における、水平社農民階級に於ける、知己友人のひろさ、星島の、大學方面に於ける思想的關聯、婦人參政權乃至公娼廢止論者方面に於ける位置、これ等は黨人になつてから出來るものではなくて、黨に入る時、持參に及んだ財産である。黨幹部たるものは徒らに眼前の黨利に沒頭せず、適材を適所に、そして、現在餘りにはなれすぎてゐる社會と政界との距離をちゞめる爲に、これ等二人の樣な人物を消化することが出來れば一舉兩得であらう。

星島が世に知られたのは大學を卒業して間もないころであるが、彼の友人森戸辰男は帝大助教授にして、クロポトキンの著書を配布したとか何とかいふ問題、所謂森戸事件なるものが起きた。當時新思想が非常な勢ひで頭を擡げつゝあつた時なので、世の新人若人は悉く政府大學當局を非難し、森戸助教授の裁判に注視した。この時に星島は、友人の爲め主任辯護士となつて大雄辯をふるつた。それが、彼の一頁。又友人早大教授木村久二が矢張りロシアからの文書を宣傳したといふ件で收監されるや、彼れ乃ち其の法律的世話を一切引きうけ、家族の財政的援助迄して新人の

最前線にはたらいた。友誼に厚いこと、に於て、新人仲間に德とされてゐる。

かうして世の中に出た彼れは法律家としてよりも政治家として建設することに自分の行くべき途を發見したやうである。

建設……彼れを私はかつて評して云つた。星島はロマンチックな創作家であると、中山侯爵の所有地であつた日比谷の三角地帶、これを彼れは欲しかつた。理由は、民衆的大建築をする。中には民衆意識にかなふ法律相談所その他萬般を見る……彼れの空想は甚だ怪しい計算の下に土地を買收した。ところが世の中はそんな甘いものではなくて、立退料だとか權利だとか、地上權だとか、いろ〳〵な面倒な問題が、後から〳〵陸續起つて、損はする、親(岡山縣星島謹一郎)から貰つた財産はなくす、有ゆる苦勞がひかへてゐるとは夢にも知らなかつた。

その他、彼れ、は「民衆の爲め」、の空想からいろ〳〵な事業に手を出したが、有ゆるものに成功しなかつた。けれども、こゝで見なほしたいのは、その爲めに彼れが決してひるまないことである。のみか「何糞」で益々世の荒波を潜ぎぬけようと努力する力を養なひ得たことである。理想の爲めに計算を誤まつて苦しんだ彼れは、貴といロマンチシズムを失はずして、みがきをかけつゝ「力」を得たことである。いま、彼れは、難關を切りぬけて、日比谷の大建築にとりかゝつた。やがて八層樓の建物が日比谷公園の前にそびゆる時、星島はその第二期の政治生活に更生す

るであらうと思はれる。

彼れは、その自覺して以來まだかつて怒つたことがないといつてゐる。友人に欺かれ、ペテンにかけられ、不法な談判に會ふことは彼れのやうに交際のひろい者には有りがちなことだが、然しどんな場合でもおこらない。自分の不德であると謙遜する修業、つまり忍從、これは、その母から感得した德だ、と彼れはいつてゐる。人を評し已を攻むるは宗教家的であり、政治家の第一頁的資格である。

更に彼れは、政治家の生活は家庭からはじまるべきであるといふ信條をもつてゐる。夫人以外の女の肌を知らぬは勿論であるが、といふて、他の趣味者を攻擊するといふことはしない。一見クリスチャンの如くしかも、クリスチャンでもない所に、新らしい型の政治家を見られると思ふ。

いまこゝに、彼れを各方面の人が評した雜誌がある。中から二三ぬいて拙評を補なふ。花井卓藏氏、年少氣鋒玉成すべき人。今村力三郎氏、大局の人、至純の人、熱情の人、安部磯雄氏、星島君の政治生活に可成り緻密な注意を拂つて居りましたが、其の紳士的であることを發見して喜んでゐます。山室軍平氏、星島君は信賴すべき高潔なる品性を有する。內ヶ崎作三郎氏、人格も圓熟し、見識も高くなりました。沖野岩三郎氏、數年間の新聞をくりかへして見て、君の惡口を

發見しない。廢娼運動の時すら、其の說明を一口もひやかし得なかつた。今日の議員で廢娼演說を堂々とやり、ひやかされぬ資格のある者果して何人あるか。等々々。

邁進居士

山口義一

山口義一は天秤棒でぐい〳〵押して行く樣な邁進性をもつてゐる。隨つて曲つてゐない。小策を弄することが政治家の必須條件なら、彼れは政治家ではない。が、今日の政治家でなくとも明日の政治家ではたしかにあり得る。大衆は、舊式政治家に倦きて、明るく强い政治家に甚だあこがれてゐるからである、お茶坊主的政治樣式より紳士的政治樣式に移らねば國は救はれぬ。

彼れが愛すべき少壯政治家であるといふ證據を一つあげる。いまは同じ政友會員だが、猪野毛利榮君が中立當時、政友會やら憲政會やらに散々な惡口を壇上から吐いたので議場混亂に陷り、各派の荒武者は邁進して彼れを毆りに行つた。わが義一もその一人である。彼は眞蒼に悲憤してさゞえの如き拳をふり上げて猪野毛君の頭上めがけて打ち卸さんとした時に「まあ待つた」と止

めたのは、憲政會の、九州の大親分吉田磯吉君である。『危ない！　待つて！』――この日はそれなりになり、山口は暴漢にもならずに濟んだが、後で吉田は、山口を一夕招待した。そしていふ『貴方が怒るのは無理もない。わしでさへ毆らうかとした位だから……然し彼の時彼の元氣で毆つたら恐らく殺してしまふと思つたからお止めだて申した、惡しからず』

と、義一の勇をほめ、然し勇はよく〳〵の時でなければ振ふべからざることを說いた。山口はこれを德とし以後決して暴力を振はなくなつたが、以來吉田、山口の交はりは反對黨同志にも拘らず親密になつて、義一、磯吉は互に往來してゐる。邁進性も豐富だが、一面理に服するを以て好漢とする。

政友會の若い者の中で、黨の長老を怠らず訪問するのは彼れだ。岡崎、高橋、野田、予備役に入つた人々を叩いてはその閑日月をたのしませ併せて自分をみがく心がけをたゝないのは感心である。人情に薄い人は、いくら頭がよくても大政治家にはなれない。

又、若い議員の中で彼れ程遊說に歩く者はない。身、たゞ政道三昧で他に職をもつてゐるわけでなし、利權をやるわけではない。だから、あの熱辯を日本中にふるふべく彼れ程都合のいゝ、者はない。だから黨の幹部は演說會といへば直ぐに山口義一！　といふ位である。一時中川良長と組んで、政友會の貴族院改革論者を代表して日本中遊說したものだが、今はなりを靜めてゐる

けれども、政府黨となつた場合敢然として貴族院改革論をふり廻す勇者は、まづ〳〵彼れををいてなからうと思はれる。權に從つて理をまげぬところが彼れの身上である。かういふ型の政治家が政權をにぎる世の中に、早くしなければならない。

月給四圓から

森　恪

月給四圓、三井物產の詰襟服から叩きあげ、二十八にして三井の漢口支店長、三十九にして滿鐵事件の中心人物になり、當時一億に近い現金を握つてゐた、といふわけで、森恪、力の人であることはわかる。

私が彼れを發見したのは、彼れが大正九年政友會の一陣笠として當選するや忽ち滿鐵事件を惹起し原內閣の致命傷にならんと迄した時である。卽ち、塔蓮炭坑を滿鐵に賣つた。滿鐵は高く買ひすぎた。其の間不正があり、其の金は政友會の選擧費につぎこまれたに違ひない、といふ事件だ。政府は勿論、森もひどい攻擊に會つた。――彼れは、或日の院內代議士會に、卓の上へとび

上つて叫んだ。

『商賣人が物を高く賣るのは當り前である。何が惡い、そして、政友會に何等の迷惑がかゝるわけがない』この時に、私は彼れを發見したのだ。商賣人にしては熱情にあふれてゐる。此の熱情では、もうけて金を政友會に注きこんでゐやう、兎に角面白い奴が出て來たものだ……。と、その後滿鐵事件の人々は皆無罪になつたから、不法でないことが證明されたが、たゞこの事件で、彼は銀行などからは警戒されるし、不景氣にはなるし、目下は非常な貧乏で、三百萬とかの借金をしよつてゐるとかいふ。けれども彼れ鼻つ張り强うして借金位屁とも思はないのみか、此の苦勞が、俺を政治家に仕上げてゐるのだ、と豪語してゐる。自信の强いことも日本一である。

支那の第一革命の時かに、漢口支店長であつた彼れは、會社の金を獨斷で亡命支那政客に與へどん〳〵日本ににがしたことがある。その太つ腹さ加減は、到底普通の會社員に出來る藝當ではない、と、犬養木堂が感心してゐたつけが、これもかれが政治家の素質の然らしむる所だ。

彼れが父は旗本で、自由黨の先輩森作太郎といひ大阪の市會議員などやつた人、かつて病を別府に養なつて危篤に陷つた。時に中央の政情は險惡だつた。が父の危篤に彼れは見舞ひに行つた玄關を上るか上らないに父君はいきなり怒鳴つた。『今頃何しにのこ〳〵九州下り迄やつて來た！此の政情を後にして？、直ぐかへれ！』恪は親父に叱られ、一寸上つたなり直ぐ東京へ引きかへし

た。此親にして此子あり、氣位と鼻つ張りと精力とで困まつてゐる。夫人は瓜生大將の娘……普通の成り上り者とは根がちがふから、從つて所謂成金根性はない。金があれば青年を養なふを以て樂しみとする、などはい〻心がけである。

森は、横田千之助に似て縱横な働らき手である。頭が冴えすぎる。鼻つ張りが强い。從つて敵を作る。この點が、大衆政治家としていま一段の修養を要する點であるが、年のせゐで段々丸くなるであらう。若いうちからいやに妥協ばかりしてゐる奴にろくな奴はない。こんな男だからこそ、貴族院改革の火の手をあげ、朴烈問題に火をつけ、危ない中を平氣で通つて來る。時に失敗もある。それは修業の土臺とすべきであらう。政友會で、二代目横田といはれる彼れ、支那流の豪放と、西洋流の知識と、日本流の鼻つ張りを併せそなへた彼れ、その將來は可成りの興味をつなぐに足りる。

鬼子？　否？

野田俊作

豆腐屋だらうが、納豆屋だらうが、腕あつて出世するに何の遠慮の要るものぞ、馬槽の中に大工の子と生ひ立つて、人類の救主と仰がるるキリストさへもある、野田卯太郎居士が藺で有名な大臣になつたとて誰も卯の花大臣などとは申上ない、即ち彼は一人前の野田翁である。

が、其長男、俊作君には「卯太郎の倅」とハンデキャップがつく、ついたからとて凡庸といふ譯ではない、鬼子でないだけの質は應分にもち合せ、而して房州から親父の様な政治家にならうと心掛けて打つて出た。

滿鐵事件の當時、其の庶務課長であつた爲め、證人として幾度も法廷に立つたからではないが、今は浪人、政治家である、大學を出て、直に滿鐵へとび込んで、現業員から、奉天の驛長に出世それから辭職當時の地位に有りつく迄、たとひ親父の七光があつたとしても苦勞の階段は一通り踏んでゐる。

其間、多少の金をためてある。浪人二年で鋭氣と戰氣とを充分養ひ、新生面を開拓するの機正に熟す、といふ所で夫人(古市男爵嬢)の郷里たる房州から打つて出た、親父の政治的地位を相續出來るや否やは問題である。

彼は堂々(?)たる體軀容貌に親父の血をうけてゐる、生活がジミで、メーボー式の様で、細心な點も亦、卯太郎の鬼子でないと思はせる。目下の修業は、力めて他を抱擁せんとするに在るらしい。蘭を描かず、ワハ、、をやらず、エターナル、シガアを口にせぬ所親父に似ぬ位なものだ。親父もよい息子をもつたとほめられる譯。

道樂といへば、妻君や子供をつれて活動寫眞に行く事キャラメルをしやぶり乍ら映畫のチャップリンに笑つてるあたりは親父の綿句より、他に害を及ぼさぬから罪がないと申すべし。但し此人夫人の監視甚だ嚴にしていさゝかの政治家常道(?)をふむことも許されず、行く先々から電話電報で居所動靜を夫人に報告するの義務を負はされてゐるが如きは、いさゝか物のあはれを催ふす。然し監視の目をうまくのがれて、脫稅を講ずること、必ずしもなきを保せぬかも知れぬ。

合法的彌次

小橋藻三衛

小橋藻三衛君といふ政友會の代議士がある。この人は犬養木堂の子分であつて政友會では御大の身賣りについて「わたしや賣られて行くわいな」の人物。この小橋君は議事妨害のチャンピオンなんだ。しかも合法的妨害だ。

かつて原内閣の普選の名において議會を解散した結果は、いはゆる政友會の黄金時代二百八十三名の絶對過半數を制して隨分無理押しを通し、憲政會や國民黨は手の出しようがなかつた。

その解散後の臨時議會に、それも最後の日のことだ、政府與黨は、どうしても今日中に議事を全部終了しなければならぬが、それは勿論多數だからわけはない、と高をくゝつてかゝつた。

午前十時から會議ははじまつた。小橋君は、決算委員長(小田切盤太郎)に對する質問を通告して登壇した。ところが、その質問の原稿は何であるかといふに選りも選つたり、實に大部である所の決算報告書である。そいつを第一頁から、ゆつくり〳〵と讀み上げるのだ。讀み上げておいては合の手に『この點は如何』とやつては水をのむ。水をのんでは又讀み上げる。盡きざること濮の如し、體力のつゞく限りやる、といふ策戰がわかつた時には、さすが豪放の時の議長奥繁三郎も弱つてしまつた。小田切は勿論、大多數の政友會が、一小代議士を何とすることも出來ない。

時間は遠慮なく經つ。夏のことだから演說者も汗みどろになる。しまひには眞蒼になつた。けれども、規則は演說を中途でやめさせるわけには行かない。かくして彼はひる飯もくはず、只水ばかりがぶ〳〵のんで遂々四時間といふ議會のレコード破りの長演說をやつてしまつたが、その後更に彼の實弟高草美代藏は當日引つかゝつてゐる、委員長の議案一つ〳〵に對して質問の通告をしたのである。この策戰でやられてはとても今日中に議事が濟まない。大事件だといふので奥

議長、粕谷副議長から泣を入れて、合法的議事妨害を中止して貰つたのである、兄弟が憤慨した原因は前日兄藻三衛の發言通告を取上げなかつたに發する。

その小橋君が、先には政友會に矢をむけたのだが、今度は、奇しきえにしの廻り合せで、その政友會の爲に議事妨害の壇上に立つた。

それは三月初旬のこと、いよ〳〵政友會は憲政會の眞正面からぶつかる方針に出た。それには議事を進行せしめず、困らせてやれ、といふのである。といふキッかけは、民事訴訟法案が提出されたが、多數黨は、委員會で詳細な質問をやればいゝといふので、質問を打切つてしまつた。さあ怒つた。しつぺ返しの策戰は『議事進行に關して發言を求める』といふ合法的妨害だ。

小橋君は又登壇した。夜の八時過ぎであつたらう。

『そも〳〵民事訴訟法案は、實に重大なる法案であるが、これを一人や二人の質問で打切るといふことは、實に不都合である。』

とはじめたものだ。卓上には原稿がある。印刷してある。又やるな、とよく見れば、法律雜誌である。何でも長々と民事訴訟法改正に關する論文がかいてあるらしい。そいつを讀んでは、合の手に『かくの如き重要なる……』をやるんだ。そのやるやだ、議場が騷いで徹底しなくてもそんな事は勿論條件外だ。ゆつくり〳〵と、水をのみ〳〵卓を叩き〳〵春日遲々とやらかすのであ

る、それが又、議事進行に關することの埒外だと議長に發言を差し止められるが、彼は何しろチャンピオンだから、そこは實に上手にレールへはめて行くのだ。

粕谷議長は、小橋君にきいた『貴方のは直きにすみませんか？』小橋君『いやなか〳〵濟みません』――で何しろ夕飯を食はん人が多いし、議場では與黨がおこり散らすので、議長はやむなく休憩を宣したことであるが、休憩中政友會の幹部と與黨と妥協した小橋君は再び立たなかつた、小橋君は半分戰つて勝つたのである。何しろ、前回の決算に對しても、今回の法律に對しても全くの門外漢が、この妨害をやるのだからおどろいた合法的手段である。素人にはとても出來ぬ放れ業である。

目出度き人

松田源治

近來のユーモアは政友本黨の毒素事件であつた。毒素といつた、いはん、……い〳〵年をとり女房も子もある連中が青くなり赤くなりの體たらくは――かれ等『毒素』同志に取つては致命的大事件であらうがわれ等門外漢に取つては時ならぬ鼻笑の好題目で、笑ふことの少ない世智辛い當世、感激に値するゆゑを以て毒素事件の張本人松田源治君に敬意を表する。――『新聞にかいてあつたことをいつたまでだ』とかれは辯ずる。新聞の廣告をやつたまでで先生の意思は全くない、といふ論理になれば痛快だが、さうなると松田君なる人格は消滅のおそれもある。けれども左樣お考へにならぬ所が松田君らしい點で、更にわれらはその存在に對して快きユーモアを感ずる、誠に近來得難き政治家である。

先生かつて英國に遊びロイド・ジョージに會見す。先づいふて曰く『予は日本のロイド・ジョージといはるゝ政治家松田源治で……』ジョージ氏あふるゝ微笑を浮べて曰く『光榮です』と蓋しその皮肉は幸にして日本のロイド・ジョージ先生に通じなかつたさうだ。この漫遊航海中先生はかねて蓄へてゐたあごひげを刈り頭髪を七三に分け『僕はこれから若がへつて大いに日本帝國の將來のために働くのだ』と、ところが豈はからんや、若がへつた七三の頭の中は極めて老人らしき考へを盛り、かり上げたあごひげの上の口は『自重卽政權』と思慮深きことを語るにのみ用ひらるゝに至つたのである。

知る人ぞ知る。かれ若かりし頃は頗る元氣者であつた。寺内々閣が成立して政友會これを援助すると決するや、憤然色をなして脫黨したこともある。早く松本君平君等と共に普選運動をやつた。その面影は、洋行以來すつかり無くなつてゐる。最近まで合同の要をといたのに、今度は非

合同を主張すると思へば若槻内閣倒すべしと怒鳴る。いよ〳〵近く床次内閣の内務大臣になる見込みがついたためであらう。として見れば目出度かりける次第にこそ。

單純邁進家

横山勝太郎

「研究會は政友會を嫌つてゐるんである」と憲政會の幹事長横山勝太郎君は斷定を下した。果して何によつて、然るか、曰く『僕は奴等(政友會)若い者の貴族院改革の演說會の樣子を聽いたがそれによると研究會の板倉勝憲子が聽衆の中にゐた、そして前へ乘り出して聽いてゐた。何うです板倉君は、どんなことをしやべつて貴族院に毒づくかを調査に行つたのだよ』この斷定に見てもわかる通り關羽髯の勝太郎君は天性單純にして、邁進性に富んでゐる。策や毒氣や色氣はかれに取つて全くの赤の他人なのである。板倉子は、人も知る政友系の人なのだ。

ところが讀者諸君、諸君もお馴じみの通り、かれは生れながらにして在野黨を背負つて立つかの如き存在性をわが政界に印してゐる。かれに高遠の理想を求めざる者と雖も、豚箱事件、民衆運動壓迫事件で政府に突進するかれの關羽髯呼號の壯快ぶりを痛とし快とし、時によつては苦笑

をこれによつて求めんとせざる者はなかつた筈でゐる。更に公娼廢止の人道的題目に至つては、正にこれ美しき夫人を有する代りにその選擧區に遊廓を有せざるかれの獨壇上であり、如何に世の淑女をして賴母しき議會人もありと感激させてゐるかを知らぬ者は……もしあるとすれば餘程迂濶の者である。

ところで、幸か不幸か、浮世はめぐる小車の、今は時めく政府黨となり、然もかれはその大番頭たる幹事長である。幹事長といへば議政壇上に立つて呼號することはむしろ外道で、宴會の世話院外團の機嫌とりを手初めとして黨と政府の聯絡から各種陳情の通用門を勤めるのが本職であるけにやかれは、朝から晩まで本部の一室に陣取つて次から次に、陸續として御光來になる鐵道、河川港灣、其他各種各般の陳情聽取に、日もなほ足らずの狀況を演出しつゝある。幸か不幸かはこの點を指さしていふのに外ならない。

雁が南に歸るやうに十二月になると毎年の例ではあるが議會が始まる。議會が始まる横山大人は人權蹂躙事件にありついたものである。さて今年も十二月になつて議會は來る。然りと雖も、この綱紀肅正內閣の下、左樣な問題の起りつこはあるまい。いや、たとひ江戸に間違ひがあつて現內閣治下に人權蹂躙問題が起らうとも、かれは髯をしごいて政友會の方をだまつてにらめてゐなくてはならぬ。政府黨の幹事長は、つらいものである。金がないからなほつらさが身にしみやう。

永井柳太郎と中野正剛

永井と中野は、憲政會内の二大論客であり、早稲田學園が產んだ所謂早稲田型、大隈型の雄辯家である。

大隈は脚の惡いので隻脚侯などゝいはれた。永井も脚が惡いので小大隈と稱されたが、中野正剛も、いまでは片脚が膝から下ない。大隈の秘藏弟子にしては妙なところ迄つり合ひがとれたもので、氣の毒ではあるが、ちよつと感心する次第だ。そこで、脚の惡い由來を話してをく便宜を與へて貰ひたい。

大隈の脚は誰も知る通り條約改正事件の爆彈だが、弟子共のは、それ程政治的な失脚ではない。

永井は三十八年に早稲田を出て、英國牛津大學に在學中、レウマチがこぢれて大分惡くなつたので醫者はギプスをはめた。

英國の醫者だから椅子にかけることばかり知つて、疊の上に座ることを知らない。洋式の腰掛け便所を知つて日本流のしやがむはゞかりを知らない。脚はいきほひ眞直ぐにのばした儘固まつたから、折りでもしない以上曲らぬやうになつてしまつた。そのおかげで、彼れには日本流の生

活が出來ない。便所へ行つてしやがむことが出來ない。だから、彼れは日本中を演說して歩くのに便所御持參……といつても、腰かける臺を持つて歩くのだが、便所御持參の雄辯家は恐らく日本中にも世界中にも彼れををいて他にはあるまい。だが一方、脚が眞直ぐなおかげで德することゝいふのは、あの演說の時だ。衆議院に於ける例をとれば、『西にレエニン東に原敬』をやる時でも、又は『天に輝く一點の星、地に咲く一輪の花』をやる時でも、先づ杖をたよりに悠然として徐ろに登壇する。演壇に上るに既に悠然たる處が聽衆をのむ。更に立つて、惡い方の右脚を半歩前に出して、上體をそり身に支へて、そして左の手を直角に、人さし指を上下左右に、ヂエスチユヲ宜しく。『世界を人類の爲めの世界たらしめよ……』と來ると、思はず『ヨーノ〳〵！』とはやしたくなる程いゝ心持である。これがもし脚が惡くなかつたら、此の態度は出ないものを。

話しは逆もどりして、英國で脚の爲めに入院中のことだ、未來の大雄辯家もすつかりしよけこんで浮世をかこつてゐた。すると附添の看護婦が『足一本位なくしたとて何ですか、肉體の一部の失は精神力によつて充分補つて餘りあるではありませんか』と流石はナイチンゲールの亞流丈けあつて、かういつて勵ましたものだ。異境の病院生活に異性の此の激勵は蓋し、彼れに大きいショックを與へた。これ以來彼れは、改めて勉强しだして、植民政策の權威になつて、母校早稲田の教授となつて歸つて來たのである。脚も滿更馬鹿には出來ない。

中野正剛の脚は？

柔道を初段程やる彼れ、學生時分に脚の關節をくぢいて、それがなほつて見ると、外輪に曲つた儘今日及んでゐたが、どうも見つともない。なほるものならなほしたい。と、そこは選擧區福岡醫大の某といふ友人の醫學博士に相談したところ、それはわけがない、一寸手術をすれば立派に眞直ぐになる、といつた。そこで大正十五年暑中休暇、同じ憲政會代議士であり、整型外科の醫學博士である中原德太郎の日本橋の病院の手術室に於て、某博士は執刀した。

中原の病院でやるなら中原にやつて貰つたらよさ相なものだが、相談をうけた中原は『それは手術しない方がいゝ、曲つてゐたつて構はん』と斷じたので、それぢやまあ、手術論者の某君にやつて貰ふが、そこで、福岡迄行つてゐると用が便じなくて困るから東京でやりたい。ついては君の病院をかりて……といふことに話しがまとまつて、二週間もすれば完全になる前提で手術したのである。某博士は非常な自信家で、手術の器械から看護婦迄、福岡から携帶に及び、中原君には、手術の立會さへ拒んだのである。

さて、某博士、手術をすることはして見たが、さあ大變、足の指の先の方へ血液が通はなくなり、いきほひ腐つて來た。こいつは大變、仕方がないから指の先丈け切り落しませうと切つてしまつたが今度は尙ほ大變、足首から腐りはじめた、こいつは思ひもうけぬことなりし哉と驚いてもはじまらない。そこで更に切り落した。

ところが未だいけない。腐りはだん〴〵上の方へ進出して止まるところを知らず、これでは仕方がない、と今度は慶應病院に入院して膝の上から切り落して漸くくさりを止めた。この間約半歲。折柄、朴烈問題やら、松島事件やらで、與黨の遊說部長たる中野君が、全馬力をかけて活躍すべき時期を、すつかり病院生活にすごし、しかも切らないでもいゝ足を切り落してしまつた。彼れは、人生觀をすつかり暗くしてしまつたのである。

けれども、今迄のせか〳〵した中野は病院生活の修業で泰然たる風格をやしなひ、更に、杖をついて悠然と演壇に上ることが出來れば、永井と同樣思はぬもうけものである。そして、第二世大隈は、義足をはめてゐるから俺の方だ、と本家になれば、もつともうけものになるかも知れない。それにしても、見つともないから整形手術をしてやりそこなつたのでは、一寸見つともない。まさかこれがもとで失脚するやうなことはあるまいけれど……。

永井は、かつて中橋德五郎を敵として金澤に鹿を爭ひ見事落選した。落選したが只では引かない。青年を集めて悲慘なる落選の辭をのべて名を賣つた。これで知れるごとく、彼れの身上は徹

頭徹尾青年向きの雄辯であつて、丁度われ〳〵が小さんの落語をきいてゐる樣ない〻心持になる。近來稀れな演說家である。これで加藤高明に可愛がられて外務省の參與官にもなつた。尤も、植民政策の造詣もあるけれど、此の方は彼れの『政治家』達成には大して役にたつてもゐない。

中野はいさ〻か趣が異ふ。かれの辯は永井の加く雄辯ではないが質に於て密である。これで聽かれもするが、然しかれは、其の外に政客としての策も略ぼ心得てゐる。山本權兵衛にくつついたり、犬養に飛びこんだり、更に安達謙藏の御機嫌をとりむすんで遊說部長になつたり、外務省から金を引き出して支那へ行つたり、ロシアと結んだり、なか〳〵やり居るのである。それだけ、永井より大きさが足りない。所謂新人の中でも中野丈けは一寸別な新人なのである。

そこで、將來どちらがのびるかといふに、それが私にも見當がつかないのだ。雄辯家勝つか、政略家勝つか、は蓋し興味ある題目なのである。

憲政會出身

政務官六人

柵瀨軍之佐

普通人にこの姓名をつきつけてさあ讀んで見ろといつても『さくらゐ、ぐんのすけ』と立所に讀み得るものは幾人あるか疑問だ。名前は六ッかしいが、人間は六ッかしいことはない。目尻が極端に下向きで從つて、斯道の達人であり、わい談にかけては第一黨百六十人の憲政會中その右に出づるものはあるまいといふ。つまり軟派なのである。

實業家で軟派である片岡商工の下に、かれが副大臣たるは誠にふさはしき選任なりと加藤高明の妙手（？）をとんだ所でほめるものがゐる。――それは冗談だが、さて原敬以來、その出生地たる岩手縣は、政友全盛であつて憲政會からはたつた一人、讀み難い名前の軟派氏あつて、よく孤城を守つて來た。つまり敵陣の探題であつたが、大正九年にはみごと落選し四年目で出直した選擧には選擧違反でやられ相になつたにもかゝはりませず首尾よく探題の盛直しに成功し、我黨

内閣にめぐり合ひ且また今度は政務次官になつたのは誠に目出度き次第だ。三十有餘の（決して大會社揃ではない相だが）重役だといふんだから大したものだが、金もうけと政治とチャンポンで餘り政務に熱中しないものだから、格別取りたてゝその『政治家』を語る材料はないし、五回の當選で落選期も勘定すれば可成古い人であるのにどうも存在が明瞭でない。金もうけ人種としての方が遙かにはつきりしてゐる。

島田三郎の下に東京毎日新聞記者をやり、それから大倉組には入つて、同郷の先輩後藤新平が臺灣民政長官時代に臺灣支店長として赴任し、後藤にとり入つて甘い汁を吸ひ出したのが、卅餘の會社の重役のそも〳〵であつて、後藤子の所へは今でも出入りしてゐる。

小山松壽

今度の金魚仲間で幸運の兩大關は矢吹省三と彼れである。參與官候補者に數へられてゐた人なのに同じ愛知選出先輩で呼び聲の高かつた田中善立君を拔いて出目金になり濟ましたのだから。

信州は淺間山の麓小諸の產であるが、遠く加藤の膝もと名古屋から當第すること四回まづお膝

元から、御機嫌と地盤をかため、中央においてはまたそれ〴〵御機嫌にそなへたおかげで、憲政會が野黨時代、黨の爲には留置場にまでたたき込まれた田中君を出し拔いたんだから豪勢だ。議會においては山犬の樣な三木と山猫の樣な彼れとは彌次の双璧であつたが、その彌次ぶりでも、悉く機敏に敵の虛を突いては議事規則の本をたづさへて演壇に飛び上がつたものだ。これが彼れの本來の面目である、樣に見られてゐたが左に非す、彼れ實は、敏な頭の持主であつたのだ。

その出世ぶりに見ても、早稻田を出て朝日新聞記者として名古屋に駐在する內に、機敏に立まはつて中京新聞を買收し名古屋新聞を起こして今日の勢力を築き上げてゐる。頭の恬く證據だ。彌次相棒の三木君、これまた頗る利口者で加藤總裁御機嫌の法を心得、この意味でもまた小山君といゝ相棒であるが、小山君の方が一回丈け先輩だからうらみつこなし、片や參與官片や副大臣。

新聞記者、社長、彌次、院內總務、幹事長、そして副大臣、（農林省）極はめて順調に進んで人にやきもちをやかれもするのであるが、然し筆者が比較に出した矢吹君とは全然おもむきを異にして正に堂堂たる出世である。何故ならば、君は親から身體と學資をもらつただけで男爵のお下がりはうけついでゐない。全く腕一本で仕上げた男だからである。副大臣になつてからの成績は、三木の大藏參與官よりも遙かに眞面目で、昔、彌次をとばせた面影などは何處にもない。野黨の時と政府黨の時と立派に使ひわける丈けの頭と腕前のあることを證明してゐる。

本田恒之

沈香も焚かず何やらもと……鹽氣もなければ甘つけもない。——政務次官になつて新聞にでも出なければ『ははアそんな政治家がありましたかナ』といふ程度の沈澱的人物。

藥にもならねば毒にもならない好々爺である。それでも長崎バッテンの國へいつて見れば、これで相當評判がいゝといふのは常平常選擧區の世話をしてゐるからであるにもかゝはらず昨年は青い黄いろい西岡竹次郎君の爲に蹴落とされやつと補缺選擧にめぐり合せたと思へば今度は武藤山治君の鞄持ちで西岡君よりも一層青く黄いろい森本といふ青年と苦戰をしなければならなかつた。つくづくと世の味氣なさを身ひとつにあの禿頭をかゝへつゝ感じたことであつたが天未だこの好人物を捨てず、拾ひ上げてビスケットにありつかせる——恐らく一世一代の幸運であり、滿悅であり、結婚當時の青年の心持ちであつたらうとはさもありなん。

石の上にも三年だ、安達老の骨折りと『九州からも出さねば』と振り當てからであつて、彼れそのものが必ずしも、必要でなかつたにしても加藤子にして見れば、恐らく大なる慈善事業に相違ない。恒さんは、養子である。長崎縣平民下田寛平の三男と生まれ源吉君の養子となり專修學校を卒業した辯護士、養子ぞろひの加藤內閣では、いさゝか肩身が廣いといふもの。

人物は單純にして策も謀も、抱負經綸も、殆ど何にも持ち合せがない。けれども彼れは憲政會員であるがゆゑに貴族院からの次官より民衆の前には肩身をひろくして可なりである。ショゲルに及ばず。但し、司法政務次官閣下ではあるが、省內、丸で他人扱ひ、重要問題の協議には一向あづからない。といふのは、いくら何でも氣の毒である。

山道襄一

憲政會中、將來ある人物を求めたら、彼れはまづ五指のうちに入るであらう。同鄕の先輩横山金太郎、荒川五郎君等をぬいて、幹事長となり參與官となり（實は、この役人が若き黨人にとつては墮落でもあるが）補缺選擧の當選常習者にしては極はめて順調である。然しながらそれが必ずしも安達謙藏、早速整爾の引立てによるばかりではない。それ自分の力にまつこと多大なることを認めるにやぶさかなるものではない。

山道君の身上は、速射砲的辯說を筆頭として圓滿、精力的、かけまはり、妥協性——しかしてわすれてならぬのは、いさゝかの秘密主義的官僚味（それは加藤、安達等の特質であるところの）

とである。が然しまた、黨人に必要である融通のきく男としての例は彼れがたつた四ケ月ではあるけれども、幹事長に就任するや、先輩早速君の附近に、早速君よりも大きな家を借りて引越し自動車を乘りまはし、何所からか知らぬが金をひつ張り出して使つた切れ味に徵してもわかる。自分は貧乏の本家本元の樣な男であるが、貧の中へとぐろを卷きこむが如き消極的人物ではない。ナヲに利權だつて一人前には出來ますよ。

朝鮮新聞記者をしてゐる間に『植民地で財を得る方法』を會得したとかいふ。これが政治家的資格の一ッ、も一つは、酒にかけても豪のもの、これがその二ッ、まあこの位條件がそろつてゐれば、大臣位にはなれると思つて勉强するがいゝ。但し、文部參與官が、役所の自動車丈けはのりまわすけれど、役所へは一月でも二月でも顏を出さないなどは少しはけし過ぎる。——尤も行つても用はないが——。

八並武治

憲政會の青年(半禿げでもまあ斯う呼ばせてもらひたい)八並武治、政友會の長老村野常右衛門

の兩君が壯士の名產地三多摩の中央八王子で對峙した大正九年の選擧は物凄かつた、血の雨が降つた、白刃が空にひらめいた、——その結果僅々の差で、野黨の一青年が勝利を博したのであつたこと如何に選擧ファンの血を沸かせたか。

最初の當選が斯ういふ花々しいものであつたから、彼れの性格を三多摩式豪傑式、と思ふと大間ちがひである。穩健、着實、質實、忠實、質素、勤儉といふ風に修身の本に出てくる文字でかこんだらあらはせると思はれるやうな人物である。というて、悪い意味において憲政會を表はす嫌味な官僚臭はない、いゝ小父さん、安心して物を賴んでおける人、といつた風な人である。じみな司法省は、本人の意思にはそむくだらうが、危なつ氣がなくして適任と稱したい。好人物の本田政務次官は看板で江木君は、八並君をたよりにすることであらうと思はれる。

その幹事長時代は、丁度政友革新との三派聯立內閣。政友會との聯絡、折衝に可成骨をつたが尻をまくりたがる政友會の人たちでも、八並君の悪口はいはない。尤も見樣によつては相手にしなかつたのかも知れぬ。何しろ、乘り廻した自動車の勘定を一々、自用、黨用と嚴密に區別したといふ几帳面な性格だから、江木君には好かれうが政友會向き卽ち黨人向きではない。酒を飲むでもなし(飲めば飲むが)女道樂をするでもなし、たゞ黨務に熱中した勤勉家だから、何度もいふやうだが、花々しくないかはりに危なく決してない。役人にしたつて田臭も放たず立派なもの。

大隈內閣成立の時、箕浦遞相から『娘の婿で氣心も知れてゐるし、大學も卒業してゐるし、八並なら』といふので秘書官に用ひられてからの憲政會員、黨人生活、だから長いとはいへない。當選することも僅に二回ではあるが、五回もやつてゐる山道君といつしよに參與官になつたのは出世の方だ。著實居士よ、勉强してくれたまへ。君の樣な人も必要なエレメントである。

高田耘平

大げさにひげなんか生やしてアイヌ人の樣に見えるが、こんな可愛いゝ人は憲政會中外にはない。滿腔の好感をこの『參與官』に呈したいと思ふ。農林參與官、この位本人がうれしがつて、はたから見ても適任で、田舍へかへつて幅が利いて黨內外から好感をもたれて——『これで死んでもいゝ』位な光榮でなくてはならない。

この小父さん、議場ではほんとに惡戲者で、大岡硯海氏に沿海洲の尊號を奉つた本家は彼れであり、議長から、つねに『高田君注意します』を食ふのでは、かれが高點者である。反對黨の人が登壇すると、たえず、ひげをしごいて奇聲をふりたてる小父さんだ。かれは眞情を吐露して騷援するのである。從つて悉く單純である。栃木縣の稅務屬、村の助役郡會議員縣會議員と叩き上

げて來ただけあつて、恐ろしく田臭ふん〳〵たるものがあつて、だからこそ農村振興の一枚看板は彼れにおいて最も妥當なる政綱でなくてはならない。かういふ人は出しておいても決して損にならないと、選擧區の諸君に申しあげておく。

栃木縣では故人横田千之助と彼れとが、政、憲兩派の頭目であつて、兩人は『お互はお互にはたき落とさぬ樣にしよう』と妥協してゐた。この小父さんにしてなほ且妥協するんだから甚だしく面白いのである。いまや强敵横田なし、彼れは一生懸命に憲政會王國をかためんとして農村振興を黄いろい聲でふりしぼつてゐる。

炭燒く翁

尾崎行雄

咢堂先生、今や全く理想政治論客となり切つた。前の內務部長、山田市長岸本某の爲に足どめをされ、久しぶりに選擧區にこびりついて見たといへど、勝つて見れば、矢張り小童小生意氣な、といふ事さへわすれて方角違ひの輕井澤へ。空氣澄みわたる高原、彼れの理想は益々みがゝれつゝある。彼れは政局は何う變轉しやうとかまはぬ。一に二を足して三になる軌道に乘らぬ政治には、無遠慮、無責任に論難し去る。げに野心を捨てた、または野心の持ち樣なき政客の心こそ、光風齊月のそれ！

いまでこそ、理想政治家で、國民の政治教育に專念してゐる咢堂先生ではあるが、過去をふりかへれば、うたゝ現實政治に執着したところの思ひ出に苦笑を禁じ能はぬものがある。岡崎邦輔君に背負はれて政友會を脫した歷史はまだ新しい。

伊藤公のいきてゐた時分卽ち彼れが進步黨の大頭目であつたころの一挿話。時の權勢伊藤とむすばねばならぬと思つた彼れ、あたかも日露戰役前で伊藤が滿州をロシアに、朝鮮を日本に各々引取るべしといふ論も高潮してゐた。

一夜伊藤公を訪問した。仲人は、望月小本郎君、伊藤公まづ曰く『大隈に斷わつて來たか？』曰く『否々國家の大事一私人大隈に斷わる必要なし矣』と、伊藤公心中私かに喜びつゝもづるい『俺は實は今夜、皇族によばれてゐるのだが、君の爲に招待をことわつてゆつくり談じよう』尾崎先生『シメタ』とばかり盛んに滿韓交換論に提灯をつけて口をぬぐつて歸つたものであつた。

ところが、犬養は、これをちやんとかぎつけてゐた。而して咢堂先生が進步黨で告別の大演說をして伊藤に走らんとする時に『待つた待つた』とこれをとめてしまつた。その後數日『尾崎、望月除名！』が發表——そのころから犬養と尾崎は各々の性格を充分に發揮してゐた。それでその時が『總理大臣尾崎先生』の芽を止めたのであつた。總理には永久になる見込みがない。然し理想政治家としての先生の價値は今後益々發揚されなくてはならない。十八にして新潟新聞主筆卅八にして文部大臣今の政治家中ではもつとも先輩。

故きをたづねて新しきを知る。昔新しかつた先生は、今にしてなほ新しい。ワシントン會議の一年前に軍縮を提議して何人にも振りむかれなかつたが、その翌年は如何？　犬養の軍縮演說！ワシントンの軍縮會議、ことごとく、先生の註文通りにいつてゐることをわすれてはならない。策をわすれた、理想の士、ゆゑに權勢をあきらめ、局外に立つ、ゆゑを以てこそ、一年二年の先が見える。斯ういふ人を輕んずることは大いなる過ちと知らねばならない。

理想政治家

武藤山治

英國の政權を握つた勞働黨はその當初十五名の候補者を立てゝ僅二名の議員を得ただけである——これ武藤君が實業同志會を組織し卅名を立てゝ八名を得たる辯である。この筆法をもつて行けば、近き將來に同志會は壓倒的多數を占め政權をにぎる、するとさしあたり武藤總理大臣の施政方針の大演說が拜聽できるわけだが、心配なのは筆者が、それまでこの世にいきてゐられるかどうかだ。

營業稅廢止、その他多數の政見を持つて乘り出して來は來たが、八名では交涉團體の資格なく、委員會は勿論の事、本會議でも或ひはろくに演說させてもらへぬ。——が然し、この樣な眼前の小さい現實は若くして（？）將來ある大理想家の武藤君に取てはものゝ數ではない。二人でも三人でもまして八名だ、政界革新の大を押し立てゝ進む以上、われに贊同せぬものは天下の愚者である。武藤君は、稀に見る理想家である。品行も極はめて方正である。旅行すれば夫人同伴令孃令息帶同、酒は一滴もやらず、宴會は西洋流にかぎり出席、もし止を得ず疊の上の宴會

に出る事あれば、同志が全部落選したより苦しむ程である。議員になつたから早速白バスをおくつて來た。けれど『これは開院式に出席する時より使ふものではない』との見解で、一々金を拂つて乘る。いまの日比谷座員中では、恐らく第一番の理想主義者である。

武藤は信念と精力が馬鹿に强くて、正義と打算を愛し、一徹無比の努力家である。これで鐘紡を七割配當の今日にまで築き上げ、武藤死去の僞電を打たれる程の勢力に到達したことは、國家のため鐘紡のため、實業同志會のため、慶賀尊敬に價する——ことを前提とする。

昔、鐘紡の株主といふものは總會があつてもなか〳〵出席してくれなかつた。社長一策を案じ株主總會にお辨當を出すことにする。と、株主の寄りが減切りよくなつた。その後お辨當の費用は實は株主のふところから出る譯になつてゐると知るに至つて、かれ等は自らお辨當廢止論を提出した——が總會の寄りは益々よくなつて來たのである。

選擧民は候補者からたのまれたり、金を取つたりして選擧してゐるが、實はお辨當と同じことで、自分のふところや權利が、それでどの位損してゐるかを氣づかないからである。これを知らしめることは武藤君が政治に志しを立てたゆゑんで、同志會が御苦勞にも市政刷新演說會迄開き廻るわけとなる——らしい。

だが然し好漢惜しむらくは、政治と會社事業とを混同してゐないかである。株主と議員、議會

と會社、總理大臣と社長――一つの會社を隆盛ならしむる者は、一國を隆盛ならしむる資格が……或はあるかも知れないが……どうも會社の人達の樣に武藤君のおもふ通りにならぬ株主、いやさ、議員が七割以上あるのは誠に慨嘆のいたりで、ひどいのになると失禮にも彌次り飛ばして立往生させたりする。少しお辨當でも出したらなほるかも知れん。

竹の名人

小川平吉

かれは、信州諏訪の山浦といふ田舍の百姓の子である。先任法相横田氏が足利在の百姓の子であり、野田長老が九州の豆腐屋の倅でありしするから大臣になつたとて今更『立志傳中の人』でもあるまいが、かれが若槻禮次郎氏と同期卒業の法學士である點は野田、横田兩氏と趣を異にし、かつ又加藤『大學內閣』の閣僚には、はまりの役のやうである。

射山と號して漢詩を作り、書をよくし殊にその描く所の竹にいたつては、一家をなす程の自信を持つてゐる。われ等をして敢ていはしむれば、射山先生が竹に自信をもつことそれ自體がいくらか、かれに禍して來はしなかつたか、竹は直である。けれどシャキシャキしてゐる。ねばり氣がない。大塊のなよやかな蘭が妥協と無理窟のシンボルとすれば、射山の竹は理窟つぽくて、ふんぞりかへるものゝシンボルであらう。景氣はいゝが親みがない。兎もすれば排斥される。竹は信州人の特性である。小川氏はたしかに竹に禍されてゐる。長い政友會の大臣級でありながら、その黨內における勢力は極はめて薄い。かれの出身地たる長野縣から、笠原忠造、二木洵、二人の政友會代議士で出てゐるけれど、これとて何も小川氏と密接な親分子分の關係にあるのではない。他は推して知るべしといふわけ。

加藤首相や犬養遞相とも深い交際の仲ではないから、いざ鎌倉といふ場合三派をまとめ、閣內に重きをなすの力においては、遙に横田氏におとつてゐる。極端にいへば、野田、岡崎が入閣しない以上實は、誰でも身がはりには入つて差し支へない。遺憾ながら小川先生もその一人なのである。

小川先生よ、われ等は極はめて好意に進言する。竹をやめよ。信州人の特徵を惜し氣なくゴミ箱へ捨てられよ。頭ははけたりと雖も幸ひにして御年わづか五十七歲、最近若き夫人を迎へ、洋々春の如き心境にあつて前途なほ幾春秋であるものを。

射山氏は、酒好きである。いまは『量を減すため』に、コップ酒二杯と憲法を定めておくけれ

とそれでもなほ、若き夫人に嘆願して『もう一杯』の違憲を敢てすることめづらしからず。大學時代から酒のみであつた。大酒家に悪人のあつたゝめしのないのが酒家の常道で、氏また豪傑肌の好漢であつた。(いまでもあるが、若い時分にはもつと〳〵)氏の先夫人は、有名な漢學者金井之恭氏の娘きん子とて、内助の功著るしき賢夫人であつたが、貧乏時代にはこの夫人の帶まで質入れして飲みあるいた程である。この糟糠の妻を失つて二年、さすがに酒も謹んでつめたくバサ〳〵した年月を味氣なく送つてゐたが、昨春良緣を得て現夫人を迎へてから性格が一變した。一時氣が荒つぽくなつたために大臣の椅子を取りにがさうとした程であつたが、まあよかつた、とは政友會内でのうれしき定評である。

小川氏は、最初大學の文科で古典漢籍を修めたが、生れつきが『將來の大臣』であつたと見えて、法科に鞍替をし卒業すると直ぐ辯護士になつたのだが、それから、かれが最初の選擧に鄕里諏訪へ乘込んだのが、卅二の時のことだ、貧乏辯護士の悲さに木綿の紋付よりない、そこでいかれの家の總支配人役をしてゐる守矢一太郎君等がフロックコートなるものを小川君に着せてつれていつたところが、案山子然たる珍妙な格構のかれを、誰も相手にしてくれない。この男が國會議員の候補かい、と氣味わるがつたが、まあそこは周圍の取りなしで兎に角演說をさせて見やうぢやないか、といふので立候補聲明の演說會を開いたところが、貧乏案山子の大將、天下國家

を論じ對米對支をまくし立て、でか〳〵とその經綸抱負を述べ上げてしまつた。『これや面白い男だ』といふのではじめて村の人々が一肌ぬぐ樣になつた。けれども第一回は、見事落選して折角の一張羅のフロックを質屋の藏へしまひ込んだ次第であつた。

射山君の若い時は、豪放であつた、近衛篤麿公等と提携して對外硬の運動を起こし殊に對支問題については多大の貢献をしてゐる。上海にある東亞同文書院は、かれが近衛公と共にこしらへたものである、朝鮮併合についても日韓協會をつくつて力をつくした。

かくの如くして、支那浪人の仲間に入り、政治の貧浪人と盟ひして野趣滿々たりし小川氏は遂に、ポーツマス條約に反對して日比谷の燒き打ち事件の指揮官となり、河野磐州、大竹貫一の徒と共に獄舍の窓から月をなかむるの國士となつた。この時分がかれの面目を最も發揮した時代で民軍の第一線に立つ位の元氣が充滿してゐたのだから、既に早く廿六議會に松本君平と共に普選案の提出者となつた左傾ぶり(?)は怪むに足りない。今は『大臣級』に去勢された傾向があるが併し、昔は立派な國士であつたことを忘れられては困る。

日比谷燒き打ち事件の裁判に横田千之助君は、小川君の爲に辯護に立つたのも今にして思へば奇緣だ、刑事々件をめつたに取り扱はぬ横田君であるがこの時の辯論は大雄辯で、その記錄はいまなほ小川君その他一味の珍重するところだ。當時、横田君は未だ代議士ではなかつた。

かれの覇氣をも一つ述ぶれば、最初政友會に入黨したが卅六年母黨が地租增徵案で桂公と妥協するや、かれは憤然脫黨して桂內閣彈劾案に署名し八年といふもの猶興會に花井卓藏氏等と卓を並べたり、また加藤高明子等と政交會に自由の論を戰はせたりして國士的風格を發揚させてゐたものである。

大臣慾がボツ〳〵出るやうになつた先生は、國士の國から脫して政友會に復した、そして原內閣の時には、二十六議會のことをわすれたやうに、普選反對の代表をさへ試みたのである。

射山先生にして見れば、同期卒業の若槻氏は三度も大臣になつてゐる。——十年も後輩の橫田君はお先へ大臣を失敬してしまつた。原內閣の時、漸くありついたのは親任官とは申せ、人口の統計か何かで算盤とペンをとる事務員の親方國勢院總裁であつた——。悶々たらざるを得んや。

第一歩から政治家として今日に及んでゐるかれは、いはゞ斯道の大家だ。役人をやめて政黨へ乘込んだやうな外樣とは家柄がちがふ。大臣になりたいのは決して無理でも外道でも何でもないのである。黨內から見ても、まづ小川氏が大臣になりお次ぎは山本悌次郎君と押して行けば、後につゞく者にも張り合が出やうといふものだ。張り合は黨勢伸張の根源だ。

さて諸君！　射山先生は、酒のみである。好漢である。正直者である。喧嘩早くて理窟が好きである。竹である。節がある。(從つて中が空であるなどとひやかしてはいけません。)かういふ男

が利權あさりの名人であるなどといふのは大局を見ぬ人の盲評である。けちくさい電話事件なんかをかつぎ出して彼れを責めようといふ者は、現代の政治家を知らぬものだ。われ等は小川氏の爲にかういふ解釋をしたい。一萬や二萬の謝禮を受けたからとて問題にされる程かれは善人なのである——と。

小川先生よ。幸ひに閣下は、國士たり民軍の第一線に死を睹して戰つた人である。この際まづ危ぶまれつゝある貴院改革の爲に昔日の勇猛心をふるひ起こされよ。然らば、われ等は、昔日、先生に拂つた敬意を新たにして先生の爲に盃を擧げるであらう。

座談の雄

岡崎邦輔

岡崎さんは女を口說くのが上手であつた、いや、いまでもある。陸奥伯の子分で働いた時分は七十二歳の老人でなかつたし精力も强かつたから盛んに荒しまはつた、伯は『女を手に入れる位の奴でないと政治家にはなれん』とほめ〳〵した。ほめられたから尙更遠慮しなかつた、いまでも

藝者相手にあそぶことにかけては恐らく政界の雄であらう、相手の藝者がすきなものは、うなぎでござれ、みかんござれ、ウイスキーでござれ何でもやる、決して我を主張しない。で、どういふ女がすきかといふにちよつとわるがいゝ、その女に色男がある、その男がまたちよつと、わるでゞもあるか役者でゞもあるとなほ興がのる——その手が政治道樂にも出る。何でもこみ入つた政情でないと面白くない、こんがらればがる程彼れの働きに油が乘つてくる、手練手管ですねたり口說いたりして目的を達する——。

岡崎君は星遞相の官房長を勤めた後、古川鑛業の理事となつたがかれの殘した事績は今でも古川電氣工業株式會社を支配してゐる樣である程、新樣式を取入れ改革をやつたものだ、古川市兵衛氏は旦那と呼ばれ夫人はお神さんと敬稱され店員は前垂掛けであつたのを、市兵衛氏を御主人、夫人を奧樣といはせ、前垂を背廣にあらためた。とまあ形式でいへばこんなことから內容改善をやつたので、アメリカ仕込みのハイカラを應用したわけであつた陰の人としてのかれが明るい方面の働きの一つである。

岡崎君は星亨の參謀長であつたことは知る人ぞ知る、原敬を世に引出したのも又岡崎君だといへる、といふのは第二次伊藤內閣の時に遞相星は東京市の疑獄事件の餘沫を受けてやめなければならぬ羽目におちいつた、伊藤公と星との間には入つて辭職の利を說き、そのかはりに後任者に

は原敬をもつてくるといふ段取りをつけたのはかれであつた、伊藤公の內心では大岡育造を星の後に据ゑたかつたのである、またそれ以前星亨が米國から歸つて隈板內閣倒壞にかゝらんとするや、かれは山縣と星との妥協使節となつて働いた。その働くや土龍の如く地をはひ蝙蝠の如く闇に飛んだといふことで、それは最近までちつともかはらない、片手にマッチ片手に水、ただ彼れはめくら滅法に働かんがために働くのである、だからして外に道樂らしい道樂のあるをきかない

紀の國屋文左衛門から陸奧宗光下つては岡崎邦輔君にいたるまで紀州はムホン氣と策略を併せた人に富むやうだが、然し文左衛門も陸奧伯も子孫に餘德を殘した話しをきかない、晩年は淋しかつた、岡崎君には賢夫人あれど實子といふものゝ一人あるをきかない、その點で淋しさをそゝるのである。

筆者は傾日岡崎君が大臣になつたお禮に宮家まはりをして來たところを政友會の本部で會つてその座談の妙に魅了されたことであるが今更ながら彼は座談の雄である。犬養、古島君等、策士系人物の特徵ではあるが、かれ等は座談で人をつりこむ術を自然に備へてゐると思はれる。岡崎君の如きは座談と智慧で多年政界の黑幕に馳驅して來た人であるのに、これから座談をやめて演說をしたり燕尾服を着てカシコまつたりしなければならぬのは御本人はどうでもわれ等は惜しい樣

な氣がしてならない。

追記、大臣も三月でやめ、病を得て靜養中の彼れは、政友會本部にも顔を見せない。次の選擧には引退するであらうが、古くてもさびのある彼れを再び政界の表裏に見得ないのはさびしいことである。

豆腐屋出身

野田卯太郎

『卯太郎どんがまた大臣になつたたい』と筑後三河の老人共祝意を表する爲に、豆腐で冷酒をのんでゐるかも知れない。豆腐屋出身のかれがほんにまた再び大臣になるのである。學識や、抱負や經綸や「大臣」に必要な表看板は他の人がもち合せてゐるが、卯太郎どんにはとてもかなはぬ道具が一つある曰く『妥協』である。かれが、めきめき頭を擡げたのは、政友會と桂との妥協時代である。伊藤、桂双方の間になくて叶はぬ妥協使節となつたのが立身の緒である。

議會の理髮屋で、卯太郎どんと筆者と並んで髮を刈つたことがある、如才のない床屋は、毛髮

の存在を肯定するに苦しむやうな彼れの頭上を頻に、鋏でパチ〳〵やる。かれはいゝ心持ちで鏡をにらめる……。

『先生理髮の必要、何ぞそれあらんや』と筆者見參する『ワハ、、、そけんこつなかたい、けんどわしが散髮賃は安うしてもよかたいな』

と笑つたが歸りには八十錢のところを一圓置いて、あの黑い宗匠頭巾をチョコンとのせ、首にハンカチを卷き例の葉卷をくはへ、例のスリッパ樣の靴をバタ〳〵引ずつて家鴨のやうに出ていつた。

かれの風采は、他人に少くとも警戒の念を起こさせない。かれのワハ、、、付きお國辯は針のやうに尖つた相手方の神經をにぶらす武器である。

綿入りの句と、葱のやうな繭とは偶然ではあらうけれど、お愛嬌の道具となつて客を呼びよせる。これ等の道具を揃へて大塊卯太郎どんは、その實鋭い自分の神經と、智慧と野心とを併せ韜晦して、馬鹿を裝ふ。かくしてかれは、再び大臣になつたのである。

かれに取つて理窟を並べたてる人間は犬や猫と同樣である。實際政治は理窟で取引出來るものでないとちやんと心得てゐる。けれども、ひとに散々理窟を並べさせておいて、ワハ、、で相槌を打ちながら、ポイントをつかんで利用する機智においては誰にもおとるまい。

また、かれは、主義とか主張とかいふものは人間の小さい道樂と心得てゐる。併も『何とかな

るやうになるたいワハ、、』でゐながら自分の思ふ樣にならせやうと努力する。要するに、外見上、二十八貫、かれの中心が脚の先にあるのか、禿頭の上にあるのか、臍にあるのか、さつぱり分からんにかゝはらず、決して中心を失はない特質の持ち主だ。

大塊は、豆腐屋出身で自由黨の壯士から縣會議員になつて、星亨や陸奥宗光の門に出入し、井上馨に可愛がられ……と、政治的經歷は餘りに知れ過ぎてゐるが、然し實業家としての野田卯太郎は、日本紡績界の先覺者であるといふ事實にいたつては、ウソの樣なまことだ。銀行界の經驗あり、紡績會社を興してその長たりしことあり、明治廿六年、紡績業の代表として、綿糸輸出稅廢止の運動に上京した思ひ出話しも、時によつてかれの口からきく。

かれの入閣は、加藤首相及び憲政會にとつては、政權維持の上から田中の身がはりで心もとないでもないが、然しまづ〳〵、いささかの安心を與へるであらう、高橋君の如き看板にあらず、というて横田君の如き危險性を有せず、性來妥協性をもつ上に、大臣のこころよさは、あれでなか〳〵わすれられんもんなァ。原内閣で遞相をつとめた時には例の調子で豫算分取りに成功し、部下優遇費をましたことなどは未だに、遞信部内の好評を保つてゐる。今度もまた、ワハ、、で楔役をつとめ省内では部下をよろこばす積もりだらう。そけんこつすつと實にいゝ心もちぢやもんナァワハ、、。

追記、彼れも亦、大臣をやめてから病氣になつて、政友會副總裁ではあるが、一向顔を見せん。岡崎と同じく次の選擧には引退するであらう。一種のさびしさである。

熱意の人

横田千之助

『大臣閣下』と呼びかけるは何となく尻ごみしたくなるわが横田司法大臣君は、それだけ官僚臭くない。星亨の玄關番から中央大學を卒業して辯護士となり原敬のもとに小走り役をつとめ三代目高橋に使へて世の政黨のあらゆる苦心と、享樂とを味はつて來た彼れ、たとへ大臣になつてうれしからうとも、卓上のベルを押して下僚を呼び寄せオホンとをさまる底の簡單な男ではない。

閣僚中大學出身。官僚出身が大多數をしめてゐる中に、彼れと犬養遞相丈は純粹の私學出の黨人である。こゝで犬養君も、横田君も、共に政革兩派を代表して入閣したいはゆる爆彈だ。成程高橋君が政友の代表ではあるが純粹の意味において高橋氏は金看板であり、重石であり、實際の

仕事は横田君に一任してゐる。内閣を永續させるも、短命にするも大げさにいへば横田君のあの小さい體の胸三寸にあるといつてよからう。それだけ彼れの他流試合の門出に期待される。

なる程、かれは、いま政友會の中心人物である。上は總裁から野田、岡崎の兩顧問、中は總務から下は幹事長幹事にいたるまで、彼れを中軸として萬事相談するの實狀で、黨内における勢力の匹敵者を見ないけれど、未だかつて、政治的には他家の飯を食つた事がない。改造非改造に始まり、護憲運動に至るまで——。

ところが、今度は、昨日まで敵として來た加藤子のもとに一閣僚として入つて來た。正に他人の飯を食ひ、他人の道場で腕を見せる時である。背後には百餘の同士が控へてゐる。五尺の身體自分一人のものでは勿論ない。何を成し何を行ふか？　勿論法律屋の親玉を以て有頂天になる程甘い男ではないのである。

横田君を策士として價値づけるものあるけれど、實は彼はロマンチストである。情にもろく涙を持ち、その多數の乾兒の悲境時代にはより多く面倒を見るといふ性格と、直覺力に富み、一本調子に押し進む點は全く天才肌のロマンチストのそれだ。

因襲打破の建議案を出したかれは、いま貴族院改革に火をつけた。これといひ、かれといひ、策としても上乘だが自由黨的血管の然らしむる所、すなはちロマンチストたるゆゑんだ。近ごろ

暴れ者の彼れが佛敎にこり出したは面白い傾向で、圭角を現はしすぎるといふ批難を自覺もし「これではならぬ」と感じた結果であらう。彼れが南無阿彌陀佛で丸くなつてくると素晴らしいものが出來るにちがひない。

原氏のもとに法制局長官をしてゐた時分にも下僚の評判がよかつた。いくら辯護士でも、こまかい法令など最初からわかりつこはない。それで、その方は一切參事官の馬場鍈一君に委せておいたが、議會で、答辯の必要がある場合、下僚がちよつと耳打ちをすれば、要領を全部のみこんで立派に切りぬけたものだ。こんども、一切を次官下僚にまかせ專ら政友會代表としての仕事ばかりしてゐるであらう。だからこそ、こゝがほんとの他流試合の腕だめし——。

追記。此の熱情政治家横田君を失つてからの政友會を見るといかに彼れが中心人物として黨内上下を結んでゐたかゞ分る。

又いかに彼れが不人氣の政友會を生かしつゝあつたかゞ分る。今の政友會には中心がない、時流を先見して、先手を打つの敏な人物がゐない。

總裁の首のスゲ更へ、革新中正の抱きこみ、政本合同の失敗、朴烈問題の不手際、政友會の折角更生しかけた所へケチをつけたのはみんな彼の死後である。措しい人を失つたものである。

江戸趣味

岡野敬次郎

『加藤(友)君が一介の武辯なら僕は一介の法辯さ』加藤内閣の『副總理』であつた法相岡野敬次郎氏は冗談をいうたものだが、どうして法辯なものですか、そんなことをいつて自己をくらます方便を心得てゐるだけそれだけ立派な政辯なんである。

奥田義人と共に伊東巳代治の門に出入してから伊東子の法律顧問であり、權兵衛山本に深入りをしたり、田中男とも床次氏とも交はりが深いから非憲政かと思へば加藤子ともちよい〳〵會つてゐる、といふ調子で、方々へ糸をひいてゐる。大學教授とか法制通とかの書齋的人物とはいさゝか選を異にして立派な政客であり策士である。樞相穗積がもしも一介の學辯だと假定すればその女房役として、岡野氏は法辯であり政辯であるところをもつて誠に結構な夫婦役と申すもの、氏の江戸趣味を借用して大向ふから『ヨウ御兩人!』といひたい。江戸趣味……日燒けなすに唐もろこしの毛を髯にしてつけた様なコワ相な小父さんがべらんめぇの江戸つ子で江戸趣味だと聞いては奇異な感を起すかも知れないが、事實は事實で、旗本の二男坊に生れたのである。

道樂を數へるなら碁も將棋も初段以上、玉は三百はつく。ひげをひねり〳〵紅い街の道筋にも明るい。更にその食道樂に至つては、お刺し身をたべて料理人の年齢を當てるといふ程徹底したもので、もしそれ、かれの訪客が何か食物の話しでも持ち出したなら、ひげをひねつて膝を乘り出す。

めざしは千葉のどこの海岸の物で、時期はいつでなければいけないとか、鹽せんべいは向島の何とか屋のでなければ食へんのでわざ〳〵買ひにやるとか、紅茶はどこの、綠茶は何々、と聞かれて大概なものは降參して旗をまく。殊に茶の話しにでも入らうものなら、これはどこ、これは何と、利き茶(?)をさせられるんだから、その晩はきつと不眠症に襲はれるといふ、訪客は忘れても茶の話しをしてはならない。たゞ菓子の話し位をしに、午後の三四時に訪問する者は心得たものであらう。

江戸趣味は彼れの政治道樂にも及ぼして或ひは少し堂に入りすぎたかも知れない。だがしかしあゝでもない、斯うでもないの末、雲上高く樞密院副議長は、けだし落ちつくべき所に落ちついたものであらう。馬場、宮田の如きを追ひつかふ江戸趣味だけはおやめになつた方が、およろしからうと申すものか。

學士院から初めて勅選が四人出た。これは岡野氏が貴族院時代に下地をつくつておいたのがも

とで學者側にして見れば氏を大いに德としなければならない筈であるのに、大學方面では『餘り政治家になりすぎた』と毛嫌ひする傾向がある。どうも書齋的人物はかたつむり趣味に過ぎる樣だ。なる程、加藤(友)子の歿後、岡野內閣說が相當高かつた程の政辯だから、かたつむりの先生達には嚙み切れないだらう。無理もない。

さるにても、行政裁判所長で十年もコツ〳〵やつてゐたからせい〳〵山脇玄君だと思つてゐたら、加藤(友)內閣へさつと乘りこんで以來めき〳〵日燒けなすの男前をあげたのは矢張りたゞ者ではなかつたのである。

どうか、天皇の御諮詢機關の副大將であることによつて、更に國家民人のために適當なる考慮を費やされんこと至囑のいたりである。なぜといふに世間の口はうるさい。やれ岡野は交友倶樂部の族頭だとか非憲政だとかいうて、雲上に入つてもなほ政治的江戸趣味を出しやせぬかとうはさするものなきにしもあらずだからで、——尤もそんな連中は岡野氏の頭が如何にいゝかといふことを知つてゐるのであらうが——。

夢みる人

床次竹二郎

三派聯立の前提護憲三派が帝國ホテルに勢揃ひをして景氣よく盃を擧げようといふ前晩、大正十三年五月廿九日夜、床次竹二郎氏は寢に就いたばかりの所を電話に呼び起こされた。『もし〳〵わたしは清子です、清子です。五年前に、あの內務大臣官舍で、貴方に篤い看護を受けながら死んだ清子です。『手向草』をいたゞいた清子です。……いま、盛岡の大慈寺からかけてゐるのです原さんにあひに來たのです……』

床次君は愕然として色を失つた。失つたが氣を取りかへして、受話器を確り摑んでゐた。清子さんの聲は頗る平調で明確である。『……鹿兒島のお墓の下でこの五年といふもの、あなたの行動を一切見てゐたのです。後妻の恭子さんに、清子といふ別名までつけて、私を偲んで下さるあなたのお心がうれしいんです。——このごろは、何となく心配になつて私一人では量見に餘つたから、こゝまで原さんに相談に來て、いま御意見を承はりました。すると原さんはこれからが、床次がものになるかどうかの岐れ目だ。まあ見てゐなさい。苦勞の錆がつくとまぐろの刺身にもなれやう。實戰の大將にもなれやう。わしは、床次と橫田に望みをかけてゐたのだ。敵同士でもわしに

はおなじい分家ぢや。兩方一人前になつてくれないではわしも、實はお前さんと同樣落ちついて寢られないのだ――と。」

明日は、護憲派の祝捷會があるといふでは御ざいませんか、本黨の選擧委員をうけたまはつた貴方、多數を取りさへしてゐたら政權の中心人物になれた貴方…どうか一生懸命になつて下さいそして黨員に逃げられぬ樣充分の御注意をなすつて下さい。……さよなら。」

「もし〳〵君は床次か？　僕は原ぢや。清子さんが君のことを非常に心配して來てくれた。糟糠の妻は死んでからまで良人の身の上を心配してゐる。わが輩も淺子と二人で感銘したところだ。序いでだからわが輩からもちよつと註文をつけてをく。君は人格者だといはれていゝ氣になつつちや、不可ないよ。人格者が政黨を引まはせると相場がきまれば、名僧知識は皆首領になる筈ぢや。藝妓買ひをせんで、妻君と荻窪へテニスをしに行くのが人格者なら、洋行がへりの青二才は皆人格者ぢや。

――苦勞せい苦勞せい。臺所の味噌すりからやり直してくることだ。……これだけ……。」

床次竹二郎氏は「ウーン」とうなつて。そばに寢てゐた恭子夫人がめをさまして「あなたどうなさいました。まあ寢汗をびつしよりかいて……ほんたうにどうなすつたのでせう。わたしがまゐつてから、こんなことは一度もなかつたのに……」床次氏はムックリ起き上がつた。そしてだ

まつて腕を組んだ。「清子（恭子のこと）今、どこからか電話がかゝつたらう？」「いゝえ、かゝりませんわ。何故？」「さうか、ぢや夢だつたか。あゝ恐ろしい夢だ……」幕。

自主的洞ヶ峠の大將筒井順敬ならぬ床次竹二郎君の腹一つで次の議會が解散ともなり、平穩にも濟むといふから、この人の勢力といふものは大したもので、左に政友會を操り右に憲政會を提げ、然り而して次の政權はわが掌中にあり、大臣となりたい者は早く來り三拜せよと、まあ斯ういつた風な豪勢ぶりである。

それで內務大臣の候補者が曰く小橋一太、松田源治、川村竹治、等々半ダース豫約濟みだといふから更にえらい景氣である。

さるにても、世の識者よ「提携」と「合同」の字引的區別を上手につけて政友會をつり「政策では大して違ひはない」と憲政會に色氣を見せて政界の荒浪を漕ぐあの腕前はなか〳〵もつて金魚の刺身や觀兵式の大將のよくなし得る藝當ではないでせう。クンはすでに未成品の域を脫して完成されたる政治家でなくてはならない。

茫洋たる如く見せかけ、內々策を用ひるあたりは、惡口をいへば、まやかし物であるけれど、底氣味惡い「政治家味」を感ぜしむる。先般も邪魔者の合同派を一人々々待合かなんかによびよせて差し向ひで誠意を披瀝した結果「然らば總裁のために……」と感激せしめた結果、合同派は

大分數を減じたと申すことである。中々やりをるでのある。

人に語るには『合同の時にあらず、自分は鹿兒島の一味だけになつてやるのである。政權慾にのみからるゝが如きは政治家の本分にあらず』と御尤もな次第で、眞にそれが性格の本質から出た言葉であるならば誠にたのもしい政治家として尊敬しないではをられぬ。

たゞ、こんなことを眞に受ける程善良なる政客の甚だ少いことを、床次君及びその一黨のために遺憾としなければならぬ。

議席にあつては根氣よく居眠りをつゞけるが、床次君のいゝところで『ウチの總裁はかくの如く禪の修業が積んでゐるのだよ』と大人物としての讃嘆を陣笠氏からきかされた事がある。然し或者は居眠りを『或幸福なる生理的現象の精神に及ぼす影響』であると斷じた。何れにせよ、來議會には居眠りばかりもしてはゐられまい。洞ヶ峠の頂上からさて何方へ行かうかとすきなく目を見張つてゐなければならないから。尤も議場午睡裡に、政權圓滿授受の夢を見ようとあらば、これは、全然別問題である。

饅も喰べ能いた

清浦奎吾

衆議院の速記錄に殘されてゐる、七十五歳清浦總理大臣の民跡……否舌跡は、曰く『只今……只今……』の二句につきてゐる。すなはち、解散當日の混亂せる議場において、彼れが辛うじて述べ得た所のものは、右の二句である。ゆゑを以て、かれが總理として日本國民に對して殘したものはたゞ『只今……只今』に盡きてしまふ結論になる。『只今』何をしようとするのか、後世の史家は判斷に苦むであらう。

彼れは、いまや、辭職の決心をかためた。思ひめぐらせば、月給十五圓の代用教員から總理大臣の今日『只今』に至るまで、正に四十九年の間四九八九の官吏生活である。そして今や押しも押されもせぬ、准元老株である。首相の印綬をおびてをればこそ、口に稅金のかゝらぬ人民どもがやれ特權內閣の、殿樣內閣の、甚だしきは『只今內閣』のと申す。さあれ、由來健忘性でお人よしの日本人民である。一旦印綬を解けば乃ち『清浦は好々爺である。到底惡政黨者流と共に惡政を施す底の人間ではない』と申すに極まつてゐる。

ここまで見据ゑがついた以上は、たとひ手下の役人どもや、押し賣り與黨共が『暫く〳〵』と

止めようとしても止まるものではない。わが身にして見れば、准元老である。ステッキをついて、大森の附近を散歩してさへ居れば、天下の風雲自ら脚下に御機嫌をうかゞひにくる事間ちがひなき自分である、何を苦んで戀々と現職に止どまるものぞ！

さるにても、佛國ではボアンカレーといふ總理の内閣が總辭職をしたといふ。まつたドイツ國では、マルクス内閣が辭職をしたといふ。人民共は『外國では』とすぐにわが輩を目のかたきにいたす。これが誠に厄介千萬な……義理人情を知るならば、佛國も獨國も御饗宴後に投げ出してもおそくはない筈。日本に清浦内閣あるをわすれるとは、餘りに『世界の三大國の一』を輕んじ過ぎるといふもの。

まあいゝ。西園寺詣うでを終へて來た今のわしは、新聞記者共にいふてきかせた通り、全くそのまゝ光風霽月の境地にゐるのである。あの死んだ加藤友三郎奴が邪魔をして『饅香内閣』とかまつた藪醫者もどきの『流産内閣』と申したが、たとい五ケ月でも子は腹に止どまる。饅はまんまと味はふてしまつた今日ぢや。この上の慾は、准元老と散歩より外にない。もう潮時ぢや、潮時ぢや……。

こんなことを、とりとめもなく、わが清浦子爵は考へた。所は永田町首相官邸の裏庭。時は西園寺詣でから歸つた翌朝の六時、朝露しとゞ庭の綠に色ます。——樹々の綠は年に一度づゝ若やぎ、新らしくなる。けれど、人間は、七十五年たてば七十五年だけ古びてくる。こんな事を、かれは考へなかつた。『矢張り初夏の朝はいゝわい。伊藤公もこの庭を漫歩したものだつた。——さうぢや憲法義解を著はした伊藤公も憲法違反ぢやと人民共にさわがれるこの清浦も、この朝の庭を散歩するぢや。』

記者曰く。伊藤公も官邸に寢とまりしてゐた。清浦子も同樣である。子は、老夫人と、そして老夫人の實母と、女中二人に護衛三四人と、官邸に起居してゐる。この好々爺の晩年を全からしめんこと。四十九年の勞苦にむくゆること、これくらゐの好意を、國民はもつてもいゝと思ふのである。

非化石法官

鈴木喜三郎

清浦光風霽月居士の左右にゐ並ぶ大名の何づれを見ても肥料の足りぬ溫室そだち、その中にたつた一人矢でも鐵砲でも持つてこいといつた慨の山家そだちがゐる。曰く司法大臣法學博士鈴木

喜三郎君――大厦の傾かんとするや、一木のよくさゝふべきにあらざるに、その一木となつて躍動してゐる鈴木君――正はたゞのねずみにはこれなく候。

去る一月卅一日議會解散當日の議場大混亂のその時に清浦首相は故意にとぼけ、水野、前田その他のおとゞはキョロ〳〵目をまはし、小松氏は禿頭を青くしてゐるうちに、鈴木君一人は、あの百姓めいた顔を兩手にのせて大臣席から悠々と見物してゐたものだ。小面にくい程落ちつき拂つたそのすがた、たのゞねずみにはこれなく候。

お江戸の眞ん中日本橋で平常小癪にさはつてならぬ高木益太郎君の選擧違反事件を洗ひざらひ掘りたてゝゐる彼れ――これが田舍ならいざ知らず東京の眞ん中で――いやさ今度の選擧に水野手ぬるし賴むに足らぬとばかり、司法權をしきりに發動させ、選擧監視と號し部下を應援に差しむけたり、山の如く紹介狀をかいたりしたあたりの腹、伯大木のいはゆる『化石』に出來る藝當に之なく候。

なんでも、閣僚中一ばん金をつかつたとか、番町の邸も擔保になつてゐるとか……司法大臣と申せば學者か伴食かに相場が極まり、比較的政爭に超然として來たこの畑に副總理を以て自ら任じ、大童の親分的働きをした彼れを見出すことは、興味深い。司法權の獨立を侵害する……いはゞいへ『政治は力』なりと、彼はうそぶくであらう。まつた、司法官も人間であります、とね。

敵は敵とし、味方は味方とする彼れは直情徑行の熱血男子である。部下に對する情愛に飽くまで富み篠原秘書官が落選したので『うちの子供が落ちた、俺れや自分が落ちたよりなさけない』と告白する位。先年、澤山の子供を殘して死んだ三宅秘書課長の遺族の爲に先立ちで金を作つて子供の敎育費にあて、その殘りで小田原に家をたてゝやつた。部下の世話には金や時間をおしまないといつた人物。

司法部内は鈴木、平沼でかたまつてゐて、他の力の及ぶべくもない。平沼氏は『先生』的勢力であり、鈴木氏は『うちのおやぢ』的勢力である。鈴木氏と酒を汲む時、法官連は忽ちにして『化石』を脫せざるを得ない。清浦内閣の運命つきた頃のこと、部下と一宴催した席上『僕は野人である。齒に衣は着せない。何時やめるかわからぬが、やめても大いに働く積もりである。朝野何れにあるを問はず、諸君の御同情を得たい』と述べて乾分共を感激させた。

川崎在の一百姓の、ほんに山家そだちから身を起こした彼れである。面構への百姓然たるはもつともだが、その心に、愛すべき自然の血が流れてゐるのも麥畑の肥料のにほひがつたはつてゐるのであらう。

動脈硬化症にでもかゝつてゐるのではないかと疑はれる現閣僚中に、血管の直徑が一インチ位ありはしないかと思はれる彼れが一人あることは、面白い。壇の浦まで彼れの力で漕ぎよせるか

どうかは知るよしもないが、船がひつくりかへつたとて、そのまゝ平家蟹になりをほせる恐れはない、たゞのねずみにはこれなく候也。

純官僚型

倉富勇三郎

樞密院が大臣の經歴をもたぬ人を正副議長に戴くのは今日が初めてゞ、時代はそれだけいろいろな意味の進化を遂げた。――さて新副議長倉富勇三郎氏は大きい鞄をかゝへて宮内省差し廻しの二頭立の馬車に打ち乘り、都大路をカツカツと行く官僚の典型桂内閣の法制局長官、寺内朝鮮總督の下に司法部長をつとめて、頭のいゝ法律技師としての腕を振つたのが出世の緒、朝鮮組では先輩の目賀田男や荒井賢太郎君等を拔いての出世ぶりである、今でも李王職の最高顧問で勢力を朝鮮に殘し、令息鈞君も朝鮮銀行のいゝ所に座つてゐる。官僚と朝鮮加へて法律技師これが、かれの全體らしい。

うるほひや面白味や、融通は全くかれと無關係の味はひだが、たゞ酒だけはいくらでもいける。

そこにも官僚の味はひがたゞよふ。

司法省の法律學校出で司法官育ち、時めく人々の樣に帝國大學には緣なき衆生(?)。外國語はちつとも知らないといふ珍らしい型である、「わが輩かつて頭痛の經驗を持たぬ」程頭のクリヤーに加へての努力、それが學閥や政治家閥(?)をぬいたのだらう、その頭を使はなくては衰弱すると でも思ふのか樞府の會議なんかでは、一時間でも二時間でも細かい質問をそれも御丁寧に準備して來ておやりになる。

それでゐて、秘密主義もこれ位徹底した人はない、樞府會議の模樣をきく人があると「ハ、、成る程私は樞密顧問官でしたね」とこれつきり。

帝室の會計監督である帝室會計審査局長官を兼ね併せて帝室制度審議會委員であるが、議長は伊東伯で故岡野氏と倉富氏の二人が切つて廻したもの、性來の研究癖で通の通になり切つたので宮内省の役人の最高顧問格である、以上の如く倉富氏は純官僚である。

そこで樞密院は議長と法律專門家、副議長に法律技師を有し傳統的素質である政治的氣分はやゝ完全に消滅して法制局の上前をはれる――所となつた以後歴代の政府は枕を高うすることが出來るだらう、といふ噂である。

苦學力行の

荒井賢太郎

新らしい樞密顧問官古い官僚荒井賢太郎君は、若槻首相とは廿五年出の大學同窓、倉富樞相とは近親……近親も近親荒井君の長女ふじ子は倉富老の長男鈞君の夫人である。

それでまあさういふ關係はぬきにして、誰が見ても顧問官向きに生れついてゐる荒井君をまづ倉富老は推したかつたが『近親』の手前遠慮してもじ〳〵してゐる。それを察したのが流石苦勞人の首相、しかも自分とは大學も同期だし、大藏省へも共に入つた間柄だし、も一つおまけに最近還曆の祝ひに兩人がよばれて赤い頭巾をかぶり『これは〳〵お互にはや六十でござるのう』をやつたとしより仲間でもある。『荒井君は適任と思ふが如何で？』と倉富老へ話しを切つた。『それは結構でござる、適任と存ずる』テナ美談があつて出來上つた顧問官だから、目出度さが世間並を幾分超越してゐやうといふもの、おまけに朝鮮仲間の目賀田男の後任だから因緣ます〳〵深し。

苦學力行、荒井君の如きはまことに現世の珍。越後は高田藩の貧乏士族の長男と生れ、寺小屋の先生から志しをたて、司法省法律學校の官費生となつた。ところが時利あらず、官費生廢止となるに及んで、君は學資がないから退學を止むなくされた。ボアソナード先生は惜しんで『お前なら何時でも元の級に入れてやるから又來いよ』といつてくれた。秀才であつたのだ。かれの先夫人、同藩の娘かつ子さんは、夫を東都に遊學させるためには、はた織女の群にさへ投じた。夫婦して『將來偉人になるため』にあらゆる苦勞をしたのである。その夫人はすでになし。かれの感慨は、雪の高田の暗い星根の下にかへるのである——。

法律學校をやめて、苦學をして大學に入つた。小川平吉、安達峰一郎等は、若槻と彼れの同期だ。かれは小川の辯護士安達の外務省と別れて大藏省に入つた『將來二人の大財政家生れん』とは當時の評判であつた。倉富老とは朝鮮に度支部長官として渡つた時から、いや法律學校からの古い親友『おれの娘をお前のせがれと……』が成立したわけである

その朝鮮が因緣で、この程朝鮮土地改良株式會社の社長さんになつた——度支部をやめてからは、かつがれて東亞興業社長にもなつたから、あれでも實業家なのである。加藤友內閣には農相をつとめたし、清浦流產內閣では藏相に擬せられた。ひからびた貧相、官僚型の秘密主義、越後型の石橋をたゝいてわたる式、餘りパッとしないけれど、顧問官としては、倉富老といへども決して遠慮するがものはない程の適材。物平らかならざればなる、すわりが惡ければころぶ。これで荒井君も永住の境地が出來てめでたし。

智謀滿身

犬養毅

昔――といつても大正元年のことだから一と昔と半、國民黨の犬養木堂と政友會の尾崎咢堂は、民衆の前にくつわを並べて『憲政の神樣』であつた。

宮中から街頭に出て閥族政權の横暴をほしいまゝに振る舞つた桂内閣に齒むかつて民軍の先頭に起つたのである。神樣が民衆の前に立つや『脫帽！』の聲起こり拍手鳴りもやまなかつたものであるが、この戰ひの爲には大石正巳、河野廣中、島田三郎、箕浦勝人、武富時敏等と、いはゆる五領袖に逃げられた、いまに到るも恨み骨髓に徹する憲政會の前身同志會は、いはゞかれが『憲政の神』となつた痛ましい產物なのである。

その當時政友會の人であつた尾崎先生『何のための合同ぞや』と純理を振りまはしてゐるのも時にとつての御愛嬌だが、死ぬ程辛い目をして固守した國民黨を解黨して『さて新規まき直しぢや』とふるひ立つた犬養先生が、その看板迄あとなしにして政友會へ、しかも桂の直流である田

中の政友會へ、やせこけた腹の空つた郎黨を引つれて身賣りの相談……寢耳に水の郎黨が『おかるぢやないが、わたしや賣られて行くわいな……』としめつぽい聲を出すも無理はない。

恨んでも恨んでも恨みたりない憲政會ではあるが、大臣になり、郎黨に與黨氣分を味はせるためには協調もしなければならなかつたのである。

讀者よ、晩節を汚す木堂と慣慨するを待て『生ける屍犬養』などゝ眉をしかめるを待たれよ。政治は力ださうである。力なしには仕事が出來ない。仕事とは普選や、行財整理や、產業立國その他いろ〳〵であつて、これをやる爲には政權にありつかねばならんのだ――。

『俺も十年若かつたら……』と七十二の老木堂は、涙をのんだといふ。もう十年若かつたら、このぶざまなことをせずとも、何とか局面轉回の方策はつく。

改進黨、國民黨、革新倶樂部、だん〳〵とやせこけて來て、交渉團體の資格さへ失ひかけた子分共の心細さを思ふ時、そして自分の精氣と體力を靜かに思ふ時、さすが勝ち氣の木堂も涙をのんで軍門に降らざるを得ないのであつた。

策士に引ずられたといふ。まつたく引ずられた。國民黨解黨の際もいやいや乍らさうするより仕方がなかつた。老舗の看板を外して身賣りするにも、いや〳〵乍ら引ずられた。――かうするより外に道がないのである。

聰明な彼れが、この結果の不評判、そして彼れ自身の現役政治家としての終末を思はぬ筈はない。讀者よ、而して木堂信者よ、批評家よ！憲政の神様は飢えて路頭にまよはんとする子分のために暗涙をのんで軍門に降つたのである。子分の始末がついて、親はなくても子は育つと安心が出來れば、かれは靜かに現役を引退する腹である。『子を思ふ親心』老いと貧とを擊退出來ぬ親心、一掬同情の涙、またなきあたはぬではないか。

かれは乾分を引つれて安住の地位に託さうと決意した――乾分は或ひは親父の晩年を全ふさせるために合同に引つゞいた。といふ――兩方の感情が合致して合同といふ結果になつた。これ親子の理窟ぬきの情愛であらう。けれども、親父乃至長男一雄、養子清等のこころざしと事異つて廿八名の革新倶樂部廿名内外の子供だけしかついて行かない結果になつたことは、これまた涙の種でなくて何であらう。

われ等は更に木堂と咢堂と、しかして高橋是清の各々の晩年を比較して見る必要を感じる。

咢堂は生れ乍らにして實際政治家ではない、『政治家』の看板を掲げた政治批評家である。誤つて隈板内閣の文部大臣となり（併し本來の面目で辭職し）大隈内閣の司法大臣となつたけれども遂に實際政治界の落第者として批評家たるの地位に、いまや全からんとする晩年を送りつゝある。

木堂は、本來實際政治家である。それが尾崎君と並んで『憲政の神』になつたのが今にして思へば誤りであつた。寺内内閣の時に大臣待遇の外交調査會委員となり、超然内閣の山本第二次内閣には『普選の條件』で入閣し、犬猿ただならざる加藤内閣に三派協調を名としては入つた其妥協ぶり、現代實際政治家としての標本でなくて何としやう。

然るに（實際政治家の）彼れは、餘り多くの理想の不渡り手形を發行し過ぎた。其處に矛盾があり破綻があつたのである。

彼れが本來の面目に立ち歸つて、政友會に入る、これ時である、運である、命である。今にしてかれの頼りなさを責めるのは理想批評家の買ひかぶりであり、かれ自身の『面目』の迷惑であるかも知れぬ。即ち彼れも損をした、批評家乃至民衆も損をした、兩損であることを今にして知る。

是清には後途を心配すべき乾分もない。政友會には入つてぬけた、いはば素通りである。總理大臣慾にも誘惑された。然るがゆゑに華族を辭したり勅選をやめたり、代議士に出ても見たけれども、それが本來の面目ではない。――だから他動的にせよ、自動的にせよ、事實上政界を隱退した。しかして世間は、これを祝福した。これ自然の數であるまでゞあらうではないか。木堂は本來の面目に立歸つて非難され、是清は本來の面目に立歸つて祝福される。要するに木堂は損をしたのである。こゝに、又老木堂悲嘆の涙があるといふものだ。

咢堂、木堂、是清、三人三樣の各々が、各々の本來の面目に立歸つたことを、われ等はたゞ事

實を事實として是認したいと思ふのである。

追記、――本來の面目に立ちかへつて、大臣をよし、議員を辭任し（しかし止を得ず、再選されたが）て富士見の別莊に、都塵をさけて靜かな夏を送る木堂の姿は、丁度解脫した禪僧の趣がある。そして彼れは、實際政治家から、批評政治家に衣がへしたやうである。かうなつて見ると、本來頭のいゝ、觀察の鋭どい彼れの言說は、眞に生きて、聽くべき多くをもつてゐること、むしろ學堂の足を地につけぬそれよりもはるか上である。われ等は、改めて、これを祝福したいのである。

劍と酒の

西久保弘道

西久保君が大隈內閣の警視總監として記憶される二ヶ條、一に劍術奬勵、二に鬪犬禁示……劍術に巡査を狩たてゝ盜人がふえた譯でもなかつたから世論の反對もなかつたけれど、鬪犬にいたつては、やれ犬の改良だの、鬪牛の如く尙武的だのいろんな理窟をつけて、なかなかに反對が多かつた。けれども丸山保安部長の進言に從つて『それはいけんやめ！』と定めたら誰が何といはうと及むかふ奴は劍道師範の腕前で眞向からやつつける積りであつた。

かくの如く決斷力に富んだ人である。財政のことや、水道、道路、衛生、そんなことは助役諸君にまかせておけば自分が手をつけるよりより、よく手際よく、やつてくれる。たゞ最後に鬪犬禁止の決斷をつければいゝ。利に動かず。これさへあれば、恐るゝ何物もない、頭の中味が身體の割合に輕少でもこの際贅澤はいつてをれない、我慢しようではないか。

伊澤前市長は、身體は小さい、キビ〳〵してゐる、不健康だ、陰性だ。この度の大將は全くその反對だ。人に反感を起させないだけの德はそなへてゐる、少くとも『病軀その任にたへず』といふ不景氣な退却はしないであらう。あの風采を構はぬ點、たこ入道が和服の時は昔の貧乏浪人

洋服の時は小使さん見たやうな詰襟服――それが又、ちびの元市長田尻稻次郎子といゝコントラストだ、と市長の椅子が微苦笑してゐるのであるが――劍道では、誰でも知る通りの大家で、柔道の嘉納治五郎氏と貴族院に相對してゐる――といふ、兎に角いくらか時代錯誤的好感を發散してゐる人物。東京市もおかげで神經衰弱がなほつて春風が吹かうといふものである。

震火災の跡といつしよに、武士道が復興して『惡思想』を追拂ひでもしたらそれこそ歷代の名市長になるであらう――ではないか。

この名市長、本年六十三、廿八年赤門組の一人で、濱口、伊澤、幣原、上山、故下岡等秀才組の仲間だ。仲間だけれど外の同窓より二ツか三ツ年が上だ。なぜだ？　退校されて、復校するに三年かゝつたからである。横田大審院長などと同級で、上より勘定する方が遙に便利な成績にゐたが、廿八年卒業の時はお尻の方から最優等……

何ゆゑ退校された？　酒ゆゑに、戀ゆゑに『品行不正につき退學を命ず』

然しわれ等は、かれの退學を今の世のいはゆる不良の徒とは同一視しない、浮氣ではない、情熱への途だつたからだ。戀の勝利者となつて、現在つれ添ふみさ子夫人と夫婦となつてから以後一度だとてカフエーの女を張つたとか、女學生に付文したとか、待合遊びにうつゝをぬかしたとかいふ話しをきいてゐないのは、かれのため夫人のため、戀愛道のため、社會風致のため乾盃に

値するものだ。夫人が賢夫人なるにおいてなほ更然り。その賢夫人ぶりは、とおつしやるのでか？　それは良人西久保と共に名古屋へ參事官として赴任した時のことである。

劍術、酒、貧乏の合資會社である西久保君、冬さなか名古屋へ赴任するのに外套を著てゐない。出迎への高官連、汽車の中へ置き忘れたのだらうといそいで走れば、これをとゞめた賢夫人「いや主人はあの通り肥つてゐますゆゑ外套はいならいのです」とやんわり受け流して主人を救つた、とまあこのコツが弘道さんを參らせた次第で……。

いまでは、千葉縣八幡町の道場に集まり來るお面お小手の弟子達の世話をして、若い時分の苦勞が酬いられた樂隱居、良人はロンドン市長と肩をならべ、總理大臣の二倍もお給金をいたゞくことになつたことはまこと御同慶の至りにこそ。

その主人公と、前任者伊澤君とは妙な因緣がつきまとひ、大隈內閣に伊澤君の後を襲うて警視總監となり、今度又後を追つて市長となる。伊澤君の手加減も大分加はつてゐやう、持つべきは友にぞありける。

こゝでちよつと一筆加へておきたいのは大隈內閣のおかげで勅選になつた、しかも大學二十八年組の同窓に、伊澤、上山、西久保、菅原通敬の四君があり、十年苦節がむくゐられて皆々再び世に出たがたつた一人菅原君が取り殘されるので、同僚の遺憾極まりなかるべきところ、今後現內

閣が續いてかれに再生の機を與へれば、二十八年組同成會議員萬歳である。

かれの哲學によれば、劍術は汗を流すを以て目的とする。人間汗を流さずんば身體が痩る――食はんがために額に汗する者共から見れば同じ貧乏でも割がいゝと羨ましい。

また例の酒であるが、文字通り斗酒なほ辭せず、しかも、いくら飲んでも醉つてへゞれけになる如きことはない。酒道の恥と心得てゐる。そこでいふ『酒は醉ふために飲むのでない。酒そのものを樂しむのである』醉はんがために一杯の電氣プランを引つかける勞働者諸君にとつては羨ましき哲學であらう。

さて次に貧乏は何のためにするのかそれだけはかつて哲學を吹いたことがないのでわからないし、その體驗による戀愛哲學に至つては、口をぬぐうてスンともいはない。

去年の春のこと、八幡町の町長に推されたことがある。新聞記者に語つて曰く『皆がわしのいふことを一々きけばならんこともない。然し君、東京市長だけは御免だね、年中ごた〳〵してゐて壽命がちゞまるからね』と蓋し今日あるを豫想する術もなく、時の中村市長に同情した言葉であらうけれども、然し一旦市長になる以上は、八幡町長と同じい意氣『皆にわしのいふことをきかせ』て、明るく正しいそして眞直ぐな市政をやつてもらはなければ困る。閣下並びに諸君御承知の通り、東京市は重大なる復興途上にあえいでゐるのである、劍道の呼吸敢て汗を流すにあるのみならんや。

市の女房役

勝正憲

財政のことは一向わからんと正直に告白する西久保市長の輔佐役としては勿論だが、財源の行詰まりに苦しむ東京市へ一人の財政專門家を入れることは相當有意義である。從來、助役には內務畑の人を入れると相場の定つてゐた東京市だから、更に新らし味を加へた。濱口、西久保、三木三君の考へでがなあらう。

勝君は、東京稅務監督局長だが稅務の理論と實際に通じた點では有數の人物である。租稅知識の普及のために、稅務署に相談所を設けたり、雜誌を出したりポスターを工夫したり、又は稅務吏の民衆に接する態度に親しみを要求したりして、算盤と民衆とを結ばうとした。その一面には富豪大會社の脫稅を遠慮なくやつゝけて、隨分恨んでゐる金持もそこいらにゐる筈である。

收稅吏が極樂往生するのは、駱駝が針のめどを通るより六かしいとあるし、聖書の中では收稅

吏は世の中の一番惡い奴の樣にいつてゐるが、勝君などは新型の收稅吏だから、絹糸が針のめどを通る樣に極樂に通りぬけられるかも知れない。大藏畑にゐても、稅制改正については權威で從つて重きをなしてゐるから、進路は開けて主稅局長の如きが目の前にぶら下つてゐるのに方面を轉換する氣になつたのは、何か期するところがあるのであらう。

人間はそろばん屋としては花やかな方で、ホラも吹くし酒も呑む、大正十三年復興外債募集の際は駐米財務官として大いに働いた。東京市民の相談役には、いゝ人である、まづ〳〵充分腕を振はせることである。

漱石の親友

中村是公

中村コレキミ君は痛快に市長の椅子を投げとばした。むしろかれの親友夏目漱石が文學博士の雅號をどうしてももらはなかつたと同じ心意氣であらう。墨田川にボートのチャンで鳴らした昔『喧嘩是公』で鳴らした是公、馬に乘つて櫻花の下を片目で行く是公、櫻の花の心意氣でありスポーツマンの心意氣でもある、兎に角痛快だ。『武吉や院外團はおれの喧嘩相手には不足だよ』といふ所に違ひない。

漱石は文學をやつた。是公……是公、是公といつて失禮だがこれは漱石の眞似である。コレキミだの中村氏だのでは一寸かれの風格が出て來ない……是公は法律をやつた。漱石は是公の法律を知らなかつたし是公は漱石の小說を恐らく讀んだこともあるまい（と漱石が永日小品の中でいつてゐる）が二人は無二の親友であつた。そこで伊藤公が刺された時にハルビン驛頭で腰をぬかした是公、滿鐵總裁、鐵道院總裁の是公、臺灣財務局長の是公、それから東京市長の是公と後藤新平の腰巾着のやうに後から後へと廻つた是公を知らんものは『永日小品』や『滿韓ところ〴〵』の中へ出て來る是公と親しいであらう。

この是公には悲しみがある。片目つきりの妙な顏つきの是公は蠻カラでゐなかの百姓爺いさん見たいだ。昔、大學時代漱石とかれと菊地謙二郎が三角同盟を作つて獨身の誓ひを立てた時分は成る程是公なればこそだと思はせたさうだが、その蠻チャン眞先に名高い千代子夫人を迎へ作るは〳〵盛んに子供を作つて十人の子福長者である。

かれ稚氣愛すべきものあり馬の仲間と酒でものみ出したら馬丁とでも徹夜でのみつゞける。これからひまになるから東京糞をくらへと片目でにらみながら馬に乘つて酒をのんで子供を可愛が

つてまあ後藤總裁と共にボーイスカウトでもやるであらう。

役人中の新人
堀切善次郎

堀切君の復興局長官は疑獄事件や情實やにとらはれて牛歩の如き復興事業促進の上にも、なほ又日本の官界の馬鹿々々しい習慣である大學年代順をのみ尊重したがる官僚根性をたゝき破る方便としても結構であり、小さくいへばかれ及び若き夫人澄子さんを中心とする一家のためにも相當祝盃にあたひするものであると斷じてもよからう。日本よ、もちつと若々しくなれ！

四十二年の大學出は、次田土木局長、松村警保局長、川原田社會局部長、その他知事級に俊才を出してゐるが、その首席銀時計は堀切善次郎君なのである。兄善兵衛君が慶應の教授から代議士になり、政友會の前總裁高橋是清氏の秘書をやつて、すつかり政黨色に染まつてゐるのと無色勇往のかれと、どちらが善にして賢なるかは知らねども、役人畑で毛色の變つた逸物である點は相當認めてやつても宜しからう。

善次郎君は、頭が素晴らしくハツキリしてゐる、かみそりの如くスパ〳〵と切れる。自信家であり恐れない男である。

その土木局長時代歐洲歸りの新知識を『貴族院改革資料』の一著に發表した時は、丁度政友會あたりの改革論のさかんな頃だつたので、しうと阪谷芳郎男の在籍する貴族院の禿頭からにらまれもした。後藤東京市長の辭職後、一時市長代理をした少しの間に、市政を研究しスパリと道路局長のすげかへをやつた時の果斷、それから阪谷男のお孃さんである先夫人の逝いた後三年のドイツ留學から歸つて、今の夫人を、內務省の一タイピストから發見して、反對あるに拘らず結婚を敢てし……その結婚が非常なる好成績ををさめてゐるので、新夫人と先夫人のなした子供との間のむつまじさ、先夫人の命日には、必ず子供と共に墓參りする心がけ、夫へ忠實にかれ善次郎君をしていさゝかの憂ひを內に殘さしめない賢夫人ぶり、それは內務畑において、一つの美談とし又堀切君の先見果斷ぶりの一證となつてゐる位だ。すなはちかれは役人中のリベラリストでもある福島縣の多額納稅者の子に生れた善次郎ではあるが、都市計畫局長時代に、可成りラヂカルな市內の地所持征伐法の土地增價稅案を案出した、けれども握りつぶされた如きもその一例としてあげ得よう。

震災當時は內務省の會計課長としてはたらき、都市計畫土木の局長をつとめた後、あるひは非

常な拔てきとも稱され、あるひはけむたがられて敬遠されたとも稱され、兎に角一等縣の神奈川……それが復興途上の難路上にある……に使してはづかしめず、適任者として復興局長官に、われ等と共に推す次第である。

かれが、屬官の一人もつれず京濱電車の中に雨外套を左手に右の手に横文字の書物、ソフト帽をあみだにかむつた姿を、同じ電車にのる筆者はよく見うける。一青年といふ感じをうけて愉快なものである。青年の働くべき時代だ。

白髮童顏の

上山滿之進

上山滿之進君の臺灣總督はこの際天下泰平の徵ありだ。伊澤前總督もこれで安心して東京市長の椅子に心持よくよりかゝれるだらう。なぜといふにかれ等二人は大學も廿八年出の同期であり頗るつきの意氣投合で、おい、お前、の間柄だ。伊澤君が臺灣に植ゑつけたいはゆる伊澤閥を、恰度伊澤君が田、內田の一統を根こそぎ掃除した樣にやられる心配はないし、文政局その他やりか

けた仕事は其まゝま兄弟分に繼續してやつて貰へるといふものだ。——まあ一安心。

といふものゝ考へて見ればいくら仲よしでも伊澤と上山は、上山と伊澤程人間が違ひ考へ方も違ふ。原敬引つぎ高橋、加藤高明引つぎ若槻でも『前者をそつくりそのまゝ繼承する……』といつたが矢張りだん〳〵變革が加へられた。上山君とて木偶の坊でない以上、矢張りおひ〳〵上山色を出さずばなるまい。これは萬々承知の上としてこの際、前任者も後任者も『よろしくたのむ』『ホイ引受けた』。

上山君は、農商務次官として鳴つた人だ。大隈內閣には佛樣の樣な河野磐州大臣の下にゐて事實上の大臣をやつた。反對內閣寺內にも引續いで仲小路といふ細かい人の下に次官をつとめた。仲小路として見れば、先代から引つゞいた事實上の大臣が邪魔で仕方がないからくびきりたいのは山々だが自分と同じ長州同志、御大寺內の目が光るので左樣簡單には參らない。上山は次官室にをさまり返つて、大臣がベルを押しても出て行かんといふ調子だつた。以來悲境つゞきのかれにとつて、當時は恐らく得意の絕頂だつたらう。それで、御承知の通り、大隈內閣の時は米價が下落して困り、政府が買ひ上げて値の維持策を講じたりし、寺內內閣となつては、あべこべに米が高くて米騷動と來た——その兩方ながら上山君が事實上の支配者としてにがい經驗をなめてをる。それゆゑとではないが、かれは米の問題については恐らく官界隨一の權威者であり、逝いた

友人下岡忠治君が朝鮮政務總監として朝鮮產米計畫をたてるや、かれは積年の研究を傾けて大分これを助力した。

かれは淋しい生涯の人だ。昨年夫人に死なれたが夫人は一人の子供も產んで行かなかつた。上山君の後天的健康によるものださうではあるが、かれはいま三田綱町のそれでも家賃にすれば百圓もすると思はれる陋屋に下女書生と共にやもめ暮し、鈎と碁と、讀書に鬱をやつてゐるが、或時浴衣姿で訪客に接し

『こんなりで失敬……これでも妻が生きてゐてくれたら、こんな風でお客さんに會ふこともあるまいが……』としんみり述懷したさうだ。

さういへば、白髮に童顏、何となくさびしい女性味を加へてゐるかに見える。從つて、かれに線の太い男性的痛快味を求めるは無理である。かはりに、律氣者で綱紀肅正家で品行方正の士で政治家にしては珍しく確實味を帶びてゐる。かつて町田忠治君の選擧應援に行つた時、町田君と共にのつた自動車賃の割前を出さうといつて候補者を恐縮させたといふ話しさへ殘る。

黨籍をおかぬのは伊澤君と同じだが、かれ多年憲政會のためにつくし、しかも酬いられることの薄かつた。東拓總裁、法制局長官、復興局長官、朝鮮政務總監、樞密顧問官等いろ〳〵な噂が立つたがこつちから斷つたのもあり、にほひだけで終つたのもある。兎に角二十八年出の同僚には

濱口、伊澤、幣原、下岡等の人々あるに、かれ一人、貴族院にくすぶつてゐるのは餘り悲境であると同情されてゐた矢先に、臺灣總督先づ結構と申すべきであらう。

だが、上山君個人としては同情にもあたひするし、確な人であり伊澤君の安心の基となるのであるが、植民地の總督としては果して如何？　確實味はあるが素晴らしさはない。臺灣檜で利權あさりはやらぬだらうが仕事が細か過ぎはせぬか。器局いさゝか小にして臺灣四百萬の荒つぽいところを心服させ得ぬとすれば？……尤も田、內田、伊澤の文官總督がいづれもみな大なり小なり臺灣に印象させた缺點ではあるが——。

よき官僚

湯淺倉平

『彼の男は官僚だ』といふことは、侮辱の意味に通用する。『彼の男は役人上りに似ず野趣を帶びて居て、黨人としても通用する』といへば役人といふものは侮辱するが、野趣や黨臭は尊敬すべきもの、樣に通用してゐる。

兩つの例を、憲政會黨員の口に徵して見ると頗る興味がある。新朝鮮政務總監湯淺倉平君が前者であり、前同じく政務總監故下岡忠治君が後者なのである。湯淺君は憲政會內閣で內務次官を勤めたが、彼等の所謂『官僚』で融通が利かん(湯淺君にいはせれば故意に利かせぬ)ものだから舉黨的排斥を受けたといつて加藤總理や、若槻內相には極めて信任されてゐたのであるけれど、自分の方で面白くなくて、留めるのも利かずに、さつさと辭職してしまつた。その後、加藤子が、三派協調內閣から單獨內閣を組織するに及んで法制局長官に招いたけれども、『いやぢや』と頭をふつて動かなかつた。彼れの肚では、『官僚といはゞいへ、融通が利かんとのろはゞのろへ、自分は政黨屋の手先になつて、利權屋に便利を與へたり、又はわからん奴等と酒をのんだりする樣な眞似は眞平御免。それで勤まらんのなら役人は金輪際御免を蒙むる』といふのである。

諸君も御存じの通り、彼れは世間的に、憲政會系とされてゐる。その前身同志會を組織した桂公と國を同じうする長閥である、故平田伯、一木宮相等を親分とし、大隈內閣と一木內相の下に警保局長となり、官を辭して勅選議員となつたのだから、外形的には明かに非政友、卽ち憲政系である。併も貴族院に於ては、憲政會の出張所の觀ある同成會に席を置いて居るのだから尙ほのことである。其の湯淺倉平君が、加藤子に內務次官の承認を與へて後、われ等に告白するには。

『自分は、內務省に歸つて行く。然しもう憲政會の御用を勤めなくばならぬ破目に立到つたら斷

然辭職するのみである』

こんな男だから、他の同僚や先輩が、義理や大臣慾から政黨に入つて行くのに、毅然として、『官僚』でゐるのである。思想的にいへば、讀書家である彼れは新時代人なのである。

『官僚政治は勿論いけない。政黨政治でなくてはならぬ。併も政治は人格の發露でなくてはならぬのだけれど、日本の現在の政黨は、何れを見ても嘘と、ごま化しで成り立つて居る。だから自分は政黨は嫌ひである。』

此の說は、われ等も共鳴する。味はふべき言である。

湯淺君は、生れは山口縣で燧灘の海岸であつて、父は康庵といふ醫者であつた、令兄の爲之助氏が、父の業をついで醫者となり、福島縣郡山に開業するに到つて本籍地をそこに轉じたものだから倉平君も共に(戶主令兄と)福島縣士族となつてゐる。でよく、素人記者などが興信錄か何か見て、君を福島縣出身者にしてしまふのである、實はチヤキ〳〵の長州系なのである。

三十一年大學出、滋賀縣の事務官をふり出しに、兵庫、鳥取、愛媛、長崎、神奈川を參事官や部長で流れ歩き、岡山、靜岡に知事として令名をはせてから大隈內閣の警保局長になつた。認められたのは、靜岡縣知事の時からだ、この時の物語りを書いて、其の人格を彷彿させて見る。

靜岡へ行つて見ると、阿部川堤防といふものがある。靜岡の市を水害から、殆ど永久に救つた

堤防で、靜岡の人はこれを『湯淺堤』と呼んでゐる。彼れが在任中三年計畫か何かで築いたのである。それが問題なのである。

靜岡は由來政友全盛の地であつた。それは確か大正三年頃であつたか、未曾有の大洪水が阿部川を襲ひ靜岡全市は泥漬けになつたことがある。そんな時でも政友會系の縣會議員達は『それ見ろ政友會に入らんものだから泥汁の御馳走に預かつたんだ』と嘲笑してゐたといふのは、早く政友會に入つてをきさへすれば、阿部川の堤防もとうの昔に出來てゐるのに、といふ意味なのである。如何に黨勢擴張がひどいかは判る。

そこで、新任の湯淺知事は、これはいかん、是が非でも堤防を築かなければならん、といふので其の豫算を縣會に提出したけれど何分政友會の議員が頑張つてゐて通過させんのみか、遂に否決してしまつた。かうなつては默つてゐられぬ剛直强氣一天張の倉平知事は、其晩の夜行で上京して、一木內務大臣に會つて、知事に許されたる最後の權能たる、原案執行の許可を得てしまつた。それとはしらぬ縣會議員共は、勝ちほこつた勢ひで旗亭に酒を汲み、

『だが、湯淺の奴、もし原案執行でもするといけないから、其の豫防に明日は上京して內務省の方を運動するがいゝ』といふ樣な策戰をこらしたのだが、何ぞしらん、其の時は湯淺君は東京に著いた頃であつた。其の翌日の縣會は原案執行にギアフンとなつたのである。

も一つ彼れの鼻つ張の强い話しをする。これも縣會だが、さはらといふ魚をとる流し網を使つて見ようといふので、其の試驗費用數百圓縣會に豫算として出したところが、富士の山麓から出てゐる何とかいふ議員が、質問に名をかりて反對がましいことを唱へた。ムッと來た湯淺知事の答辯が振つてゐる。『不肖私は燧灘の海岸に生れて人となりました。富士山麓の御住人よりは漁業に就ては詳しい積りであります』

此人にして此皮肉ありと微笑される次第である。

湯淺君夫婦が靜岡の知事官舍に住まつてゐる頃の事である。今は貴族院の新人となり濟した二荒芳德伯が、理事官として湯淺君の下にゐた。そして、北白川宮弘子女王殿下を迎へて其の室としたのである。主人は世の中を餘り知らぬ若人、夫人は、それこそ世の中を殆ど全く知らないお方である。そこで、湯淺君は愛妻に內命を下した。

『お前は弘子の方の指導役になるがいゝ。そして世の中の實際をお見せ申して將來にそなへる樣にして上げるがいゝ』

『自分は二荒君の上官である。上官と下級の官吏である。けれども夫人は皇族から降されたやんごとなきお方である。』とそこにも、けじめを、彼はつけて考へたことであらう。

この靜岡で、弘子の方は世の中を知つた。二荒伯夫妻が『新人夫婦』となるには、湯淺夫妻の

盡力が與かつて力ある。二荒君は今でもこれを德としてゐるといふことである。

官僚味たつぷりの人格であるから人間もゴツゴツしてゐるだらうと思ふといさゝか違ふ。其の趣味の第一には釣りがあげられる。第二には芝居が數へられる。第三には骨董や將棋といふ老人じみたものも入るのである。釣りにかけては例の『燧灘の海に育つた』自信で講釋は却々面倒で手並も素人ばなれをしてゐること勿論、品川の沖あたりへ舟を出して悠々糸を垂れて居る圖は、官僚湯淺ではなく、太公望に扮した倉さんの感がある。

芝居は好きでよく見に歩く、見ては泣いて歩く、從つて通である。酒も可成りの豪の者であるが酒に附隨して考へられる不品行な道樂の如きは全然無關係であるから糟糠の妻に心配をかける必要は更にない、たつた一人のお孃さんは既に嫁して夫婦水入らずといふ閑靜な生活である。

次の道樂たる骨董で思ひ出したが、湯淺君は地方官出稼ぎで流れ歩いてゐる中、『骨董は嫌ひだ』と宣傳したものである。何故好きなものを嫌ひだと、あの嘘の嫌ひな剛直漢が云ふのであらう、それには曰くがある。もし余は骨董趣味を有す、なんぞと知れやうものなら贈賄行爲に骨董を使はれる。金品など持つて來るのなら、頭から『それは怪しからぬ』と突返しも出來るけれども僞物か眞物か分らぬやうな掛物でも持つて來て、『暫くお床にかけて頂きませう』などとやられる、眞逆野暮にそれはならぬと云はれもされずといふのである。

犬養毅と古嶋一雄

木堂と古一念は、去つていつた。現實政界に安住の地位を求め得ず、蓮にのつて極樂へ流れて行く樣に漂然として政界を去つた。かうして、二人は、はじめてその本來の面目に立ちかへつた。

政友會には入つて『更生』するとは嘘ではあつたが、今度こそは嘘いつはりのない『更生』だ。體に合はないフロックコートをぬぎすてゝゆかた一枚の腕まくり、自由氣まゝに野人ぶりを發揮するだらう、大石正巳がまた二人ふえたわけだ。

野人木堂といへども大臣の味は惡くない。古一念といへども、次官用の上等自動車に身をつゝむ氣持ちは滿更ではなかつた。けれども本來柄にない着物を着てゐては窮屈で仕樣がない。

『俺は浴衣かけが氣樂でいゝ』とさとつた所に、自由人、木堂、古一念のすつきりした野趣がある。

われ等は政革合同に走つた木堂に對して一掬同情の涙をそゝいでをいた。しかして彼れは、子分共を安住の地位に託して、親はなくとも子は育つ、と見込みがつくに至れば必ず政界を引退するであらう、と豫言してをいたのだが、矢張り木堂の心事はこゝに出發してゐたことがわかる。

わかると共に木堂は矢張り苦節三十年民軍の第一線に立ち、閥族、軍閥に反抗の牙をむいて來たその眞面目が立つといふものだ。

古島一雄君と木堂の因緣は隨分古い、國民黨、革新倶樂部、といへば、犬養、古島の別名かの如き觀があつた。最初、古島君が犬養氏を訪ふた動機は、犬養氏の非違をせめて、まかり間違へば頭のひとつも毆りつけて引揚げてくる積もりで行つたのだといふ話しを、かつて古島君からきいたことがある。それが、悉皆木堂にはまりこんでしまひ、木堂を立てる爲には、あらゆる自分の利益を犧牲にし、全く陰の人となつて今日に及んだのだ、木堂卽ち古一念、古一念卽ち木堂、新しい言葉でいへばベタァ・ハーフの最もよき見本であつた。夫婦は、仲よく苦勞にたへて來た。仲よく涙を拂つて政友會に入つて行つた、そして仲よく政界を引退した。尤も木堂丈けは、岡山の若者が勝手に當選さしたから形は代議士であるが、心は矢張り引退人で、次の選擧は必ず出ないといつてゐる。

話しは古い、大隈の條約改正騷ぎのころ、古島は日本新聞の編輯長であつた。條約改正に反對であつた。政黨內閣主義を認めなかつた善政主義と號して超然內閣を歡迎してゐた。

木堂は、改進黨の立て物であつて、勿論、政黨內閣論の急先鋒であり、條約改正の主張者である。古島輩の保守思想に目をくれるひまもない。

古島編輯長は、或日まかり間ちがへばなぐりつける氣で木堂を訪うた。現在の條約をまづまるがいゝ、然る後徐ろに改正しようではないか、餘り毛唐人共の御機嫌をとるのは、日本魂が泣く……と、尊王攘夷みたいな議論をしむけたのである。

こゝで、かれは木堂のしゆんびんさに叩かれた相だ。木堂はいつた。(多分膝を進めてゐたらう)

『宜しい。條約勵行贊成しよう、だが、お前の新聞の超然內閣主義はどうする?』

痛い所をチョイと小突かれて、かれは參つた。

古島君は『一寸待つて下さい』とて日本新聞に歸つて來て、陸羯南、三宅雪嶺等に話したところが、『よろしい』といふので相談がまとまつた。

卽ち犬養の面目を立てるためには自主的外交主義をたて、日本新聞の面目を保持するためには、政黨內閣とまでは進まないで、責任內閣主義といふ文字を發明して、これで犬養とむすんだ。これがそも〳〵犬養、古島なれそめの段である。

かうしてだん〳〵つき合つてゐるうちに孫逸仙の第一革命が支那に始まつた。彼れ等は、これをたすけやうといふ相談をして押し進めたが、そのうちに中村彌六と犬養が喧嘩をおつぱじめた。何でも事柄は、支那へ鐵砲を賣りこむとか、くれるとかいふことで意見の相違からであつたが、

その喧嘩の中へ古島が仲裁に飛びこんだ。

こゝで、かれは、更に犬養にはまりこんだ、といふのは、かれが決して利權屋でなかつたこと、世評とは全くちがつて高潔な人格の持ち主であることを知つたのだ。(とかれがいふのである)。

『かういふ人は助けなければならん。』

と、例の江戸つ子と、芝居で泣く性情とが、忽ち混線して、遮二無二木堂信者となつてしまつた。前にはその智に打たれ、いまはこの心事に打たる。はまりこむには恰好なうたれ方である。

木堂翁の公生涯は今更紹介すべく餘りに知れわたつてゐる。今や七十一にして、政治生活を退く。ふりかへつて七十一年前を見よう。

犬養仙太郎(幼名)が備中庭瀬町にうまれたのは、安政大地震の年卽ち二年であつた。安政年間は三百年鎖國の夢を破るべくペルリが黑船をひきゐて浦賀へ『砲聲一發』をやりに來た。吉田松陰が外遊の壯圖破れて捕はれた。井伊大老が勤王の志士を一網打盡した所謂安政の大獄が起つた。

みなこれ惰眠をむさぼつてゐた國民が維新の大業に直面すべく苦悶の時代であつた。七十一年目、かれが引退する必要を生じた大正の今日と事情は相通じる。

その安政にうまれた木堂は、うまれながらにして宿命的に叛逆破壞の性情をうけてゐたかも知れない。幼少のころ、兄貴と畑荒しに出たことがある。溫厚なる兄貴は百姓に怒鳴りつけられて

逃げたが、仙太郎は刀を拔き放つて作物を一層荒く切つてあるいたものだ。

また、漢學塾にかようてゐたころ、平民の子のくせに、侍の子弟を鼻であしらふ樣な傲然たる態度だつたものだから、にくまれッ子となつて屢々布團蒸しを食はせられた、けれども、彼れ仙太郎は會て『まゐつた』といはない。いぢめる方で根まけしてやめると『君等は大勢で、俺は一人だ、壓倒されはしたが、まけたのぢやない。』と蒼くなつて傲語しい〳〵したものだといふ。

三ッ子の魂百までもといふが、七十一まで終始一貫、閥族、元老に抗しつゞけた根性つ骨、少數黨でゐながら憲政會や政友會を引ずり廻した腕前——それは畑荒しと布團蒸しの延長ではあるまいか。

かうして、諸君、木堂は、とにもかくにも、會て元老の門に出入したことがなく、平民政治家、民衆政治家、政黨主義の政治家として一貫して來た。時に超然內閣と妥協したり、最も古い旣成政黨の軍門に降つたり、降つたと思ふ間もなく闊直彥氏のいはゆる捨子をして引退したり、主義の上に破綻は屢〻ある。けれど、木堂は人間なのだ。そこに涙があつたり悲憤があつたり、それが人間味と申して生きてゐる證據なのである。ために功績を帳消しにする譯には行くまいではないか。

古島君に特筆すべきは、『理想選擧』の發明者で、その元祖であることだ。

時は鳩山和夫氏の補缺選擧、内田良平、住々木蒙古、田中舍身、頭山滿等の浪人は『この際古島を代議士にしようぢやないか』と相談一決これを彼れに持ちかけた所『そいつあこまる。兎に角犬養に話してくれ』と返事をするなり、すぐに犬養氏へ手紙を出して『實はかういふ話しだが自分はいやだから、使ひがいつたら不贊成の旨を返事してもらひたい』

と書き送つたのだが、使ひの方が先に行つてゐて、木堂は『それやいゝ、是非出してくれ』といふ風に相談が纏まつた後だつた。

『俺はその時分萬朝にゐたんだが、代議士かせぎなんかやる積もりはない、一生新聞記者をやる積もりだつたよ』

と古一念は、隱退聲明書を發表した日に感慨無量といつた思ひ入れで述懷したことである。

さて木堂の贊成を得るや浪人達は三浦觀樹を引張り出して推薦式をやつた。場所は多分神田の松本亭だつたらう。

頭山翁が、古島推薦の辭を述べた後で觀樹將軍が贊成の意を說く、曰く

『此奴は、決して惡いことするやうな男ぢやない、もし萬一したら俺が殺してしまふ』

隨分荒つぽい贊成演說もあつたものだ。

さて天晴れ候補者にはなつたが、選擧費はびた一文ない。早速頭山滿翁の五十圓を手初めに寄

附金が集まり、全部八百五十圓の費用で古島君發明の『理想選擧』は美事成功した。以來六回の選擧に戸別訪問といふものを、東京の眞ん中でしたことのないといふ珍物である。

その選擧も、もう必要がなくなつた。いさゝか淋しい氣がしないでもない。さびしいけれどもすがすがしい姿だ。

近衞・有馬・三木・鳩山

一

題して近衞・有馬・三木・鳩山といふ。近衞は公爵文麿、研究會の大看板、有馬は伯爵嗣子、宮家から奥方を頂戴して居る御曹子名を賴寧といふ。三木は武吉といひ、新名物泥の東京の大御所、鳩山は一郎と稱し、三木以前東京市政の實權を握つてゐた男である。併せて片や憲政、片や政友會の中樞、將來疑問の男。

政界はクロスワードの如し、將來の展開如何、これを解く鍵は近衞・有馬に華胄界を委せ、三木・鳩山に平民級を委せて宜しからうといふのが筆者の見立てなのである。

成る程、有馬は議席を衆議院にもつてゐるから貴族院的人物ではないといふかも知れぬ、けれども核心的に之を觀るならば、彼は政友會所屬衆議院議員としては場違ひである。現在の外形的事實を一歩超えて內容專賣で行くに、彼れは將來必ず貴族院に入るべく運命づけられてゐる。父賴萬伯は何時迄も生きてゐない。襲爵する。宮樣から姫樣が降嫁してゐるから、宮內省との關係がやかましくて辭爵して平民になることは、餘程のことでないと能きない相談でもあり、敢てする必要もない。選擧法を改正すると否とに拘らず、彼れはやがて貴族院の一人物となるに違ひない。

近衛は公卿華族のピン公爵、貴族院第一の家柄である。三十六や七の青年にして、尙且つ老政客と伍し、若槻と床次の間をとり持ち、怪物の水野直と待合の奧座敷に策をめぐらす。既に、形に於ては日本第一流の政客(敢て政治家と申さず)である。——ゆえんのものは何ぞや？　曰く家柄と、西園寺の尻押しである。もしも、一切合切皮をむいて平民にし、裸かにして見たら、せいぐ〳〵內務省の高等官五等事務官位がお格好のところであらう。すなはち、近衛の政客たるは、ハンヂキャップづきでありこれが更にプレミアムとなつてはやされる。けれど、故に彼れに何等の存在價値がないといふでは決してない。彼れの裸よりもハンヂキャップ卽ちプレミアムによつて非常なる興味をわれ等に與へる點に於て優秀な存在である。彼を論ずるに衣と裸とを區別して其

の各〻を見ようとするは、繪心のない素人の批評家であらう。

二

有馬は半ば生れながらの周圍境遇、半ば自分自身が築き上げた力によるプレミアム附で市場にもてはやされる。近衛の『生れながらにして』一方とは趣を異にし對照的興味を加へる。近衛は公爵であるが、彼は未だ無爵で、所謂五位樣である。北白川宮家から夫人を迎へてゐるから、家柄としては伯爵でこそあれ近衛に劣らない、純個の貴族である。(近衛夫人は男爵黑田長和の妹、戀仲であり結婚には家柄の相違から反對があつた)。それで、近衛が貴族院の大集團研究會の表看板になつて嬉しがつて飛び廻つてゐるに對し、有馬は農民運動や部落融和運動に熱中してゐる。研究會が近衛の家柄と、背景の西園寺を利用しようとすれば、政友會は有馬についた部落の勢力や農民階級に對する人氣やに目をつける。二人共利用されるに便利であるが、たゞ利用されるに便利にしてこちらから利用するに損得のあるは、近衛にまわり合せよく、有馬に惡い。前者は一流の政客の如く走り廻れるに對し後者は結局水に落ちた油だから、よく調子が取れない。合はぬものは仕方がない。仕方のない所にゐるのは損と知つたら飛び出すがいゝが、矢張り居るから、何處ぞに便利があるのかも知れぬ。

近衛の方が有馬より年は七ツ程若いが人間は利巧だ。その一例をあげて見るなら、彼れが西園

寺に隨行して巴里講和會議に行つた時分、世界の大勢やら、佛國の自由主義的な氣風や、國際會議では常にキャスチングヴォトを握つてゐる米國の『平民』力に感動した故でもあり、今にして思へばお坊つちやん元氣のいたりではあるが、日本へ歸つたら辭爵して社會運動の第一線に乘り出すなどゝ雄々しき哉理想家ぶりを吹聽に及んだものだが、今ではケロリ閑として天晴れ政治家を氣取つてゐる。

由來辭爵などは、高橋是清の場合にしてからがお芝居である。まして、公卿に生れて裸一貫の苦勞を知らぬものが、辭爵して裸かなどになれば、却つて世の中の厄介者になる。公爵で役に立つものが裸になつて厄介者になる責任や義務はない筈である。これを悟つたか、又は、すつかりいゝ心持になつたので忘れたか、兎に角、近衛は利巧に立廻つてゐる。そして何等の煩悶もなくたゞ『政客』達成に精進してゐるかに見える。

一方有馬は、趣味感情に於て貴族でありながら、思想傾向に於てはプロである。此の矛盾が每に彼れの內に戰つてゐる。日比谷公園の草取りをやつて世間の問題になつたのも、しかし彼れ自身に於ては眞面目である。部落融和遊動に一生懸命になつて、お道樂だといはれるのも彼れにとては、思想的大問題である。世間は、一種のひが目で『華族』を見る。

何にもせずにをればいゝ五位樣であり、世間から買ひかぶられたり、誤解されたりしなくてもいゝものを、何かしなくては居られない、それがしかも『貴族』に對する民衆の觀念と甚だかけ離れたことをやるものだから好奇心で見られたり、其の結果一種の神聖さをかぶされたり、勝手に着せた神聖さに勝手に失望して見たり、……有馬といふ一個の情熱詩人の境地から見れば、いゝ有難迷惑でなくてはならない。

三

近衛は女にかけて可成り道樂者である。それは人が知つてゐるに拘らず、問題となつて、彼れを評價する爲めの惡材料にならないのは少くとも有馬より得をして居る。有馬は柳暗花明の街に出入することはするが寧ろ臆病である。東京に於て艶聞をきかず、遠い福岡で初めて聞いたのは近衛の行き方と趣を異にする。そしてそれが問題となつた。近衛は最初から社會運動家を以て立たない。政客に女道樂は附物と日本人は考へてゐる。從つて金のある華族の青年が何處で何ういふ女をどうしようと問題ではない。有馬は社會運動家としての確實な地歩を占めた。社會運動をする者は決して女のゐる酒の街に足を踏み入れてはならない——これが民衆の觀念だ。だから有馬は偶像となつてゐなければならぬ苦しい破目に陷つた。熱情詩人が本質である彼れの新しい煩悶が、其處に又起きて來るのは當然である。そこで有馬は政治家にならうとした。政治家は偶像ではない。生きた人間である。自由である。一つやつつけろ！　彼れは人間になりたい心と民衆

意識とに刺激されて衆議院に入つて來た。

彼れの親父や舊臣共や、まして宮内省の役人共はどうも有馬の行動に危險を感じてゐる。代議士に打つて出るなどあられもない、と止めもした。どうか階級闘爭を助長するやうな運動をしたり、演說をして歩くことはおやめ、を願ひもした。藝妓を買つたり道樂遊びを機嫌よくやつてゐて貰ひさへすればお家安泰である。五位樣のお道樂費位はいくらも出しますのだが、この境地に安住するには有馬は餘りに情熱に過ぎる。

有馬は日本橋に生れ、淺草に育つた江戸ッ子である。山の手の奥育ちの華族と趣を異にする原因は、育ちの環境にも原因してゐる。

四

近衛は思想傾向からいへば、華族中の新人といふところである。その住宅にあらはれたところに見るも豪壯華美を嫌ひ、所謂文化的樣式を攝つてゐる。性情に見るもすつきりした味はひがある。同じ華族でも成り上り者や、貧乏武士のなれの果てとは違つて、公卿の血は爭はれぬ。たゞ先代近衛篤麿は支那浪人と伍して對支策に熱し、國士としての氣慨にあふれてゐたが、今のはゴルフ場に行つて若槻に玉の打ち方を敎へる位がお手前で、政治といふても極く手近かな內政にいくらかの理解と地位とを占め、政府に使はれ、青木、水野に使はれるといふ程度を出ない。といつて人間が小笠原長幹のやうに馬鹿なくせに圖々しくて鼻持ちならぬといふではないが、何しろ若いのに煽てるものだから勢ひいゝ心持となつてともすれば內省と貴重なる思索を缺くに到る。

『貴族』としての二人を遠望すれば甚だ似たものであるけれども、近よつてよく見れば大變な相違である。しかも遂に二人共日本の貴族としての血に生き、そして死ぬであらう。何年かの後、かれ等の如き若いのが、貴族院の中心勢力となる時代が來るにも違ひないと思ふのだが、さてその曉に、近衛式と有馬式、いづれが珍重されるか、これが筆者の興味である。片や典型的華族。片や華族の型破り——その國家社會に與ふる影響等のことについては、此際何にもいはずにおく方が便利であると考へる。

五

鳩山一郎は舊勢力と新勢力の中間に立つて獨自の位置を政友會に占めて居る。舊きは餘りに時代とかけはなれ、新らしきは餘りにお先走りである。彼れの明るい存在は、實はその中間性にある。

三木武吉は、官僚單純無力家揃ひの憲政會にあつて、黨人、策略、實力の持主であるが故に一頭地をぬきんでて光る。鳩山が憲政會に入つたら光薄く、三木が政友會に入らば極めてあたり前の人物と化するかも知れぬ、此處に於て兩々各々其の居る所を得た者と見る。

鳩山に官僚生活の經驗を加へ茫洋たる風格を除いて憲政會にほうりこめば恰好な憲政型の人物

が出來上る。三木は、そのまゝ政友會に移しても、自由黨型、三多摩型の政友會員になれる。鳩山は君子型であり、三木は野人型である。前者は上品なるカステーラの如く、後者は駄菓子の如く腹にたまる。由來政友會型はねばりの强い熱氣のあふれた點に特徴がある。星亨、原敬、横田千之助は其の好典型であり、伊藤博文、西園寺公望高橋是清は政友型としてはポプユラーでない。鳩山は、もし出來上がれば非ポプユラーと典型的の新境を拓いて行く。こゝにも中間性が在る。上置きになる素質がある。三木は、いまの所あくがぬけてゐないから上置きになる代物ではなくて、上置の下に策の人實力の人として働らくに適當してゐる。

伊澤多喜男や西久保弘道を代理人的東京市長にして自分は實權を握るといふ圖面は誠に恰好上乘であつて、もし進んで自分が市長にならうとすれば世の反感を表面から引き受けて刺されかねない。三木は目先きが見え、潮流の中心が解り、人心が見透せるから、さ樣な馬鹿な眞似をしない。野心も稚氣もあるが、然しそれより實利を得とする。

鳩山には天性の茫洋さがあるけれど、三木には後天的に作られた茫洋さしかない。この點で既に鳩山が大きく、三木は劣る。けれども、力の點に於て三木は鳩山のはるか上を行つて居る。力は磐根錯節の士にして始めて完全なるを見る。三木はそれだ。

六

三木は生れが高松の貧乏町人生れ、故郷の中學で夜なきうどんの食ひにげをやつて退校され損じた痛快さ、早稻田にゐる時分、煙草屋の娘を競爭して遂に勝利を博した事蹟や、何とかいふ待合の女將を手に入れた腕前やに徵しても彼れが腕一本で叩きあげた實力家たることはわかる。更に東京の眞中で極どい選擧をやりつゞけ、宣傳の妙によつて勝ちつゞけた頭のはたらき、更に進んで、院外團を引き具して東京市を占領した腕前に到つては、四十二や三の若者にして、たかが政務官位の位置でゐながら……目を見はつて感嘆せざるを得ない。面憎い程實力を持つてゐる、頭のいゝことに於て、彼れ程の者を餘り見ない。それは、一時彌次將軍で賣つた頃にも既にわかるが三木の彌次は決して單なる罵倒や亂暴ではない、蛇の如くねらひを定めて敵の急所をぐいと嚙んで一氣に倒す。ねらひは必ず適中した。頭が鈍くては出來ぬ相談。

鳩山は、三木と異つて育ちが上品である。故和夫博士の長男と生れ、世の所謂賢母春子に育てられた。大學を出る頃迄は順調坦々たる人生の大道を歩んでゐる。夜なきうどんの食ひ逃げもしなければ煙草屋の娘をはる、こともしてゐない。だから最近迄も尙ほ『親の光り』は彼れにつきまとふてゐた。もしも彼れに『親讓り』のハンヂキャップなかりせば、貧乏に育つてゐたら、春子さんのおせつかいが世の反感をかつて、一郎の災とならなかつたら、彼はもつと『力』に於て秀れてゐたかも知れない。(然し又世に現はれなかつたかも知れない。)兎に角、今は安全に一個の政

治家としての鳩山一郎が世の中に存在してゐる。三木より一期早く出て歳は一つ上の四十四である。これから先き三木が、よりのびるか、鳩山がぐんとヘビーをかけるか、それは時の運、黨の消長にもよるからわからないが、面白い勝負であるには違ひない。

七

思想的に解剖すれば、新時代を標準にして鳩山は保守的である。三木は保守も急進もない。實利卽主義といへよう。鳩山が、普選に對して毎に保守的態度をとつて來たのは、彼の選擧上の利害を超越した思想的結晶である。東京に選擧區を有する者が衆愚政治の聖典たる普選に保守して得のいくことは有り得まい。鳩山は勿論それを心得てゐる。けれどもかれにはどうしても疑問である。政治も藝術も宗教も凡て人による。人に信念なくんば卽ち亡びざるを得ない。鳩山の信念を買はねばならぬ。

三木は實際家である。臨機應變に出沒して世の荒波をのり切る。普選であらうがなからうが、貴族院が改革されようがしまいが、金がもうかつて自已の羽翼をのばすに便利であれば宜しい。此點に於て彼は鳩山よりはるかに勇者である。生まじつかな思索に煩はされてゐては實際政局の荒浪に拔手を切ることは出來ないからである。お道樂は金がたまつてのことゝ考へる。

鳩山はものやさしき顏をしてゐる、三木は一見嚙みつき相な表情をしてゐる。けれども三木は

辯說の喧嘩以外に腕の喧嘩を買つて出る男ではない。議院內の生活に於て彼れはたゞ彌次り飛ばす丈けであり、もしくは暴れ者を指揮する丈けである。かうしてゐれば自分は決して傷つかない利巧なやり方である。鳩山は、彌次りもしない。分別顏をしてゐる。けれども、いざとなれば腕を振ふ。大隈首相を壇上に襲擊したこともあれば、今では三木の敵役となつてゐる鈴木富士彌の言舌の無禮に酬ゆるに、鐵腕を振つて理論を超越したこともある。

鳩山には押しと熱意が足りない。それでゐて何處かに典雅な味はひがある。人間としての彼れの身上であつて、政友會內でも又、他の政客の間でも彼れの人望は三木を遙かにぬいてゐる。『將來ものにしてやりたい』と期する者は、先輩の中にも可成り多い。三木は此點全然反對である。『腕一本さあ來い』は反感を買ふ。先輩は彼れを恐れ排斥する。たゞ院外團的乾分供は彼の意の儘にうごかざるを得ない樣にしてある。鳩山は半ば他力でのび三木は自力で生きるより仕方がない。——鳩山には迷ひがある。三木は惑はず只進む。

さて何ういふ風にのびて行くか？　或は挫折するか、われ等の興味をつなぐゆゑんは兩人共全くの黨人である點である。政黨政治卽理想政治といふ哲學の前提の下に、黨人が如何に苦勞し如何に生き、如何にのび、折れるか、は貴族政治家が如何に消長するかの問題と竝んで可成りの興味と期待の存するところである。

大政治家とその懷刀

加藤高明

『政治家とその懷刀』と云ふのであるが、先づ最近物故した加藤高明伯をその筆頭にあげて見よう。

加藤と云ふ人は諸君も御承知の通り、憲政會と云ふ政黨はもつてはゐたけれども、彼れ性來甚だしく政黨員と云ふものを嫌つた。そこで江木翼と云ふ官僚出の事務家を、その懷刀として用ゐたのであるが、江木は桂第三次內閣、大隈內閣以來加藤と親交があり、その才腕に對して加藤は深くこれを信賴してゐた。そこで憲政會黨務のことについては、殆んどこれを江木に一任してをつた形である。

江木は一面事務家であるが、一面また政治家を以て自ら任じ、中々の策士であり、隨つて抱擁力をも出さうとした。だからして御大加藤に代つて黨務の處理を一人で引受けたつもりになつてをつたけれども、その成績は甚だ芳ばしくなかつたこと、諸君の御承知の通りである。しかし加

藤が江木を懷刀として用ゐたと云ふ事實は爭へない。

次に仙石貢、これが加藤の夫人の出である三菱と同じ土佐の出身で、三菱とは非常に深い關係を持ち、諒解をもつてをる。

そこで加藤が內閣を組織する時に、仙石は吾れ自ら進んで入閣し、加藤の出來ない業である所の、三菱から金を引出す用を承はつたのである。故に加藤は仙石に對しては、一目も二目もおいてをつた。

仙石を內輪の番頭とするならば、若槻禮次郎は外廻りの番頭であつた。若槻は圓轉滑脫、貴族院に對しても、反對黨である政友會に對しても、又は中間黨である政友本黨に對しても、極めてあたりのよい人間である。交涉が圓滿に行く、その上頭腦が非常に銳利で、綿密で、いやしくもおろそかにしないと云ふたちなので、これを代理として外廻りをさせておけば、失敗すると云ふことはない。と云ふことを加藤は深く信じてをつた。故に加藤內閣の副總理として、若槻は十分な活動をしたのである。

そこで斯う云ふことになると、自然加藤は若槻に對して、二目も三目もおかなければならぬ羽目に陷つたことは、これは未だ世間に發表されてゐない事實である。曾つて斯う云ふ例がある。加藤と若槻と東北遊覽に出掛けたことがある。その汽車中で加藤は秘書官松本を通じて若槻に午

鑿を一しよに攝らうと云ふことを申出した。所が若槻はその時少し旋頭が曲つてをつた。それで晝飯は一しよにやりませぬと云ふことをその秘書官木村小左衛門をして答へしめたことがある。その間に挾つた木村は非常にその返答をもつて行くことに苦しんで、『内務大臣は今一寸氣分が悪いから、どうぞ總理はお先へ上つて下さるやうに』と云ふことを、松本へもつて行つたと云ふ話がある。斯う云ふ風に若槻は可なり加藤に對しては、我儘を云つたものである。加藤もそれを知つてをつたけれども、若槻に對しては可なり忍んでをつたらしく見える。

加藤の懷刀と云ふのは以上三人であらう。その外濱口とか、安達とか云ふものは、また別な意味で懷刀ではあつたらうけれど、錆刀の方であつたに違ひないと思ふ。

原　敬

原敬の懷刀と稱すべき筆頭は、法制局長官横田千之助であつた。その次には内閣書記官長高橋光威、この二人であつた。

横田は當選五回にして大臣になつたと云ふ、レコード破りの天才であつたからして、原はその天才を非常に重く用ゐたが、その原因は横田は第一情熱をもつてゐた。第二に尻が輕く、栗鼠のやうに飛び廻ることを辭せなかつた。第三は彼は定石を行く男であつた。貴族院の人に對しても

或ひは黨内の人に對しても、先輩は先輩としてこれを尊敬して取入れ、後輩は後輩としてこれを愛して自分に引つけると云ふ風で、上にも下にも中心勢力を自分に引つけてをつた。

そこで深くこれを信じた原は、彼のワシントン會議に際しては、自分の代理、或ひはお目附役として、これを米國に派遣した。恰も會議の最中に原が東京驛頭中岡艮一の兇刃に倒れたのであるが、その凶報をワシントンにおいて受取つた横田は、流石の剛膽にも似ず昏倒せん許りに驚いたと云ふのはさもありなんと思はるゝ次第である。

本來ならば書記官長である高橋光威が一番番頭である筈であつたが、高橋は極めて秘密を守れる男で隨つて性格が小さい。故にこれを高等鞄持として使ふには甚だ重寶であつたが、偖、外廻りのお使ひ番にするには、遙かに横田の下位にあつた。だから横田を外廻りの大番頭として高橋を内輪の金庫番と云ふ風な役に見立てゝ、二人を懷刀に使つたのである。

横田にはともすれば危ッ氣があつた。新聞記者などに對して秘密を洩らす恐れがあつた。けれど高橋にはそれが絶體になかつた。その兩者の特徴を原はよく呑み込んでをつて、この二刀を使ひ分けた所は流石に一代の傑物であると、感服せざるを得ない。

尚ほ貴族院方面の水野直、衆議院方面の榊田清兵衛の二人は、稍々從の刀ではあつたが、これはまた何れかの機會に述べることにする。

伊藤博文

伊藤の懐刀は末松謙澄、金子堅太郎の二人の大頭であるが、今は現存してをる伊東巳代治伯を話題に上せる。

伊東はその政治的門出からして、伊藤公の鞄持ちであつた。公伊藤が内閣總理大臣になる度に彼はその書記官長を勤めた。

現在でもさうであるが、大臣の御機嫌を伺はうと云ふものは、先づその鞄持ちに取入らなければならぬ。その原則に隨つて巳代治は政界のあらゆる方面から、仲介手段として御機嫌を伺はれた。所が御本尊の博文は博文で、大概なことは巳代治に委せきりで、何か六ケしい問題でももつて行くと『それは巳代治に相談をしてくれ』かう云ひ云ひしたものである。そこで勢ひ巳代治の玄關は非常な繁昌をしたものである。閣僚でさへも總理大臣に相談する前に、先づ巳代治に下相談をしなければならなかつたやうな有樣である。からして巳代治の勢力と云ふものは、彌が上にも增さざるを得ない。

で、今でも林田龜太郎あたりは笑ひ話に云ふことであるが、當時巳代治が總理大臣であるか、博文が書記官長であるかと云ふことは、よく考へて見なければ分らぬ程であつた。大臣を叱りつけたり、總理大臣をたしなめたり、巳代治はあらゆる勝手な眞似をしたものである。それでも博文は笑つて巳代治の爲すがまゝに委してをつた。博文の大きな所でもあつたらうが、巳代治は實に幸福者であつた。

今銀座街頭に所謂伊東ビルディングなるものがある。それは舊東京日々新聞の敷地であつだ。評價すれば凡そ二百萬圓の財產であらう。當時伊藤博文と井上馨とが相談をして、政府の機關新聞をそこに建てたのであるが、その費用の出所は勿論官費であつた。そして、斯くの如き寧ろ惡辣なる手段までも、伊藤博文は彼に許してをつたとも云へるのである。現代では綱紀肅正とか官紀振肅とか、色々攻擊をされて當時のやうな眞似は出來ないが、巳代治は洵に幸福な伊藤の懐刀であつた。

山縣有朋

山縣の懐刀を强ひて求むれば、故平田東助と、今の滿鐵社長安廣伴一郎であらう。

山縣は御承知の通り官僚の本家本元である。安廣も平田も山縣系の官僚として政界に覇をとなへたものである。安廣のことはさておいて、平田のことだけを申し述ぶれば、彼は生れは米澤で長州ではないが、山縣に使はれたばかりに長閥官僚として傳へられてをる。それはさておき山縣

が何故平田東助を重用したかと云ふに、先づ山縣が內務大臣になつた當時のことである。

平田はその當時は洋行歸りのホヤホヤ肩書には法學博士がついてをつた所謂新知識で、若々しい青年官僚のチヤキチヤキであつた。そこで山縣は自分の方寸を立てるについては、悉く平田の意見を徵したものである。

由來山縣と云ふ人は軍人に似ず民衆的な頭腦をもつてゐた。自分が政策を立てるに際しては、自分の子分どもに先づ意見を徵することをもつて前提とした。假へば普通選擧法案を在野黨から提出したとすれば、山縣は先づその法案を精讀して、自分の意見をそれに書き加へ、それを平田東助に送り、そして平田の意見をそれに書き加へさせ、それを淨書させて安廣伴一郎へ廻し、これについてお前の意見を述べよと云つて、安廣の意見を徵する。以下田健治郎、寺內正毅等等あらゆる子分の意見を徵して、そしてそれを精讀した上、自分の最後の意見を決定すると云ふ風であつた。

山縣の最大なる功績と云ふものは讀者御承知の通り、日本における自治制の確立であつた。而してその當時內務行政に關しての新知識、權威と云ふものは、恐らく法學博士平田東助をもつてその第一人としたであらう。卽ち山縣は平田東助に自治制の案を立てさせ、それを自分が閲覽し大體においてこれで宜しいと云ふ決心をして、彼の自治制を布いたものである。

斯樣な風にして平田東助と云ふものは後世まで所謂山縣直系の政治家として盛名を保つたのであるが、その系統には今猶ほ官內大臣一木喜德郎あり、文部大臣岡田良平あり……等等等、官僚の勢力を維持してをる次第である。

若槻・田中・床次

現在の大政黨の首領、若槻憲政、田中政友、床次本黨の三君は果してどんな懷刀を持つてゐるか？　何れを見ても　Xである。由來利劍を使はうといふ者は、それ自身腕がさえてゐることを條件とする。どんな名刀でも、ひよろ〳〵した使手に合つては、切れるものではない。

若槻は、加藤の財產を不意にうけついだばかり、未だ總裁首領として黨內に自分の腹心をもたない儘で相續したし、田中にしても、婿である。新參である。たとへば腕がさえてゐたにしろ、どれが名劍であるか、判然わからない。更に床次に到つては、例の鳩山一郎だとか、吉植庄一郎だとか、更に中橋德五郎だとかいふ名刀をにがしてしまつた位である。思へば『大政治家』の粒は小さくなつたものである。何しろ『政策本位』を看板にかけて、官僚の任命である法理論や數字の計算に日もこれ足らずの今日だから無理もないが、「一人を以て興り一人を以て亡ぶ」といふ概の大人物が出て來ても決して邪魔にはなるまいではないか。如何！

警保局長の椅子

一

どうせ役人を志願したからには、總理大臣には何うでもいゝから、警保局長の椅子にだけは一度ついて見るがいゝ。役人と云へば決裁書にペタ〳〵と判を捺してゐるか、腰に辨當ダコの出來る程永い間腰辨をぶら下げて、朝の九時から夕方の四時迄勤めて、歸つて來ては子供の煩さく騷ぐマッチ箱の樣な家の中で、妻君に一本もつけて貰つて悅んで暮すか、又は賄賂でも取つて縛られて恩給を棒にふるか。まあ之が通り相場だ。

傍から見て生々してゐない。ピン〳〵してゐない。が然し警保局長といふ役丈けは働き甲斐もあるし、從つて人間らしいところがピチ〳〵と肉體中を巡つてゐる。朝の九時から夕は四時迄なんどと、意氣地のない月給根性を出さずに、何日何時で一年中働いてゐる。頭を使ふ。身體も疲れる。それで上からは小言を喰ふ、世間からは目の敵にされる。だが然し一度はやつて見るがいゝ役目だ。二度はやり度くない。三度は尙不可ない。三度警保局長をした男は未だ日本には無いが、二度やつた男に先づ第一に有松英義がある。有松は樞密顧問官に出世してゐるが、出世の振

り出しは實に、やり甲斐のある、と我輩の推稱する警保局長からである。

有松警保局長は第一次と第二次の桂內閣だ。第一次は芳川內相の下に、第二次は平田內相の下に、二度共後述の樣な手腕を見せた。古賀廉造も二度やつた。第一次西園寺內閣と第二次西園寺內閣と、而して二度共原の內相の下に働いたものだ。此男もわざ〳〵大連あたり迄收樞されに行く程知名の士に出世しきつたのだから間違ひはない。大浦兼武もつとめたことがあるし、清浦奎吾もやつたし、小松原英太郎もやつた。仲小路廉は第一次桂內閣の時に有松と代り合つてこの椅子に就き、之から叩き上げた男である。岡もやつたし、東京市長になつた永田秀次郎もやつた。貴族院勅選の湯淺倉平も大隈內閣でやつたし、滿鐵社長になつた川村竹治が湯地幸平に讓つて古賀の椅子を襲つた。

二

警保局長をやる者は出世する。出世する見込のない奴は此の椅子につけないのかも知れない。夫れが證據に警保局長は大概、前記の通り偉くなつてゐる。

內閣が代る時には、勅選になる者と相場が決つてゐるし、局長附の秘書(屬官)は郡長に出世する男と相場が定つて居るのだ。

今迄の例で、勅選とならない者が四人ある。夫れは最初の政友會內閣(伊藤公が最初總理で次

に西園寺公が代り、原敬が星亨の失脚した後を受けて遞相の位置に就き、加藤高明子が外務大臣になつた。)の末松内相の下に局長をしてゐた田中喜道が雲散霧消して終つたのと、それから大隈内閣の大浦内相の下に居た安河内、加藤内閣の後藤文夫、清浦内閣の藤沼庄平、之は無理がない。田中は別物の例外としても、又大隈の安河内の時には例の大浦事件で、大浦が隱退のやむなきに至り内相が一木喜德郎に代り、警保局長が安河内から湯淺に代らざるを得なくなつたので、安河内はほんとに馬鹿を見た譯だ。兩人共、同じく大浦が内相の時であつて見れば、大浦は警保局長を勅選になし得ざる内務大臣であつたとも云へる譯だ。後藤は自ら忌避し、藤沼はどういふわけか有りつけなかつた。

三

おなじ内務省の局長でも社會局とか地方局とか衛生局とか、土木局とかいふ所は勅選の約定などはない。又何の省の局長でも内閣が代れば内閣と一しよにやめて、而して直ぐに勅選になるといふ事もなければ、内務大臣が代つたから必ず休職になつたり轉任したりするといふ約定もないのである。

夫れ丈け彼等は『役人』であるのに、同じ内務省の一局長でも警保局長丈けは役人ばなれがして居る。政黨員である。勅任參事官だの參與官と同じく、役人、行政官といふよりも政務官である。

――職制にはそんな規定はない――。だから内閣乃至、内相直系の腹心でないと警保局長にはなれない。此處に、吾輩の云ふ面白味が在る。此處に、原敬を手ッ取り早く例に取つて見る。彼が最初と、二度目に採用した局長は、古賀だ。後には止む得ず首をチョン切つて、司法官の手に引渡したものゝ古賀、岡、阿部は共に原の三羽烏である事は誰も知り拔いてゐる。川村竹治も亦原の大のお氣に入りである。古賀の妻君も川村の細君も、原の細君淺子が三年越しの御病床には怠らずかしづいたものである。今度の湯地幸平も亦、原の鑑定で、政友會員としての籍こそ有しないが、政友會員である。

三羽烏の一羽、岡喜七郎は之れ亦山本内閣で原の下に警保局長を勤めて居るのである。誰の内閣でも然うだ。前にも云つたとほり、警保局長は内閣直屬の形である。他の局長などと同日の論に非ざる譯だ。

警保局長は内閣の探偵部長である。選擧の時、政變の時、議會開會中、局長先生は朝から晩迄情報の蒐集に骨身を碎いてゐる、劃策もする。秘密の運動もやる。其職制に在る所の所管事項の明文の如きは、全部之を課長連に委せて置て探偵に苦心し、如何にかして内閣に忠義を立てる事に沒頭するのである。政治警察局長である。此重要な椅子だから、腹心の者を据ゑ、やめる時には、あきを拵へておいた勅選にすげかへる道理だ。

政變。議會。反對黨、貴族院の陰謀等は皆東京に於て行はれる奴で、之を探偵するには警視廳と協同してやるし、御用通信社長だのゴロッキだのいろんな者を使ふ。機密費は政黨から持つて來る。選擧の時には、手下である所の各府縣の警察部長を集めて『公平に取締れ』と命ずる。其公平は不公平を意味する事であつて、若し文字通り公平に取締つたりしようものなら、迚も榮轉は望まれぬといふ事になる。而して警察部長の手から選擧の情報を徵る、內命する、劃策する、干涉させる。

局長が、最も手柄を現はすのは、此總選擧の時に在る。大隈內閣の時なら、大浦內相の下の安河內が警察部長を指揮する（と云つて勿論明ら樣に干涉の指揮をなする譯ではない。表面飽く迄『公平に〳〵』とオドシつける。）大浦と安達謙藏の下す內命に從つて地方の干涉をやり情報を集めるのである。此手心と腕のある男は、將來必ず大臣に出世する譯になるのだ。

此選擧裡の活躍は、山本內閣の原の內相の岡の警保局長時代以後劇しくなつた。政黨戰爭が劇しくなつたからであるが、づつと以前有名なる品川彌二郎內務大臣の選擧干涉（二十五年）の時は次官の白根專一が采配を振ひ、警保局長には大浦兼武がゐて大いに干涉に力を致したもので、大臣秘書官に江木衷がゐた筈だ。其時に、板垣の『板垣死すとも自由は死せず』事件が起きたのであつた。

四

斯くの如く警保局長の任務は內閣の運命に大なる關係を持つて居るのであるから、たゞの局長でない閣僚の樣な特別の位置にゐるのである。だから內閣がやめる時には、勞に酬ゆる爲めに、又一面內閣の機密に參畫した口ふさげの爲めに勅選にして而して其秘書の屬官は之れ亦郡長にして、口をふさぐのが慣例となつてゐる。

然らば何故に、警保局は內務省の一局にして置くのか？　最初は、警保局長が職制以外にこんな餘計（？）な仕事をしなくてもよかつたらうし、又すべきでもなかつたらう。政治警察の外に、外事警察もある。保安もある。思想もある。從つて出版物の取締りもある。といふ風に、國民に直接利害關係の大きい而して政黨などには（今の所）用のあるべからざる大事業がちやんとひかへて居るのである。全國の警察を內務大臣に代つてちやんちやん指揮して行つて、出版物の取締りをやつてゐれば、立派に行政官なる局長であるのだ。

近年思想問題と國際の關係とが密接で、露國や、朝鮮や、米國やをひかへて居るから、高等警察の仕事と、出版物の仕事が殊に目立つて大きい。外國の探偵、社會主義、無政府主義者の探偵に全力を盡しても尙ほ足らぬ上に出版物が非常に多い。

大正九年度の調べで、出版物が單行本一萬、雜誌二萬二千、が全部で三千五百種、又日刊が八